

十六年末には、議會の政府攻撃猛烈となり、事態重大ならんとする際、偶々陸相リオーターの辭職ありて、爲めに内閣全體の瓦解を來せり。

もと此のリオーター將軍と言へるは、佛國の海外領土統治者として令名を馳せたる剛直頑固なる軍人肌の人物なりき。即ち彼れは、モロッコに對する佛國の勢力を確實にすべき難事を遂行し、又北アフリカの回教國に對抗して強硬なる專制を執行し、或ひは歐洲諸國の東方政策に西方の文化主義を加味せるなど、其の經歷刮目に値ひするものありき。然れども、近來著るしく墮落して猜疑に滿てる議會に對して、彼れの如き專斷なる政策の調和しがたきは明白にして、殊に下院議員との應酬圓滑を缺き、答辯不親切なりとて甚だしく非難を受けたり。かくて彼れは、航空機製作に關する質問に際し、秘密會に於てすら、國防を危険ならしむるとの理由の下に、専門の議論を戦はす事を拒みしかば、左黨は憤然蹶起し、議會の秘密會議の結果、リオーターは、千九百十七年三月十四日辭職するに至り、三日の後、ブリアンは内閣改造も行はずして、内閣總辭職を決定せり。

佛國內地の物資缺乏

交戦列國に於ける物資缺乏は、共に免れざる事なりしが、特に、共に境を接して相戦へる獨佛兩國に於て國難甚だしきは、理の當然ならん。佛國にては、後方に聯合國の補給ありて、最初の二年間は別段の事なかりしも、千九百十六年より千九百十七年の冬に互り、聯合側の經濟歩調に缺くる所ありし爲め、忽ち國民の食糧に窮乏を起せり。かくて佛國民は、極端なる粗食を餘儀なくせられ、或は無肉日を設け、或ひは無菓子日を定めぬ。又石炭の節約は苛酷を極めぬ。是れ石炭は軍需品製造の爲め、其の需要甚だしく増加せるに加へて、佛國の東北部が、敵の侵略を受けて其の炭坑採掘不可能となり、更に坑夫其他の壯丁多く兵役に服せる爲め、採掘者甚だしく減少せる故なり。此の石炭拂底を補はん爲め、英國より百五十萬噸の供給を受くる約束なりしも、當時獨逸は潜水艇を使用して、聯合側船舶を撃沈せる最中なれば、之とても確實に信賴しがたし。而して食糧品店、藥品店は、午後六時限り閉店し、カフェーは九時半閉鎖すべく、劇場は一週四日開場せり。又巴里の地下鐵道は一週二日を除き、午後十時に運轉を止め、其他瓦斯、

電燈も著るしく使用を制限せられぬ。

但し、この如きは、何等根本的救済策を意味するにあらで、唯だ一時凌ぎの手段に過ぎず、其の十二月半ばに入りては、寒氣加はると共に、局面一層切迫し、巴里の電燈の如きは、最も窮乏し、又地方にては瓦斯の供給杜絶せり。従つて瓦斯工事の多くは、休止の状態となれり、其中石炭愈々缺乏して軍需品製作工廠も續々閉鎖するに至れり。當時石炭一噸、英國に於て五千志なるに、巴里にては十二磅に騰貴し、而も品不足の爲め、容易に手に入る、能はざる状態なり。やがて、千九百十七年に入り、一月二月の寒氣例年になく酷烈なりしかば、下層民は空腹と冷寒とを訴へて止まず、依つて各都市にては、公設市場を開きて薪炭を賣出し、國民劇場は、往年、英佛戦争同様、又も日用品販賣所に充てられたり。而も、購買者は、長蛇の列を作りて購買の順を待つに、物品に制限あるが故に、忽ち賣切れとなり、切符のみを得て次の購買日を待たざるべからず。其の頃の薪炭市場の混亂は甚だしく、巴里警察は、之が整理に忙殺せられ、其の各種事故の多きは前例なしと言はる。但し薪炭問題は、當然解決を得べきものなりしを、當局者豫め準備せざりし爲めなりとの非難多く、一方には食糧制限問題と相並んで、市況不振の叫びとな

り、其の三月ブリアン内閣の更迭も、一部此の點に原因せりと評せられぬ。

佛國婦人の奉公精神

英國婦人の意志強固に、飽迄快活に活動せるに比して、佛國婦人の戦時生活は、餘りに顯著なる對照を爲せり。佛人は、其の國土戰場となれる爲にや、一般に悲愁の色あり。英國にて忌まる、黒縮緬の喪章も、佛國の婦人には、一般に使用せられ、軍隊の送迎等も行はれず、軍歌も奏せず、軍隊が黙々として市中を通行すれば、市民亦黙々として之を凝視するのみ。されば、其の婦人も男子と職業上の競争軋轢を起す事もなく、又政府の爲めに制肘せらるゝ事もなく、産業界に向つて應分の貢獻を爲すこと、なれり。而して政府は、婦人の新參職工を訓練するの必要上、諸種の工藝學校を開設せり。是れ時宜に適せる寛大なる處置にして、政府は斯く用意周到なる態度に加ふるに、更に婦人の慈善事業方面にも、十分なる援助を與へぬ。従つて婦人の活動舞臺は擴大し、其の婦人團は、能く三萬の白國民の家族を集めて、是れに衣服を給し、或ひは其の兒童に學業を授け、又アルサス、ローレン二州の民五分の四に各自の生業を得しめたり。されば、是等

婦人團の指導者中には、「交戦國の財政力は婦人の勞働に負ふべきものにして、國民の將來は、新らしき業務に對する婦人の態度如何に依つてトせらる」とさへ主張せる者ありき。

リボー内閣

千九百十七年三月、ブリアン内閣倒れて第三次リボー内閣組織せられぬ。リボーは外相を兼ね、ギキアニ法相たり、パンルーエは陸相に任せられしも、此内閣も持久力乏しく、其秋に至り、内相マルギーが獨探事件に關係ありとの嫌疑を蒙り、九月初め辭職せしかば、茲に破綻を生じて、リボー内閣の瓦解となれり。是九月八日なり。此時大統領ボアンカレーは、リボーに再度内閣組織を命じたれども、統一社會黨の同意を得ずして事成らず、依つてパンルーエに内閣組織の命下れり。さればパンルーエは首相として陸相を兼ね、リボーを外相とせり。かくて、パンルーエは己れ社會共和黨の首領たるに加へて、民主共和黨、急進社會黨の後援を受けぬ。されど、統一社會黨を敵とせしかば、此の内閣は成立後僅か二ヶ月、即ち十一月十三日瓦解し、其十六日、佛國政界の重鎮たるクレマンソーの第二次内閣出現せり。クレマンソーは、八年前一たび内閣を組織して、佛國內閣長壽の新記録を作れる人、其の威望大にして、遂に能く大戰終決の難局を處理する事を得たり。

佛國の獨探問題

此頃佛國には、獨探騒ぎ頻々として起り、さきのリボー内閣之が爲に倒れ、又パンルーエ内閣倒潰も、一部は獨探問題に起因せしと言はる。前に述べたる、リボー内閣の内相マルギーの獨探關連といふは、其の頃、巴里の共和黨機關新聞社長アルメレーダが、内相マルギーと親交ありて數々往來せしが、彼れは獨逸マンハイムの銀行家マックスより五十萬法を得たる事實發見せられて世上の物議を醸せり。アルメレーダは、右金額を會社解散による分配金なりと辯解せり。其中、佛人デュヴァールなる者亦、彼のマックスより振出せる手形を得たりとて告發せられ、彼れはアルメレーダと共に逮捕せられしが、アルメレーダは獄中に頓死し、其死因に就いて種々風評を生ぜり。其結果、内相マルギーが、斯かる怪しき人物を放任して、其の非國民的行動を見遁がせしは、舉國一致を破壊せしむるものなりとの非難烈しく、内相マルギー遂に辭職せるなり。彼れ

マルギーは、戦時の内閣に内相たる事三年、急進黨の領袖たりしに、斯かる嫌疑にて突如辭職せる事、時のリボー内閣の互解を招けるなりき。

其後、レオン・ドーデーなる者、マルギーを賣國奴なりと罵り、「彼れはアルメレーダの一味と共に、佛國の軍事外交機密を獨逸政府に告げたり」と大統領に訴へぬ。マルギーは千九百十七年十月四日、佛國下院に於て、政府に質問演説を爲せる序に、ドーデーの告訴は、全然虚構の中傷なりと述べ、之に對して、リボー等亦マルギーの辯護演説を爲せり。其中形勢急轉して、バールエ内閣倒れ、クレマンソー内閣組織せられしが、十一月廿三日、マルギーは右事件は無根なりとの豫審決定を得たり。然れども、マルギーは、事己れの名譽に關するのみならず、世道人心に及ぼす影響大なる故に、己れ内相中、果して告發せらるべき行爲ありしや否やに付き、改めて審議委員を設けられたしと提議せり、此に於て、下院は三十三名の委員を任命して審議せしめしに、却つてマルギーが、佛國の軍事外交の計畫を敵國に通じ、且つ佛國軍隊の暴動を煽動して敵に利益を與へたるの嫌疑あるを認めたり。之が爲め、下院はマルギーを告發して上院の裁判に附する事となれり。千九百十八年八月に至り、此の告發事件は全然無罪なる事證明せられしも、

内相在職中、敵國と通ぜるアルメレーダ等を取締らざりし如き責任を問はれ、八月九日附を以て五ヶ年間の國外追放に處せられぬ。

右の外にも、獨探嫌疑を受けたる下院議員チユルメルあり。彼れは千九百十七年議院出席中、其の外套より瑞西國立銀行券千法價格のもの廿五枚を發見せられて、翌日告發せられたり。尙ほ一つの獨探事件として世上を騒がせるは、ボローなる者にして、彼れは開戰當初より獨逸員として知られ、瑞西に滯在中、埃及の亡命客アッバス・ヒルミ一派と連絡せり。而してアッバス・ヒルミは、獨逸の前外相フォン・ヤゴと往復し、佛國新聞買収計畫を助くる爲め、獨逸側より一ヶ月百萬マルク宛、一千萬マルク迄を支出せしむる約束を結べり。而も其の關係を晦まさん爲め、ボローは伊太利の前代議士某の手を経て約束金額を受領し、又一方には紐育市に在る獨逸銀行家パエンステットを介し、當時の駐米獨逸大使バルンスドルフより百七十萬弗を受取りと言はる。此事、瑞西駐在の佛國公使より本國政府に報告あり。依つて佛政府は千九百十七年二月より之が内情搜索を始め九月に至つてボローを逮捕し、審問の結果、罪狀明白となりしかば、軍法會議に於て死刑を宣告せり。ボローは控訴せしも理由なしとして却下せられ、遂に銃殺の刑に處せられぬ。ボ

ローの死刑宣告は千九百十八年二月にして、其の銃殺せられしは、同年四月十七日なりき。
更に之に關連して、曩に千九百十七年の夏迄内相の職に在りしマルギーも檢舉せられ、同時に
前首相カイヨーも嫌疑を蒙り、同年十二月二十二日代議士の資格を剝奪せられて拘留處分を受け
たり。かくてカイヨーは賣國事件の被告として元老院の審問を受くる身となりしが、元老院は彼
れに賣國の罪を認めざりしも、彼れを危険人物として、巴里其他の大都市に入るを禁止せり。千
九百二十四年春、急進黨のエリオ、内閣を組織するに及び、カイヨーは特赦に逢ひ、自由の身と
なれり。

第六章 戰時露國の内情

露人、獨逸人の虚言を憎む

轉じて露國の内状を見るに、最初獨逸が露國に宣戰を布告せる時、露國は大變革を起すべき氣
運に會しつゝ、ありき。其は千九百十六年以來發展せる農業上の進歩に因るものにして、農民一億以

上を算する露國に於て、農業の進歩と農産物の増加とは、其の國力を無限に増大せしむるの可能
性十分なりき。されば、獨逸の之に對する嫉視日に甚だしく、彼等は皆、露國大いに興らざる中に、
其の根柢に一大打撃を加へざるべからずと主張せり。是れ飽迄世界征服を念とせる獨逸人に取つ
て當然の事ならんも、當時の露國民は、獨逸人の如き野心なく、一に平和を望みたるなれば、彼
等は獨逸と戰爭を開始せんなど、は思ひ設けざる事なりき。是れを實際に見れば、當時露國全體
に、獨逸崇拜の氣分漲り、獨逸の商品は一般に愛好せられ、其の科學、文學、藝術は勿論、政治
組織にも獨逸の感化遍ねく、獨逸のマルクス主義は露國労働者間に傳播し、議會の慣例さへも多く
獨逸に則れり。延いては、流行を競ふ婦人の衣服裝飾の末迄も獨逸を真似、一たび獨逸に留學
せる者は高級官吏に取立てられ、文武百官多く獨逸系の學歴ある者の占領する處となれり。かく
して、露國の王黨は、獨逸思想を崇拜し、露國の王位並に政體を維持せんが爲めには、獨逸との
交誼を親密ならしむるを要すと信ぜり。されば、獨逸人側にてこそ、二葉にして露國を苛らんな
どとの意見を抱きしも、露國側に於ては、更に獨逸を敵視するの意なかりしが如し。
然るに千九百十四年七月末日、獨逸皇帝が、「露國は我れに戰を挑めり」と虚言を吐くに至

りて、露國人は始めて獨逸の惡意を悟り、獨逸崇拜の迷夢より覺めて、極端なる反感を抱く事となれり。されば駐露獨逸公使が、多額の運動費を散じて露都に同盟罷業を煽動せしも、愈々兩國の間開戦となるや、罷業者は、忽ち態度を一變して自發的に就業し、獨逸の攻撃態度に對して露國人民は凡て一樣に團結心を起し、黨派、階級、人種、宗教等の別を忘れて一致協力するに至れり。かくて開戦當初、露國民は其の皇室と政府とに信賴して、殆んど熱狂的態度を示せり。其の一例を擧げんか、八月二日に、全皇族及び廷臣は、冬宮に集りて戦勝の祈禱を行ひしに、此日三十萬に餘る市民は、灼くが如き炎天烈日の下に、宮城外に集まりて佇立する事三時間に及び、皇族及び廷臣等の宮殿に入らんとするや、喝采歡呼の聲天地に振ひ、ニコライ大公が、司令官旗を靡かせて自動車を驅り來るを見るや、群衆稱讚の響きは暫し止まざりき。やがて露帝は皇后と共に宮殿の露臺に現はれて、親しく人民に會釋せしかば、愛國心に驅られたる群衆、諸團體の旗幟は、風になびき、各旗手は、恭々しく皇帝に答禮して其の祝福を祈れる光景は、露國史上類例なき美しき國民感情の發露と目せられぬ。

一週間の後、露帝は、冬宮内に於て、上下兩院議員に謁見を賜りしが、此時には、黨争も個人

的嫉妬も一掃せられたるが如く、立憲民主黨の首領ニココフが、從來相容れざりし極右黨のブリシケキツチと相擁して語り、又立憲自治を標榜するロヂャンコが、極右黨のザミスロフスキーと親しげに窓際に立てる状は、眞に舉國一致の光景なりき。されば、露國にては、其の社會民主黨一派に非戦論の聲を聞かざるには非ざりしも、之を全體より見れば、右黨も國民黨も、十月黨、立憲民主黨も、或はバルト沿岸の獨逸種人民も、波蘭人も、リスワニヤ人も、猶太人も、韃靼人も、皆何の狐疑する處なく、露國の爲めに一身を捧げん事を望めり。其中、英國が身方に參戰して獨逸に對抗する事明白となるや、露國民衆の歡喜は其の極に達せり。

獨探運動跳梁を極む

獨探運動は、佛國に於てすら可なり大なる問題を惹起せるなれば、多數の異民族を包含せる露國に在つて獨探運動の激烈なりしは當然にして、波蘭、バルト沿岸地方在住の獨逸種人民中には、獨逸軍に内應せる者少なからず。開戦後二ヶ月を経たる十月中旬には、露國社會民主黨議員ら同志相集り、陰かに非戦運動を計劃せることあり。官憲の手に捕はれて事未發に終れるは、

露國に取つて幸なりき。されど、露國內の異民族は、何れも二心を抱く者と思はれ、獨探は彼等を使喚して盛んに攪亂運動を起せり。既に戦前よりして、獨探は露國に跋扈せるものにして、開戦と共に、彼等は作戦地の密偵諜報に極力盡力せり。是等獨探は、多く歸化獨逸人、猶太人、波蘭人等にして、斯かる異民族を多數に包含する露國の内治は、戦時に於て最も困難となる。而して獨逸の探偵組織は甚だ巧妙にして、獨軍の塹壕より發見せる書類には、其の對抗せる露軍の移動を起すべき時刻及び方向等明白に記録せられたり。是れ皆、露國軍隊樞要部に獨探の潛み居る證左と知らる。元來、獨逸人が、露國人と面貌の相似たる事は、一層獨探に便宜を與へたるが如く、彼等は、工場に在りては、職工を教唆して同盟罷業を起さしめ、以て軍需品の製作を遲滞せしめ、又陰謀を運らして露軍の火薬庫爆破を企つるなど、其の手段巧妙悪辣を極めぬ。既に千九百十五年三月、ペトログラード郊外のオクタ火薬庫の爆發も、獨探の所爲なりと言はる。

露國にては、是等獨探に對して嚴重なる取締りを行ひしが、之が爲に猶太人は頗る窮迫の境遇に陥れり。殊に露軍の駐屯せる波蘭地方の猶太人中、地下電線に依りて獨逸に秘密通信を送れる事發覺したる後は、露國政府の猶太人に對する不信用甚だしくなり、爾後逃亡を企つる猶太人は捕へられて遠く東方西比利亞に流刑せられぬ。さりながら、獨探の最も恐るべきは、露國軍隊内に伏在せる者にて、其の一例としては、ミヤリウドフ大佐の如きあり。同大佐は、戦前には、露國憲兵隊附なりしが、露國關稅納付に關して收賄せりとの廉にて非職となれり。然るに開戦となるや、自ら志願して軍隊に入り、第十軍團の參謀部に入りて檢閲官、軍事探偵の任を帯ぶるに至り、其地位を利用して、獨逸側に、詳細軍機を内通せり。露軍が、東普魯西より第二次の敗退に陥れるは、主として同大佐の内通の結果なりしといふ。やがて事露現し、彼は死刑に處せられたり。

露帝の大英斷、禁酒令

尙ほ、開戦に連れ、露國が其初め如何に能く擧國一致の精神を發揮せるかを見るべき他の證左としては、其の禁酒令を擧げざるべからず。古來露國人は強烈なる酒類を嗜む習慣あり。従つて其の弊害の大なる事も早くより知られ、從來露國に頻發せる擾亂も、一部其の原因を飲酒に在り

となせる議論起れり。然るに産業交通の發展に伴ひ、農民の生活餘裕を生ずると共に、飲酒に消費する金額莫大となれり。是れが爲め、酒税に依る政府の収入も莫大の額に上り、其の歳入の三分一を占むるに至れり。千九百十四年の始め、露帝は、飲酒の弊風を根絶せんとするの意志を發表せしが、酒税の收入皆無となるに於ては、財政上に大改革を要する事となり、其の計劃容易に立たざる爲め、即時斷行の運びに到らざりき。然れども、禁酒令を布かざる時は、農民の身心日に退化する虞れありとなし、露帝は同年二月バルクが大藏大臣に任せらるゝや、禁酒に關する意見を傳へ、飲酒より來る人命の損害と家庭の不和と事業の滯滞とを論じ、之を禁ぜざる時は、大藏省の基礎を、臣民の精神的及び肉體的破滅の上に置くにも等しと告げぬ。

大藏大臣とても、之に對しては、勿論同感なるも、財源消滅の結果を思つては、之を實行するの策なきを嘆ぜり。然るに今や大戰勃發となるや、世論は、戰勝は一に禁酒に依て得らるべく、從つて一國の興廢は禁酒する否とにありといふに一致し、出征者動員の間は、酒店を閉鎖せしが、其儘永久に此の状態を持續せんと圖れり。かく國難に際して飲酒を撤廢せる例は、他國に類を見ざる事にして、此點、露國民の隱忍性の偉大なるを證するものといふべし。此の形勢を見て取

れる皇帝は、時機正に到來せりとなし、斷乎として禁酒令を宣言せり。從來露國政府にては、ウオドカ酒專賣に依りて六億五千萬、留の純收入を得たるに、一朝にして此の收入を減ずる事となれり。同時に又、ウオドカ酒の原料たる馬鈴薯耕作者、ブランドー釀造者、酒瓶製造者、密封蠟製造者、運送人、商人等、酒販賣附屬業者は、生活の根柢を失ひて大恐慌を來たし、賠償救助を要求するに至れり。但し、此の如き國家經濟の大變動に對しても、何等内部に破綻を生ずる事なかりしは、是れ國難に處する人民の覺悟絶大なりしが爲めにして、其の舉國一致の精神牢乎たるものありしが爲めなり。

戦局瀾久、暴動發生

戦争の突發は、一時外に對して共に侮りを禦ぐの舉國一致を齎らせしも、元來專制なる官僚政治の國たる露國に於て、官民の間に醸成せられたる嫉視反目は、決して根柢より除去せらるべきものにあらず。戦局久しきに瀾り、露軍の形勢漸く振はざるに至りて、人民は次第に不安の色を現はし來れり。既に戦争其物より直接の損害のみならず、國內經濟上の損失甚だしくなりては、

一般人民も日常生活の上で窮迫を感じる事となり、是れ皆中央政府の政治宜しきを得ざる爲めなりと憤れり。此に於て、破綻は先づ議會對政府の衝突に現はれ、次て各都市の同盟罷業となり、暴動之に次いで起れり。此に於て政府は事急なりとなし、此の形勢を緩和せんが爲めに内閣を改造する事數次に及びしも何の効なかりき。元來、露國の政治は名稱こそ立憲政治と言はるれ、其實は專制政治にして、其の議會も民論を貫徹するに由なきなり。されば其初め開戦の間際（ひら）に開かれたる臨時議會に於ては、國民愛國心に熱せる事とて、政府提出の財政案に對して、滿場一致、協賛を與へしも、政府は此の協賛を得るや、即日議會の休會を宣して、爾餘の諸案には民意を問ふ事を爲さず、次て千九百十五年の議會に於ても、會期僅かに三日の間に年度豫算を通過せるのみにて、他の重要法案をば議會の討議にもかけず、凡て皆緊急勅令に依りて斷行せり。此の如き專制横暴の政府に對して、人民は永久に柔順なる事能はず、不平滿々たる折りしも、露軍ガリシヤに敗戦するに及んで、轟々たる政府不信任の聲を揚げぬ。而して、此の敗戦の原因は、兵器軍需品の缺乏に基づく内情暴露するに及んで、人民は、政府に向つて戦争の真相を公表し、官民一致して國防資源を利用し、萬遺漏なきを期せざるべからずと要求せり。かくして千

九百十五年六月初め、各地の代議士は、續々上京し、切に議會の開會を迫れり。

右の如く、戦敗は政府の不信を招き、人心焦燥の極に達し、遂に發してモスクワ（モスコ）の暴動となれり。即ち、其の六月八日、戦時業務に従事せる婦人の一團は、政府より仕事を受取らん爲めに、掛り委員の許に赴きしに、其の仕事は、既に獨逸商會の手に契約せられたりと答へしかば、婦人團の激昂甚だしく、人民之を傳へ聞きて、忽ち不穩の狀を示せり。其中、又一軍需工場に於て、就業者一同不思議に胃痛を覺えたるに、是れ獨探が井水に毒を投じたる爲めなりとの流言生ぜり。此に於て、同工場就業者憤慨して、爾後地方工場より凡て獨逸種の官吏並に就業者を罷免せん事を要求し、勢ひの激する處、多數の就業者、一工場に押しかけ、同工場監督を即刻罷免せよと迫れり。然るに工場員の一人、カールゼンなる者、工場の門戸を悉く閉鎖せしめしかば、就業者一同激怒して暴民となり、獲物を振りかざして工場内に闖入し、カールゼンを私刑に處せり。是れに雷同して他工場にも暴動起り、翌六月十日には、一般性を帯び來り、反獨逸思想の集團的示威運動となり、群衆皆酒氣を帯びて騷擾する爲め、全く無警察の狀態となれり。かくて暴動はモスクワ（モスコ）市の中央部に及び、單に獨逸系人民のみならず、友邦の國

人さへも餘波を受けて奇禍を蒙るものあり。群衆今や、クレムリン宮殿の門に集まり、更に場末より來れる一團と合して、勢ひ猖獗を極め、商店其の他の附近の工場を破壊し、掠奪を行ひしが、夜半に及んで、放火か失火か、火災を起し、翌日中延焼して夕刻漸く鎮火せり。是れが爲めに、破壊せられし工場五百、普通人家の焼失二百餘戸、獨逸系其他外國人民死傷者六百餘人に及びり。此暴動は、モスクヴのみならず、他の地方にも波及し、其の結果、内相マクラコフの辭職となりて一段落を告げぬ。

内閣交迭頻々

かくて、暴動は一旦止みたれども、其の八月頃に至り、獨逸國境の戰爭に於て露軍頻りに敗退するに及んで、國民は、政府不信任を唱へ、其の軍事行動を最も嚴に監視するに至れり。而して新たに國會に於ける民黨の中堅、立憲民主黨と十月黨との二大政黨は、此際、聯合側との結合を支持して、最後の勝利を我が手に收むる迄は、飽迄敵と戦はざるべからずとなし、就いては、これに附隨して必要なる民主的諸改革を露國內政上行はん事を主張せり。されば、政治上保守に

傾き、外交上、獨逸最負なる露國の官僚は、此時よりして既に民間黨と到底相容れざるの勢顯著たるものあり、後の大革命の端緒此に萌ざせりとも見らるべし。

されば、露國の政局は、此時よりして、刻一刻、切迫し、饒舌にして反抗的なる國會は、數休會を命ぜられ、千九百十六年二月より一ヶ年の間に其内閣は三たび更迭せり。而して、反動黨と民主黨との間、又獨逸最負と英佛最負との間の抗争は、日を逐うて募れり。但し、佛國革命時のルイ十六世にも似たる性格のニコライ二世の下に在つては、獨逸を里方とせる皇后一派の獨逸最負運動は漸次勢力を加へたる事當然にして、大戰初期の陸軍大臣スホムリノフ將軍は獨探關係にて告發せられ、軍法會議に付せられ、遂に禁錮の刑に處せられぬ。總じて、露國の陸軍部内には、賣國的行動を爲せる者少なからず、同時に、政府は民間の各種運動に對して壓迫を加へたるの例又多し。

然るに、千九百十六年十一月五日に至り、獨逸側にては、其の露國より奪取せる波蘭地方を今後獨立の立憲君主國となす旨、ワルシヤワ（ワルソー）に布告し、波蘭の軍隊を編制して自國の用に供せんとせり。此に至つて、露國人民甚だしく憤慨して政府の無能を罵り、其の年

末の國會に於て、立憲民主黨は一條の決議案を通過せり。其中には、「今や暗黒なる勢力ありて國民の精力を麻痺せしめ、政府の諸官省を糜爛せり」と述べたり。所謂暗黒の勢力とは、露國皇后を取巻く反動派、獨逸派を指せるなりき。此に於て露國政府は、波蘭問題其他に關し、協商列國と豫め協調を遂げ置くの必要を感じ、依つて翌千九百十七年二月一日、英、佛、伊の諸大使をベトログラードに會して、戰勝の曉には、全波蘭を露國に附屬せしめ、且つ其の西境を定むるの自由を露國に與ふる事を約し、同時に、アルサス・ローレン二州とザール炭田とを佛國に與へ、ライン左岸を中立緩衝國となして、政治上、經濟上共に獨逸より分離せしめ、獨逸が、平和條約の規定を履行し得る迄、佛國をして之を占領せしむる事を密約せり。されど、此時には帝政露國の運命は既に旦夕に迫り居たるものにて、其後一ヶ月にして、露國の大革命は、食糧暴動を發端として破裂せるなりき。

第七章 戰時英國の内情

アイerlandに暴動起る

轉じて、戰時中、英國の内情を見るに、英國には、愛爾蘭自治の懸案あり。從來幾度か危機に瀕し、這次大戰開始の間際にも、此の問題の爲めに危く内亂を惹起せんとせり。されど、其のひとびと對獨逸宣戰布告以來、舉國一致、英國憲法有りて以來、未曾有の變態たる聯合内閣さへ組織せられ、列國をして、流石は立憲政治の本場たるに恥ぢずと賞讃せしめしが、開戦後二十ヶ月を経、突然愛爾蘭の首府ダブリンに暴動起れる事、意外の現象なりき。勿論、愛爾蘭の有力者中には、常に英本國より分離せん事を企劃する者ありて、彼等は從來國內の政變に乗じて、幾度か不穩の行動に及びり。獨逸人又此の弱點を看破して、其が得意の探偵流言を用ひて之を煽動せり。英國政府は本より斯間の消息を知るが故に、平素より嚴に警戒する處あり。開戦後は一層監視を加へたる結果、其後變調も生ぜず、愈々舉國一致の實を得たりと聊か樂觀に過ぎたり。愛爾

蘭の暴動は、此の油断に乗じて勃發せるものと知らる。

千九百十六年四月廿四日、英國の議會には、強制徴兵に關する重大問題起り、政界の風雲稍險悪の兆ありき。斯くと見たる愛爾蘭暴徒は、「時こそ來れ」と日頃の陰謀を實行するに決し、廿四日の正午、愛爾蘭獨立黨員十三名は首府ダブリンなる總督府の門に闖入せんとせり。門衛驚きて之を差止めしに、其の一人は矢庭に銃を取上げて彼れを射殺せり。是れぞ當日暴動の血祭にして、他の暴徒二百名は之と同時に、市中の公園を占領して諸門を閉鎖し、急に塹壕を穿ちて防備を爲せり。此間に暴徒の一隊は、中央郵便局を襲うて、獨立黨員以外の局員を放逐し、電信電話を切斷して、其處を本據となせり。暴徒は夫れより市中に黨員を放ちて重要な停車場をも占領し、假政府の名を以て、「愛爾蘭獨立宣言書」を發せり。

かくて暴徒は午後一時頃には、市中第一位の通路を扼し、交通を遮斷せり。されど、市民は、獨立黨の計劃遠大なるの内情を知らざるが故に、其の塹壕工事を兒戯視せしに、午後一時半頃に至り、交通遮斷區域内のシエルボルン・ホテル前に於て、遮斷線を通り抜けんとする馬車の駁者は、暴徒の一領袖の爲めに即坐に殺害せられぬ。之を自撃せる市民と同ホテル滞在客との間に紛すらも營内に引籠り居たり。

慘憺たる市街戦

明けて廿五日となるや、形勢一變して、愈々流血の慘害を現出せり。此の朝英軍の派遣せる官兵ダブリンに到着せしかば、暴徒軍は、一醫院を占領して根據となし、各所に連絡兵を配して戦闘準備に取掛れり。午前十一時、一大隊の官兵は、始めてダブリン市中に進み入れり。暴徒は彼の醫院に據つて之を狙撃するに、官兵大いに惱まされ、夕方に至りて漸く此の醫院の建物を占領せしが、暴徒十九人は、最後迄抗戦して擒となれり。又官兵の一隊は、シエルボルン・ホテルに入り、機關銃を以て暴徒の占領せる聖・スチーブンス公園を嚴しく射撃せしかば、暴徒は支へず、翌二十六日の早朝、同公園を撤退し、附近の外科醫學校に逃げ入り、此處に愛爾蘭共和國の綠色旗を掲げぬ。

此に於て、ホテルの官兵は、此の醫學校を目標として、又々猛烈なる銃火を浴せ、今やダブリン市は慘憺たる市街戦場と化し、千八百〇四年五年の西葡半島に於ける英佛戦以來、曾て例も聞かざる激烈なる市街戦を現出せり。此際官軍の作戦は、ダブリン市街を包圍し、各所に散在せる暴徒を漸次壓迫して、最後に之を中央郵便局に追込まんとするに在りき。従つて郊外にも激烈なる戦闘行はれ、ハヂントン街道にては、大膽なる暴徒二十名一民家に占據し、暴動開始の廿四日の晩、一隊の官兵が何事をも知らず、練兵場より歸る途中を射撃して其の三名を殺せり。茲に於て、官軍は、廿五日の早朝より此の民家を砲撃して、夕方には全然之を破壊し盡せり。但し暴徒も、頑強に抗戦し、官兵に多大の損害を與へぬ。

かくして、廿五日の午前より、官兵は、英蘭より應援に來れる軍隊を中心とし、其の守備隊と連絡を取り、四方より包圍して次第にダブリン市の中心に向つて暴徒を壓迫せり。かくて同日の夜には、市街戦最も激烈となり、世界の諸都市中最も路幅廣しと言はる、ネルソン記念塔附近の大通りも、通行の危険を恐れて一人の通行者なく、唯た一兵士の死骸、オーコンネル橋上に横はれるを見るのみ。官軍は、トリニチー大學の窓及び屋上より、郵便局又はネルソン記念塔に據

れる暴徒を砲撃せり。暴徒等はバチラー街の一銃器彈藥商店を占領し、其處よりトリニチー大學に銃丸を送り頑強に抗戦せり。依つて官軍は、同大學長の勧めに従ひ、野砲一門を大學屋上に引上げ、敵の據れる銃砲店を粉碎せり。此日同大學にては、學期試験最中にて、此の騒動中、平常通り教室内にて試験を行へり。

二十六日の夜、暴徒は、火を放つて掠奪を行ひしかば、火勢忽ち延びて焔は天を焦がし、ダブリン市中第一位の大通りは一面の火の海となり、延焼一晝夜に及び、此の火光は十哩外より望見せられ、愛爾蘭タイムス社の如きは、警察の注意にて夜間消燈中なりしも、此の火光に依りて業務を果し得たりといふ。但し此の大火に家屋の焼け落つる物音凄じきに加へて、轟々たる銃砲の響間斷なく聞え、市民、皆恐怖して、誰れ一人出て、火を救はんとする者なく、罹災地の民のみは、命辛々逃げ延びたり。

廿八日の夜に至り、さしも猖獗を極めたる暴動も漸く衰へ、其の根據地たる中央郵便局より發火して灰燼に歸せり。廿九日に至りて大勢全く決し、暴徒は力竭きて四散し、其夜愛爾蘭獨立宣言書署名者の一人ペーアスは面縛して官軍の司令部に來り、無條件降伏を爲せしかば、之に次で

若干の暴徒、白旗を掲げ來りて降伏せり。但し暴徒の殘類は、此日も同ほ前日の外科醫學校及び
ビスケツト製造所を固守し、右學校内には、二百の負傷者を收容せり。此度の暴動の首謀者とい
ふはコンノリーと呼ぶ者にして、彼れは、ダブリン市中有名なる自由堂に據つて頑強に抗戦し、自
由黨焼失後も、尚ほ其地に踏み留りて防戦せしが、官軍の一輕砲艦、市の中央を貫流するリフ、
河を遡り來つて之を攻撃し、コンノリーは足部に傷を負ひて遂に官軍の擒となれり。

首魁ケースメント就縛

是れより先き、二十八日の未明、愛爾蘭の西南部ケレー岬附近の海岸にて、一人の農夫、退潮
時の漂流物拾ひに赴きしに、見馴れぬ型の短艇一隻、磯に乗り揚げ、四本の權さへ波間に漂へ
り。怪みて艇内を探るに、底より一口の短劍出でたれば、農夫は只事ならずと驚き、直ちに取
つて返して警察へと訴へ出でぬ。警察にては、三名の署員を現狀に差向けたれば、件の三警官
は、海岸に急行する途中、一村民の談に、昨夜三人の男が、密々語りつ、四邊を氣兼し、沙山を
越えて駈け行けりとの事に、現場を探索するに、沙の上に新しき足跡あり。これを辿り行くに、沙

中に三挺の短銃、彈丸、地圖暗號簿及び獨立黨の國旗を發見せり。依つて尚ほも追跡する事二
哩、ふと見れば、傍の藪中に、一人の男半身を隠し居るにぞ、之を誰何せしに、巨漢は目を睜り
て「予が此處に眠れるは當然の權利なり。何の妨ぐる事がある」と叱咤せり。其の姿を見るに、
髻を剃り落して風貌稍異なれども、暴徒の首魁ケースメントなる事疑ふべくもあらず。彼れは
前夜事成らざるを見て、和蘭國旗を掲げたる商船に乗り込み。海に航して逃れんとせしか、ト
ラーリ灣沖にて英國巡洋艦に出會ひ、忽ち怪まれて臨檢を受くる事となりしかば、ケースメン
トは自ら船體を爆沈し、其身短艇に移り、辛くケレー岬附近に上陸せしも再擧の策もなく、前
夜來一睡もせざる事とて、疲勞甚だしく、彼れは草叢に眠り居たる處を、遂に警吏の手に捕へら
れたるなりき。

尚ほ一説に依れば、彼れケースメントは、大戰勃發時獨逸に在り、愛爾蘭獨立の旗揚げを計
り、本國の同志と謀し合せ、依つて獨逸の潜水艇に搭じて窃かに愛爾蘭に至りしといふ。是れ
千九百十六年四月廿日の夜なり。かくて彼れは中立旗を掲げたる獨逸船より武器を陸揚げせんと
する處を、英國の監視兵に發見せられ、獨船は撃沈せられ、ケースメントは擒となれり。而し

て此の變事後間もなく、同月二十四日、ダブリンに暴動起れるなりと、暫く記して参考となす。

雨降つて地固る

斯くして、愛爾蘭獨立黨の暴動も全然失敗に終れり。勿論、此の暴動は、從來久しく計劃されたるものなれども、其の無謀驚くべきものあり。彼等は初め思ふやう「一日事を擧ぐるに於ては、獨逸は直ちに海上より援兵を送るべし」と、此の豫想は外れ、獨逸よりは何等援助來らざりき。尙失敗の第一原因は愛爾蘭人民が、暴徒の要求を拒否せる事なり。加ふるに暴徒は、官軍の輸送力に對して大なる誤算を爲せり。彼等思へらく「今日歐洲戰場事急なるの際、英政府は、直ちに愛爾蘭に向つて大部隊の征討軍を送るは不可能なり」と。然るに此豫想は全然過誤に終れり。且つ暴徒は食糧十分ならず、又砲兵を有せず、官兵一下忽ち破碎せられりぬ。

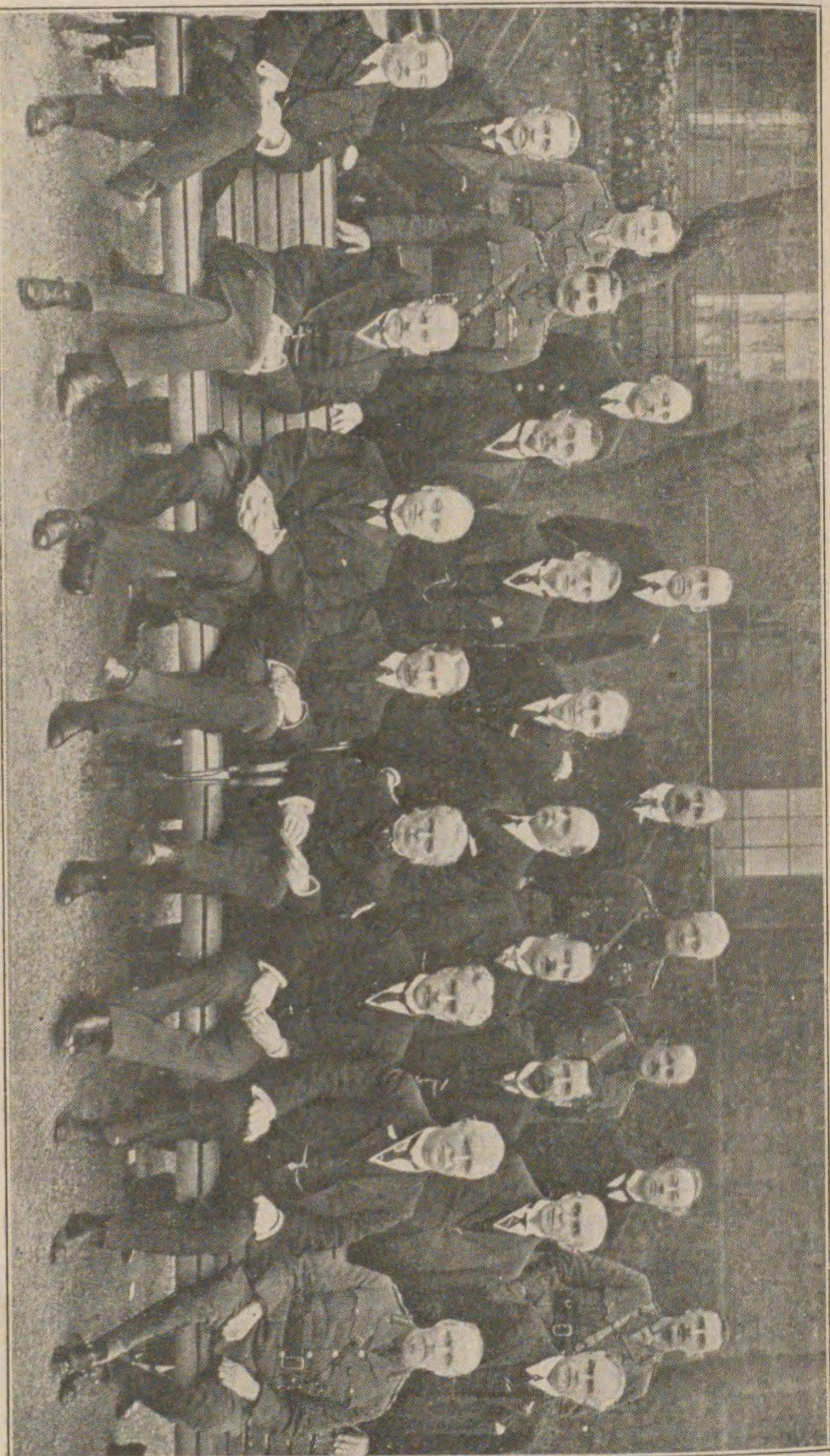
初め暴徒は、一たび獨立の旗を擧ぐるに於ては愛爾蘭の人民響應して來り援くべしと思ひしも、多數人民は「暴徒獨逸に與みして國を賣るの行動に出でたり」となし、一部不平無賴の徒の雷同集合せしのみにて、他は更に應ぜず、交戦一週間に及ばずして早くも大敗瓦解し、其の首領ら皆捕へられて禍根一掃、英國政府に取つては、是れ雨降つて地固まるの好結果を齎らせり。愛爾蘭の民族的獨立を成就せんとする事に於て、其の希望には重大なる政治上の理由もあれど、事を圖る事淺く、之を一般愛爾蘭人民より見れば、事功を急ぐ一派の野心より出でたる妄想と思はれ、同情を注ぐべき價値なかりしが爲めなり。

かくて英國に於ける獅子身中の蟲とも見られたる愛爾蘭獨立黨の暴動も、大事に至らずして鎮定し、叛逆者ケースメント以下首魁者の公判は、五月十五日（千九百十六年）に開かれたり。其際、檢事總長スミスの論告に依れば「ケースメントは、前英國總領事にして、開戦後獨逸に赴き、同地に收容せられたる愛爾蘭種の英人捕虜に向ひ、己が計劃せる愛爾蘭叛亂軍に荷擔せん事を勧め、若し獨逸にして此戦争に勝利を得るに於ては、彼等は愛爾蘭に上陸して英國に反抗すべく、失敗の曉にも獨逸政府は彼等に對して各十二磅の報酬を與へ、無料にて米國に送るべし」と演説せり。是れ實地に、其の演説を聽ける愛爾蘭捕虜の證言せし處にして、其の罪跡明白なり」といふに在りき。流石に冷靜なる英國人も、此の如き檢事の論告を聞きて、いたく驚愕せりといふ。

第八章 大國民の態度

英國の強制徵兵實施

久しく英國政界の大問題となりて、内閣の基礎を危くする一般強制徵兵案は、首相アスキスの手に下院に提出せられしが、愛爾蘭暴動鎮壓後間もなき千九百十六年五月十八日、三十五對二百五十の大多數を以て、其の三讀會を通過し、確定立法となれり。其内容には十八歳以上四十一歳以下の男子は既婚未婚を問はず、凡て兵役に應ずる義務ありとして、従前に比し、甚だしく軍國主義の色彩を帯ぶるものとなれり。此際首相アスキスは「今や英國陸海軍の人員既に五百萬に達し、陸軍は八十三個師團を算すれども、時局の進展に従ひ、將來更に多數の兵員を召集するの必要あらん」と述べたり。即ち戦局の發展に伴ひ、今後更に多數の兵を派遣するの時あるべきを諷せるりき。



英國の戦時内閣々員右より四人目が首相ロイドジョージ氏

ロイドジョージ氏代つて英國首相の印綬を帯び……

ロイド・ジョージ内閣成る

次に起れる英國内政上の重大事件は、千九百十六年十二月五日の内閣交代なり。此日、首相アスキスは辭表を呈出し、同日、ロイド・ジョージ氏代つて英國首相の印綬を帯び、統一黨首領ボナー・ロー氏と提携して新内閣を組織せり。此の政變の直接原因は、自由黨内の急進派たるロイド・ジョージ氏が、アスキス、グレー等漸進派の施設緩慢なるを憤り、別に軍事委員會を組織して、其手に内閣の實權を收め、アスキス氏を除外せんとせるに在り。茲に閣員間の不統一を來し、アスキス氏の掛冠となり、ロイド・ジョージ内閣の出現を見たるなり。かくて新内閣は、統一黨、自由黨、労働黨の三政派は勿論其他にも後援を存し、眞の國民一致内閣なりと謳歌せられ、ロイド・ジョージ首相こそは、クロンエルの再來よと讃賞せられたるなれ。

○英國婦人の活動

這次大戦開始後、世人の豫測には「戦争に参加せる歐洲諸國の婦人は、或ひは原始的なる労働

生活に復歸せずや、又、婦人は其の國家的勞働の功に依りて其勢力を増大し、其結果、益々男子の反抗心を高むるに至らずや」など、幾多の疑問を生ぜり。然るに其の結果は意表に出て、之を英國の婦人界に見るも、彼等はそれ／＼適當なる任務を果し、其の生活状態も甚だ順調なりしが如し。是を市中の光景に見るも、婦人は皆元氣好く駈け廻り、毫も悲愁に掩はれたる状なかりき。

戦前、英國には、未婚婦人多く、甚だ頼りなき姿なりしが、開戦後、婦人の業務多忙を極むるに至り、斯種の婦人皆奮つて國家必須の戦時業務に勤め、頓て面目を一新し、其の眼差しは氣力に満ち、意志強固なる相貌となれり。かくて英國の婦人は、男子に劣らざる程巧妙に馬車を御し、乗合馬車、地下鐵道に従業して、見事に任務を果すに至り、自己の體力と使命とを自覺し、國內は婦人の勢力範圍となれり。されば、徽章と、眞鍮鈕を誇る看護婦、昇降機運轉手、電車の車掌など、それ／＼に制服を着けたるあれば、或ひは銀行の書記、書店の賣子、商店の女など、制服を着けざるもありて、何れも國內生活に重要な地位を占めたり。

初め、英國政府は出征兵の家族に生活扶助料として、多きは一週間二十五シリングを給與せる爲め、開戦當時兵士の妻女は、晏然坐食して頗る安逸に流れしが、其後戦況次第に重大となり、長期戦を豫想するに至りて、此の弊風一掃せられ、扶助料を浪費する習慣止めり。又貧民窟の寄宿学校等にも、兒童の被服其の他著しく改善せられしは、是れ皆、其の母が、扶助料を受けて、活計に餘裕を生じたる爲めと知らる。

其結果として、戦時の英國には、産業競争行はれ、政府、商業組合、婦人の三者對抗を見たり。即ち、組合にては、職工の未熟なるを氣遣ひしが、政府にては、軍需品製造の爲めに人手を要するが故に、未熟者とても之を長時間使用して低廉なる賃銀を拂ふ事とせり。而して、壯丁の多くは、戦地に出征して人手不足なる結果、政府も組合も嫌々ながら、婦人職工を使用するの止むなきに至れり。何れにせよ、戦争の爲めに英國婦人が、新方面に地位を得たるは、注目に値する現象にして、戦争終決の曉、婦人が其職業を男子に明け渡して、再び家庭に納まるべきかを疑問とせられぬ。

初め婦人勞働は、交戦各國に取つて重要な財産と見なされ、婦人は何れも協會又は組合を組織し、規約を設けて、自己の安全なる永久的地盤を固めんと計れり。然るに、英國のみは、當初

婦人労働者に對して強固なる反對政策を執り、獨逸が既に五十萬人の婦人を軍需品製造業に使用せる間に、英國にては僅か五萬を使用せるに過ぎざりき。然るに、戦争長引く形勢となり、英國が一般徴兵制を布くに至り、多數男工は、工場を去つて戦役に服し、婦人代つて工場に使用せらるゝ事となれり。

更に之を中流及び貴族社會の婦人に見るに、其の戦時活動は、工場に非ずして慈善事業に向へり。又醫業に従事せる婦人の活動も目覚ましきものありて、千九百十四年十二月、英國婦人は佛國戦線に病院を開き、醫師、看護婦、料理人も一切婦人の手にて行へり。

食糧問題の解決

元來、英國は、商工本位の國として、農耕の事には平素多く意を用ひず、國民食物の五分の三以上を海外諸國の供給に仰げり。されば一旦大戦開始せらるゝや、穀類獸肉の需要激増し、同時に、從來食料生産に従事せる者、多く戦役其他の戦時業務に轉じたと、且つ輸送船舶缺乏の爲め、國內の物資食糧の不足を感ずるに至れり。奸商ら此の機に乗じて奇利を博せんとする爲め、

人爲的に物價は騰貴し、千九百十六年十月に於る政府物價調査委員會の統計に依れば、肉類及び他主要食品十五種の市價騰貴は、之を開戦當時に比して六割五分に達し、砂糖の十六割五分は尤も甚だしきものなりき。此に於て政府は、先づ砂糖、肉類、小麦を官營に移して、其の分配供給を公平統一ならしめ、同時に國民の愛國心に訴へて、激勞に従事せざる者は、毎週一日の無肉日を設けん事を勸告せり。

但し、此の如き政府の努力も物價騰貴の趨勢を阻止しがたかりしかば、千九百十六年十一月中旬には、倫敦のトラファルガー街に於て、労働者の一團は食料品價格騰貴反對の示威運動を行へり。此に至つて、政府も姑息の策に依頼するを止め、一步を進めて主要食料品の價格を制限するに決せり。即ち、國防條例に追加を爲して、商務大臣の權力を擴大し、左の諸項に對する臨機の處置を取らしめぬ。一、特定食料品の浪費及び不必要なる毀損を禁止する事。二、食料品の使用を制限し若くは指定する事。三、食料品の分配及び販賣に關する方法を命令する事。四、物價の不當騰貴を防止せんが爲め、市場の動作を制限する事。五、指定價以上に食料品を販賣するを禁ずる事。六、商務省は食料品の所有者に對し、詳細なる報告を提出せしむる事。七、商務省は、

食料品の保存、貯藏、加工、製産の建藏物内を臨検し、報告の正否を査定する事。八、商務省は、食料品所有者に對し、其の貯藏品の處分を指定する事。此場合、賠償條件に付き、双方の意見一致せざる時は、仲裁會議所の決定に俟つ事。以上の如き權限を商務省に附與せる外、ロイド・ジョージ内閣は、更に食料總監を新設して閣員に列せしめ、以て徹底的に食料問題解決に努めたる爲め、一時紛亂せし本問題も稍や鎮靜するに到れり。

交戦列國が、戰鬪其物にも増して困難とせし國內食料問題に關し、英國が辛くも破綻を免れたるは、商務省の努力もさる事ながら、一面には、英國の強大なる海軍力が、海外より食料品を多分に輸入し得たるに依れり。當時の形勢を見るに、千九百十六年に入りて、獨逸の潜水艇が跋扈して英國の海上交通を阻害し、中立國の船舶の如きは、之が爲めに殆んど航海を中止するに至れり。従つて供給の途絶え、必要品の缺乏日に甚だしくなれり。かくて英國の興亡は船舶の建造力を増大して、獨逸潜水艇の犠牲を補充し得るや否やに在りと言はれたり。されば、此際に於て、英國は其の強大なる海軍力を割きて、食料品の輸入に充てたる事、其の效果絶大なりき。

一方新設の食料總監は、着々食料問題の解決に努めたるも、形勢益々困難となり、千九百十七

年二月に入りては、獨逸潜水艇の奮闘目覺ましく、英國船其他撃沈せらるゝもの數知れず、英國民食料品の危機に瀕せり。而も英國は、戰場に於て十分優越の地位を保ち、又海上に於て、其の海軍力は一指を他に染めしめざる威力を維持し居たるが故に、食料當局は、幾多の難局に處して更に屈する處なく、着々整理の實を擧げたり。今其の施設方面を見るに、食料總監は物資節約の爲めに、食料品の使用法を指定し、或ひは小麥節約の爲めに精白搗減りの率を定め、又公共食事規則を設けて贅食を禁じ、一人一日の主要食料消費量の標準を示し、是れに由りて食量を自制せしめ、又食料品節約宣傳の爲めには、食料省節約部長を主監として、國家安全同盟を作り、食料品節約大運動を起して人民の加盟を勸告せり。次に一般人民に食料品の分配を公平ならしめんが爲めには、時には、政府自ら之を販賣し、或ひは資格を規定して暴利を食るを防ぎ、又全國の主要製粉所を政府の手に移して十分に監督し、當時尤も缺乏せる砂糖の分配に關しては、千九百十七年より切符制度を實施して、以て濫費を防げり。千九百十八年に入りては、肉類にも切符制度を採用せり。

以上食料省の施設は、消極的に節約を専らとせるものなるが、同時に積極的施設を爲して内地

に於ける食料品の生産増加を計れり。是れは千九百十六年末より着手し、翌十七年の春季より實行せるものなり。夫れには先づ土地耕作規則、土地收用規則を發布して、耕作の増加を圖り、富豪の庭園、市街地の公園等は、之が爲めに菜圃と化し、牧場亦田畑となれり。而して耕作用具は、之を軍需品の一部となして、軍需品製造所に於て製作し、國內の駐屯兵、敵國の俘虜を耕作に使用せり。其の結果、千九百十八年二月中旬ボナー・ロー氏の説明には、植附反別百二十六萬エーカーを増加せりと語れり。是れと同時に、英政府は、船舶を増加すると共に、不必要品の輸入制限を爲し、其の剩餘運送力を凡て食料品輸入に充當せり。但し、斯く政府當局の努力も、民間の自發共鳴と相俟つて、始めて實積を擧ぐるものにして、此點に付き、英國民間識者の盡力多大なりき。即ち民間には、數多の有志團體組織せられて、熱心に政府の施設に援助する處あり、一般人民をして是等施設の緊要なるを覺らしめ、着々効果を擧げぬ。就中、食料の節約に關しては、下層民を勧誘して、其の自製心を助成し、其の目的貫徹に貢獻せり。眞に是れ舉國一致の名に耻ぢざるものなりき。

尚ほ、各國の内情を述べたる序に、列國皇室の姻戚關係其の他諸帝王の性行一端を次章に記述

する事となせり。

第九章 列國皇室の姻戚關係

政略結婚、骨肉相爭ふ

歐洲列國は、等しく白人種の國にして、言語、文字、風俗習慣相似し、廣き見地よりすれば、畧ぼ同一民族たるの關係より。其の皇室間にも、時には、政治上、時には、親睦上より、相互の間に婚を結べるもの多し。されば、平時に在りては、列國間の親和を増進して、世界の平和を維持する上に好都合なるが如きも、一旦、國交斷絶、干戈の間に相見ゆるに至れば、姻戚相戦ひ、骨肉相爭ふの慘劇を生ずるなり。

先づ英國に見れば、アルバニー公妃は、本來、獨逸生れにして、其が義息に當るテック公アレキサンダーは、英國の皇后メリー陛下の弟なり。アルバニー公妃は、三十年餘り英國に棲み、テック公に對する母子の情も深く培はれたるが如きも、其の唯一の實子が、獨軍に従つて佛國戰

場に立ち、英軍を敵として戦ふ有様なる故、同妃の英國に對する感情も妙ならず英人の妃に對する偏見も免れがたき處なり。されば、同妃は何事に付けても、英國人を嫌惡するの色あり。英國人民の怒りを買へりとさへ噂せられたり。遂に英帝陛下も黙しがたくなり、公妃の實子に與へたるガーター勳章を剝奪して、僅に人民の心を宥めたり。

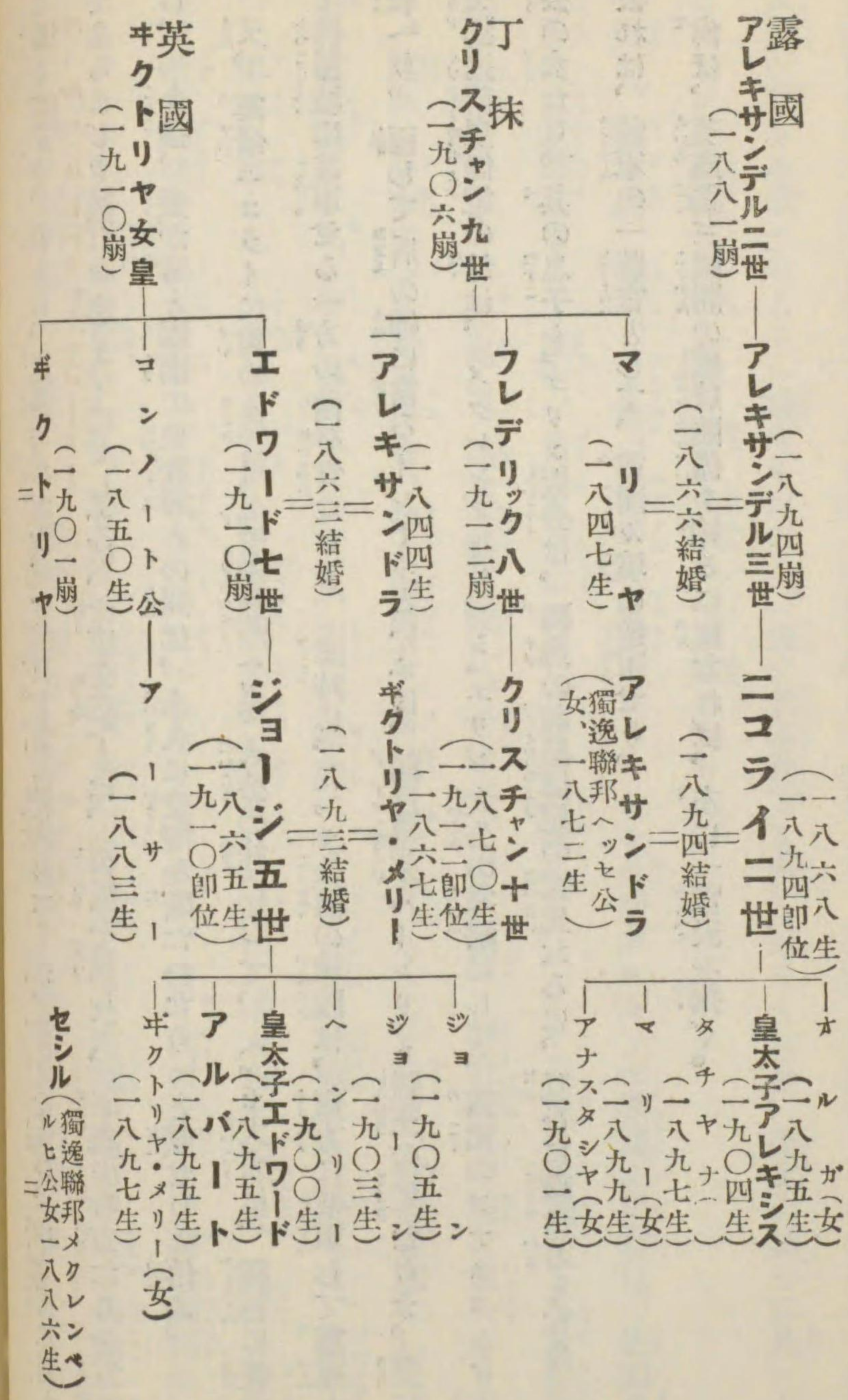
更に、白耳義、和蘭、丁抹、瑞典、希臘、ルーマニヤ及びブルガリヤ諸國の皇室は、皆獨逸系統の血液混在せり。就中、希臘の皇后ソフィヤは、獨帝ウイルヘルム二世の實妹なる事世間周知の事實にして、之が爲め、這次大戦に際し、希臘は、中歐同盟と聯合側との間に板夾みとなり、何れに身方すべきかに付き、頗る困難なる事情に在りき。ソフィヤ后は、意志強固にして、殆んど頑固とも見らる、氣質なりしかば、若し、希臘にして聯合側に參戰するに於ては、斷然去つて獨逸に歸らんと公言せるが爲め、希臘の參戰は甚だしく遅れ、千九百十七年夏、米國の參戰後、漸く獨逸との國交を斷ち、宣戰布告に及べるなりき。次に、白耳義の王妃は、獨逸聯邦の一たるバイエルン王家の出にして、獨逸が開戰當初、道を白耳義に借りて軍を進め、南下佛國に攻め入るの策を決行せしも、かゝる關係を辿りて、白耳義國が、容易に之に同意すべしと打算せ

る爲めなりき。然るに、獨逸の兵士が、一旦白耳義に侵入したる後、節度を失ひ、中立國に對してあるまじき暴行を恣にせしかば、王と王妃とは、公憤を發して、正義の身方たるを宣言し、「今後、妾が身と獨逸の血族者との間は、永久に交際を斷たれたり」と嘆せりと傳ふ。

又、露帝ニコライ二世の後、獨逸聯邦ヘッセ大公の妹にして、ヘッセ大公は、獨軍に從つて佛國境に進軍せる一方の司令官なりき。同時に、ヘッセ公領の軍隊は、東方に進軍して露軍と戦へり。而して後の姉に當るイレネといふは、獨逸皇弟ハインリッヒ親王の妃なりき。更に又獨逸前皇儲妃の母は、メクレンブルヒ、シュエリン大公の寡婦にして、露國のアナスタシヤ太公の女たり。其の息子シュエリン太公は、獨逸の前皇儲妃の實兄なるに、互ひに敵身方となりて、彼れは、獨軍の一將官として、露國々境に進軍せり。

尙ほ、英露獨三國間の姻戚關係を知るに便なれば、左に一覽表を掲ぐ。

英、露、獨、皇室の相婚關係



獨國
ウイヘルム二世 (一八八八崩)

フリードリッヒ三世 (一八八八崩)

ウイヘルム (一八五九生) = フリードリッヒ三世 (一八八八崩)

ウイヘルム二世 (一八八八崩) = アウグスタ・ギクトリヤ (一八五八生)

皇太子フリードリッヒ (一八九〇結婚)

ア (一八八三)

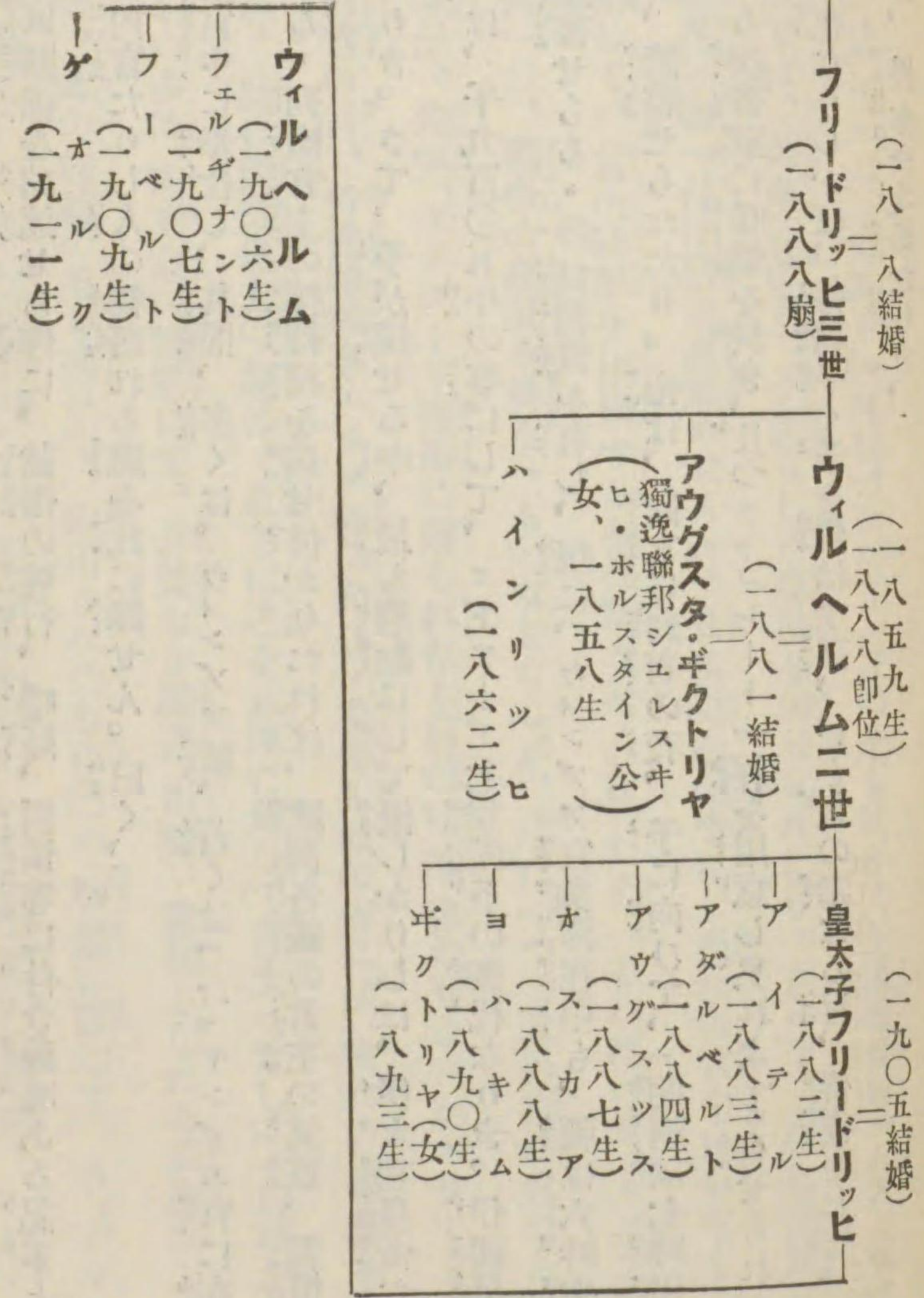
ア (一八八四)

ア (一八八七)

ア (一八八八)

ア (一八九〇)

ギクトリヤ (一八九三)



列國帝王の性行

以上列國皇帝の姻戚關係を略述せる序に、諸帝の性行、嗜好、習慣等につき興味ある記事として、従前英國の一宮内官たりし人の物語れる處を此に録せん。曰く、

「予は久しく、英國宮中に奉仕し、其間、多くは、ウインズア城、若くは、バックingham宮に在りて、皇室を訪問せらる、列國君主の接待役を仰せ付かりたれば、歐洲各國の君主の氣質、習慣、嗜好等を知るの便ありき。さて、予が接せる中、最も慇懃にして優しかりしは、伊太利皇帝なりき。帝の英皇室訪問は、千九百〇五年の事にして、エドワード七世陛下の御代なりき。伊國皇帝は、毎朝早起して讀書せらる、の良習慣を有し、現に、ウインズア宮御滞在中も、朝は六時半に起床せられ、朝食前、讀書せられたり。帝は、同宮に到着の夜、予に向ひて、「明朝は七時半迄に、朕が寢室に隣れる讀書室に暖爐を焚き、且つチョコレート一杯を用意し呉れよ」と仰せられぬ、かくて、數日の御滞在なりしかば、毎朝早く予を煩はす事、いと氣の毒なる旨、侍従をして、予に挨拶せられたるは、畏多き次第なりき、

「次に、獨逸皇帝ウィルヘルム二世陛下の氣むづかしきには、余もほとく困却せり。且つ帝は、至つて物識りにおはせば、萬事に付き、子供らしき高慢を仰せられたり。かくて、帝は英國宮中に客たる間其の居室内の備へ付け品を品定めせられ、其侍臣を相手に、己れの宮中に有せらるる美術品と之とを比較して、其の缺點を指摘するを得意とせられたり。されば、ウインズア宮中の諸道具、美術品何一つ、獨逸の惡評を免る、ものなかりしが、唯だ一つ、其の意に召せる品あり。そは、獨逸自身が、先年、エドワード先帝に贈られたる自己の胸像なりき。エドワード先帝は、獨逸が倫敦へ到着の日、侍從職幹事エリス卿に向ひ、「獨逸入城の折には、彼れの胸像を最も目を惹く處に置けよ。但し獨逸退去の後には、直ちに之を武庫に藏して差支へなし」と告げたり。然るに、其の武庫といふは、地下室の物置にて、必要な繪畫、彫刻、廢物となれる武器など詰め置くなりき。獨逸は、此の蜘蛛の巣を拂ひて、取出されたる自己の胸像に對して、ウインズア第一の美術品なりと賞讃せるなり。其後數年にして、獨逸再度ウインズア宮訪問の前夜、エドワード帝は、宮中を隈なく見巡られ、設備萬端意を用るしが、忽ち足を止められ、侍從職幹事エリス卿を顧み、「獨逸の胸像は如何にせるぞ」とお尋ねあり。エリス卿は、漸く思ひ出せる體にて「され

ば、先年武庫へ藏せる儘にて」と答ふ。陛下は微笑して「さらば今一度取出して正面の床に建てよ、さなきに於ては、獨帝、明日急に引返し去らんも測りがたし」と宣ふ。エリス卿も、さもこそとて之を取出し、埃りを拂はせ、ウインゾア宮第一の應接間に置きしに、翌日獨帝は入り來りて先づ目を之に留め、いと機嫌よき體にて「此像こそは、之を作れる美術家が、從來の製作中、最大傑作の一なれ」と、事新らしく賞讃せり。

尙ほ、ウインゾア宮の賓客中、最も開放的にして快活なるは、西班牙皇帝アルフォンズ陛下なりき。同陛下は、未だ結婚前、千九百〇五年、初めて倫敦を訪問せられたる際、一場の粗忽なる失敗談を残せり。此折り、西班牙帝の居室には、宮中左側の數室を供し、エドワード陛下は東側に居室を取られしに、西班牙皇帝は、到着の日、晚餐の身支度に赴かんとて、己が居室と間違へて、エドワード陛下の居室へと闖入せり。時に、エドワード陛下は襯衣を着替へらる、最中なりしかば、西班牙帝は、慌て、其の粗忽を詫びしに、エドワード陛下は、いと氣輕に「否とよ、遠慮し給ふな、予は御免を蒙りて衣服を着けん程に、しばしお待ちあれ、直ちに御案内仕らん」と語り、手早く着衣を終り、西班牙皇帝の居室へ案内せり。

「序に、諸君主の嗜好品につき一つ二つ語らんに、英國皇室の賓客たる諸國君主御滞在在中、朝食の奉仕は余の任務なりき。丁抹の先王は、其の晩年には朝食を取らず、代りに晝食はバターにて焼ける麵麩に副へて羊の肋肉を召されたり。又西班牙帝は、チョコレートを大盃三杯と定め、初めの一杯を飲み終れば葉巻に火を點じて、之を燻らしつ、次の二杯を緩々と傾けられたり。最も健啖なりしは獨逸皇帝にして、朝には鶏卵とベーコンの外、魚肉を多量に攝取し、更に一皿の果實を取り、次に黒珈琲を飲み、然る後太き葉巻を吹かせり。次は葡萄牙の先王なりき。王は鶏卵を好まれ、朝食に四五個を食するに、其の料理法としては、特別の香氣を添へる爲に、レモン油を滴らし込みて硬くなる迄丁寧煮るなりき。次に露帝ニコライ二世陛下の朝食は、燒麵麩二三片と黒珈琲なりき。帝は殊の外珈琲を嗜まれ、特別珈琲料理人を常に扈從せしめたり。此の料理人は風變りの男にて、彼れは、英、佛、獨、伊諸國の語を最も完全に語り、凡そ世界中見物せざる處なきを誇りとせり」

第八篇 露國の大革命

第一章 露都街上の鮮血

ペトログラードの食料缺乏難

露國に於て、官憲の暴壓厳しきため、其の人民は平生怨みを呑んで憎伏し、唯だ國難起りて、自國の運命危険に瀕せるの隙を窺ひ、忽然起つて其の政府を顛覆し、官僚を驅除せん事を思へり。されば、往年、日露戦争に際し、露軍大敗せるの時一たび革命起り、政府は憲法發布、議會開設等の好餌を以て漸く民心を鎮撫せるなりき。かくて這次世界大戦起るや、其初め露軍優勢なる間、國內動亂の兆なかりしも。千九百十七年の春に入りて、今迄眠れる羊の如かりし人民も、猛然餓虎の如く躍動して革命の烽火を擧ぐる事となれり。其年の三月八日、露西亞の國都ペトログラードの街には麵包を求めて得ざる貧民群集し、市中の交通は一切杜絶し、之を鎮壓せんとす

る警官と人民の間に隨所衝突起り、形勢刻々危険となれり。此際人民の先づ擧げたる叫びは、「我れに麵包を與へよ！」といふ事なりき。人間に取つて饑餓の叫び程恐ろしきはなし。

嗣つて、露國に於ける食糧供給の内情を見るに、開戦前露國が外國に輸出せる麥類は、年約四億三千万ポンドなりしもの、開戦と共に輸出凡て停止せる故四億三千万ポンドの餘裕を生ずべき計算なるも、千九百十六年には、勞働力不足の結果、四億ポンドの播種力を減じ、隨つて需要供給平均の形なりき。然るに、此年は、非常なる豊作にて、二億ポンドを剩せり。但し、此頃都鄙を通じて肉類乏しく、爲めに麵包の需要を激増せると、又村落に金融潤澤なりし爲め、農民は、急ぎて穀類を賣拂ふ必要もなかりしかば、都會住民は甚だしく麥粉の不足を感じるに至れり。更に又、露國は、千九百十六年九月九日迄賣買自由なりしかば、各都會にては、必要に應じ、隨時穀物を買込み居たるに、其の後政府にて買占權を握るに至り、形勢一變して、九月には穀物の輸送一時杜絶の姿となれり、舊都モスクブにては、二百五十萬の人口を養ふ爲めに一日麥粉八十八貨車を要するものなるに、十、十一月の兩月には、一日平均九十八貨車の輸入ありて、十貨車の餘裕なりしが、十二月には、四十七車、一月には四十車に減じ、僅かに從來の殘穀に依

りて不足を補ひ得るのみ。此勢ひにて進む時は、三月一日には市民一片の麵麩をも得られざる豫想なり。此に於て市長は、二月十三日モスクワ市民を代表し、首都ペトログラードに急行し、首相に向つて救済方法を講ぜん事を乞へり。

燃料の缺乏

管に麵麩問題のみに非ず、燃料問題亦急を告げぬ。此年は十年以來の寒氣にて、零下廿度の寒天に燃料の缺乏は市民の憂苦とする處なりき。政府にては、露曆二月一日より向ふ二週間、南方鐵道の客車運轉を一晝夜二回に制限し、代ふるに食糧と燃料とを運搬する事となせり。然れども、當時積雪の爲めに列車は數不通となり、更に二週間の客車運轉中止を布告せり。此の際、モスクワ市民は、零下廿度の寒空に麵麩屋の店頭に群集し、中には數時間を立ち盡くして猶ほ一片の麵麩をも買ひ得ずして歸宅する事ありたり。市中の麵麩焼所は、到る處閉鎖せられ、同時に燃料も日に増し減少してモスクワ市中は文字通り火の消えたる如き寂しさなり。各工場亦電動力缺乏の爲め閉鎖するもの多く、失業者續出し、其の不平、何處にか勃發せずんば止まざる形勢となれり。斯

かる折、一日一職工は麵麩屋に赴きしも、麵麩を賣らざりしかば、大いに憤り、仲間を誘ひて其の店を破壊し、次いで市の中心地なる一劇場に集合して一大示威運動を起さんと計劃する處へ、忽ち警官の探知する處となり、一時は鎮壓せられしも、此時彼等は既に決する處ありて赤旗を手にし居たりと言ふ。モスクワは露國の心臟と言はれ、政府はペトログラードに在れども、國民の主力は、モスクワに在りしなり。故にモスクワの飢寒は直ちに露國生死の大問題なりしなり。既に一月中、モスクワ、ペトログラード其他の重要都市は、全部食料と燃料との缺乏に苦められ、物價の暴騰甚だしかりしも、人民は戦時止むを得ずとして隱忍せしなり。然るに二月三日に入りては、一片の麵麩すらも買ひ求め得られざるに至り、全國の職工は全部の罷業を行ひ、「麵麩を與へよ」と叫び、都市の各麵麩屋の店頭には、毎日朝の四時より、夜の九時迄絶えず四五百名の人民が、麵麩券を手にして詰めかけ、互ひに押合ふ體は、現世ながらの餓鬼道なりき。

三月九日の暴動

かくて三月一日となりしに、鈍重を以て聞えたる露國人も、前途に救済の來る見込もなく、饑

寒に堪へかねて遂に暴動を起せり。即ち、猛烈なる同盟罷工各所に起り、モスクワ市中到る處に、「饑ゑたる我等を救へ」と大書せる辻びら貼り出されたり。而して其の五六日頃には、麥粉既に盡き、政府は之を救済すべき手段なく、唯だ食糧暴動を鎮壓せんが爲めに軍隊を繰り出し、市街の要所には機關銃を配置せり。されど饑ゑたる人民は、「退いて餓死せんよりは、寧ろ進んで銃丸の的となるに如かず」と叫び、幾萬の群衆街上を推進みしかば、各工場の労働者を罷めて之に投じ、八日には、軍隊の一部さへも之に加はり、暴動の色彩著し。九日には、群衆街上に充滿して交通杜絶し、彼等は口々に「麵包を與へよ」と叫びつ、各所の麵包屋を破壊し、格闘を演じ、負傷者續出せり。首相ゴリツチンは、事の急なるを見て、食糧問題を市參事會に一任する旨を發表せしも、時既に遅く、今は砲兵工廠の職工全部亂民に加はり、眞に危機一髪の形勢となれり。此時、軍隊と憲兵とは、人民の示威運動を制止せんとして忽ち衝突を起し、鮮血路上に點々たり。群衆之を見るや、血に渴せる猛獸の如くいきり立ち、得物を取つて軍隊に抗争せん氣勢となれり。此に於て其の十日、露都軍管司令官は、告示を發して曰く、「市内に於ける民衆の集合を禁ず。而して秩序回復の爲め、命に服せざる者に對しては、軍隊をして兵器を使用せしむる事あるべし」と。當に是れ人民に對する政府の宣戰なり。激し切つたる亂民は、此の一點火に依つて大爆發を起せるなり。

軍隊と人民の市街戰

三月十一日、下院の形勢重大なるを見て、ゴリツチン首相は、食糧問題當の責任者たる、農務大臣のみを議場に出席せしめ、他の閣員は、内閣に在りて形勢の推移を窺へり。當時下院にては、食糧問題に關して意見二派に別れ、双方の論争激烈を極め、議場混亂に陥れり。此時民黨にては急に動議を提出し、食糧問題をば後廻しとなし、突如として最も大膽なる政府彈劾の質問演説をなせり。かくて民黨議員は何れも決死の覺悟を定め、投獄を期して登壇し、革命の大立物たるロヂャンコは議長席に突進して、從來露國議會に於て聞く事を得ざりし、大膽なる政府彈劾演説を始めたるにぞ、議場は之に和して拍手大喝采し、各議員怒號して政府を罵り、喧囂鼎の沸くが如し。政府は急に議會解散を命じたれども、其の間に議會は一變して國民大會の形となり、解散の詔勅を耳にも入れず、「横暴なる政府を顛覆する迄は、決して此の議會を閉鎖せず」と叫び、

一瀉千里の勢を以て、「吾人は民意を基礎とせる政治を行はざるべからず」との決議を爲し、政府諸大臣を國民の敵なりと宣告し、直ちに之が逮捕命令を發し、市中に殺氣充ちて、大破裂の危機刻一刻に迫れり。

遂に其夜に入りて革命暴動愈々勃發せり。物凄き兵火の響街上に起りて叫喚怒號の聲、ペトログラードの空を震はせり。殊に暴動の中心たるリタイヌイ街にては群衆充滿し、通行遮斷の體なれば、警官は屋上に登りて、人民に退散を命ぜしむも、暴動は闇の力を借りて一層勢を増せり。此時手に銃器を携へたる群集雲霞の如く推寄せ、機關銃を備へたる軍隊に向つて進撃を開始し、轟然火蓋を切つて發射すれば、軍隊又機關銃を發して之に應じ、見る間に群民算を亂して斃れぬ。人民らは其の損害の餘りに多きを見て、一時發砲を中止し、軍隊に向つて速かに革命黨に應援せよと要求せり。

此の時、政府は、警官と警備兵に向つて、群衆に對し、無差別發砲の命を下せしかば、形勢全く悪化し、今は革命黨愈々最後の覺悟を定め、「我等自由を得ずんば、寧ろ砲火の的となりて斃れんのみ」と叫び、市中の秩序全く失はれて修羅の巷と化せり。されば、晝間より街上の要所々々に屯せる警官等も、無差別發砲の命下ると共に、一身の危険を慮りて一齊に本署に引揚げ、官民間の大衝突將に始まらんとする刹那、今迄人民を敵とする三萬の軍隊は、忽然革命の赤旗を押し立て、革命黨の身方となれり。是れ、政府の無差別發砲令の不法に對して軍隊亦反感を起して反旗を翻せるなり。此に於て、軍隊は人民の身方となりて警官と闘ふ事となり、カタリナ運河方面に於て徹宵砲火を交へ、不安なる革命騷亂の第一夜は明け放れたり。

此の間戦闘外の革命黨委員は最も敏活なる行動を取りて、政府改革を決定し、十二日には、其折り西境戦場に行幸中なりしニコライ二世に對して「政府は、秩序を維持するの能力を失へるが故に、吾々革命黨委員は、自ら秩序維持の任に當り、新政府を組織せり」と電奏せり。斯くして露國人民積年の宿題たりし民主的革命は、成功の第一歩を踏めるなりき。

第二章 革命の機運熟す

人民の反政府熱

露國の革命動亂は、右の如くして、一夜の間に軍隊を身方に得て、成功の一步を確實に獲取せしなるが、事の此に至れるは、遠き由來あり。抑々露國に於ける革命騷亂の勃發は、今回は第二回目にして、第一回目は、千九百〇四年より同七年に亙れり。此の一次革命の結果、露國は立憲代議政體となりしも、其は名目上の事にして、其實質に於ては、依然たる專制國なりき。されば露國民の多數は、「吾人は更に眞の革命を要す。吾人當初の目的を達せんが爲めに、是非とも之を斷行せざるべからず」と叫べり。かくて彼等は、第一回革命の後、機會あれば眞に名實共に得べき革命を遂行せんとせしも、其機來らざる中、今次の歐洲大戦亂となれり。而も大戦當時に於ては、國民一般戰爭を歓迎せり。何となれば、元來露國民はスラヴ主義の見地よりセルギヤ其の他バルカンに於ける同種族たるスラヴ民族に對して同情し、之を援助するの心あり、且つ一面には、ダーダネルス海峽の自由通航權を獲得して、コンスタンチノールを占領するの時機到來せるを喜べり。是が爲めに革命運動に熱中せる者も、政府を助けて舉國一致戰爭に従事せしなり。更に又、革命黨の見る處にては、從來露國の宮中府中には、強力なる親獨逸派あり、且つ獨逸系の貴族ありて、彼等は獨逸の内意を受けて、專制政治を行ふが故に、露國に眞の立憲政治を行はれ

ざるものとす。然るに、今や此の立憲政治の敵たる親獨逸派の宮中大官等が、却つて獨逸と戦はんと言ふるなれば、此の機を利用して戰爭に賛成し、先づ獨逸を屈伏するに於ては、自國の立憲政治も實現の期近づく事となるべしといふに在りき。而も愈々戰爭開始せらる、や、最初の程は露國勝利を得たるも、やがて獨軍の反撃に遭うて大敗し、莫大の損害を受けたり。

此に於て、露國人民は戦敗の悔恨と不平とを政府に向け、猛烈として其の不信用を叫べり。即ち開戦第二年の千九百十四年六月四日より十日に至る迄、モスクヅ市に於て、全國商工業會議開かれしが、人民は、此會議に於て、内閣の更迭と議會召集とを要求するの決議を爲せり。是れ革命の第一聲と見るべきものなり。政府は機先を制して、逸早くも閣員一部の更迭を行ひ、自由主義の士を入れて之を補缺し、同時に、其の八月一日に議會召集の旨を布告せり。此の如きは、露國政府として殆んど前例なき讓歩にして、當局が人民の意を迎へて、妥協態度に出でたるなり。此の妥協は、一時功を奏し、不穩の形勢緩和せられしも、其の後露軍は連戦連敗するに及び、人民は復讐ぎ出し、政府は既に獨逸と單獨講和の議を進めつゝありとなし、不平の聲囂々たり。其の結果、八月三十一日、モスクヅ市會は、重大なる決議を爲して曰く、「戰爭は最後の勝利を得る迄

は断じて中止せざるべく、同盟國一致の上ならでは、決して講和せざるべし。要するに、目下の急務は、國民の信頼するに足るべき有力なる内閣を組織するに在り」と。ペトログラード其他全國の都市皆同一の決議を爲し、其の勢全國を風靡せり。一方議會に於ては、野黨悉く結束して政府に抗し、内政諸般に互る改革を要求する決議案を發表せり。

人民共和政體を要求す

かくて人民側は、「政府必ず此の決議を採用するならん」と期待せしに、政府は九月十六日（千九百十五年）に至り、突然勅令を以て議會閉鎖を布告せり。人民之を聞くや、激昂極に達し、即日軍需品職工先づ同盟罷工を行ひ、翌十七日には電車従業員、十八日には印刷工場員の罷工あり、爲めに電車は停止し、新聞は發行せられず、人心動搖して、刻一刻、危険状態を現はせり。政府にては狼狽して、種々鎮壓手段を講ずれども、最早威信地に墜ちて何の効もなかりき。偶々此折、モスクワ市會は、國境に大敵を控へて内亂を起すの不利を慮り、市民に忠告して其の暴動を戒め、百万懸無する處あり。十八日臨時會議を開き、政府に關しして、議會の再開を要求す

し、内閣の改造を行はしめん事を決議せり。此に於て人心稍解け、二十日には電車開通し、二十一日よりは、新聞も發行せられ、二十二日には、市中平穩に歸せり。

然るに、モスクワの騷擾は、全國の人民に甚大なる激動を與へ、全國各都市及び各縣自治團の代表者は悉くモスクワに集りて大會を開き、其席上激烈に政府を攻撃せり。此に於て、政府は其態度を決せんが爲め、戦地の大本營に於て、九月下旬御前會議を開けり。之を聞ける人民は、御前會議の結果は、必ずや内閣の改造となり、政府は十分民意を容るゝならんと期待せり。然るに、首相、ゴレメイキンは、毫も民意を顧みず、「彼等亂民何程の事を爲し得んや」と傲語し、一層威壓手段を取る事となれり。此に於て、人民と政府の間、全然疎隔して妥協の望みなき形勢なり。而して、全國の都市に於ける食糧と燃料との缺乏の爲め、物價甚だしく騰貴し、人民怨嗟の聲喧しく、一方戦線に在りては、敗軍又敗軍、兵員減じて、今は第二種國民兵迄も徵募して戰場に送るの必要に迫られたり。斯くの如くにして、國民の反政府感情甚だしくなり、過激派に投ずる者多く、彼等は皆一致して共和政體の樹立を絶叫するに至れり。

内閣更迭と議會の暴論

斯かる状態にて、其年も暮れ、翌千九百十六年二月二日には、首相ゴレムイキンは、衆怨の府となりて辭職し、スチエルメル内閣成りしも、何等治績を擧ぐる事能はず、民間黨聯合の總攻撃に堪へず、十一月に至つて是れ亦辭職せり。此に於てトレゾフ代つて内閣を組織せしも、其の專制主義内閣たる事は依然異なることなく、其の十二月二日に議會を召集せり。

開會當日、トレゾフ首相は、下院壇上に現はれしに、民間黨議員の妨害烈しくして、殆んど口を開く事能はず、依つて彼れは、窮餘、外交上の機密を發表せんと叫んで、議場の好奇心に訴へ、「余は今回英佛兩國と密約を結び、單獨に獨逸と講和を爲さざるの條件としてダーダネルス海峡の自由通航權を得たり」と。實に此の海峡通航權問題は、露人多年の懸案なれば、流石に議場之を傾聴せり。かくて、此日の議會は無事に終りしも、斯の密約は、聯合側に於て、獨逸を降伏せしめたる後の豫望に係り、且つ露國の專制政治撤廢の上には、何等の意義もなき事なれば、民間黨は更に鋭鋒を收むる事なく、議會の形勢日々に險惡となり行けり。政府は氣を揉み、閣員の

交迭を行ひしも、頽勢支ふべくもあらず、翌千九百十七年一月一日、トレゾフ内閣總辭職して上院議員ゴリツチン公首相となれり。但し、内閣幾たび交迭すとも、其の專制政治、官僚政治を改めざる限り、人民は毫も攻撃の手を緩めざるなり。かくして形勢次第に惡化し行く中、其頃宮中に在りて怪腕を振ひ居たる妖僧ラスプーチン暗殺事件起りて、大革命の導火となれり。

妖僧ラスプーチンの最期

妖僧ラスプーチンとは何者ぞ？ 彼れは西比利亞のトルボルクに農家の子と生れ、少時より村内の惡童として忌み嫌はれたり。其の二十一歳の時、廻國巡禮となり、コンスタンチノープルより遠くスミルナ(スマーナ)迄巡遊せり。其の後、千九百〇三年、ペトログラード神學校監督の知遇を得て、上流社會に紹介せらるゝ事となれり。彼れ一種の靈感作用に依り、人の病を癒やすの術あり。遞信省高等官夫人ロクチナの歸依を得て、廣く交際社會に名を知らるゝ事となり、爾來種種の妖術を用ゐて高貴の婦女を惑せしかば、惡事發覺して、千九百〇九年露都より追放せられたり。されど、十四年に至りて歸還を許され、再びペトログラードに現はれし時には、多年練磨

し來れる催眠術の技能著しく發達し、又も上流社會に出入して、爆彈を受けて不隨となれる人の腕を平癒せるなどの實例を目前に示せしかば、其の評判高まり、ウィツテ伯の如きも、彼れの爲めに欺瞞せられたり。伯は、宮中にお覺え目出度かりし關係上、ラスブーチンは、伯を利用して宮中に迄も出入するの端を開く事となれり。かくして、ラスブーチンは、其の催眠術を以て、ニコライ帝及び皇后をも籠絡するに至り、内閣の交渉、其他政變、閣臣の任免等にも干渉し、種種惡辣なる手段を弄せしかば、諸貴族は彼れを憎む事甚だしくなれり。

一夜、ラスブーチンは、貴族等の招きに應じて、ユスポフ公の邸に赴きしが、席上、山海の珍味を連ねて、歡樂を盡せり。ラスブーチンは、十分に酩酊し、醉眼朦朧として、前後の分別を失ひ、興に任せて、自己の宮中に於ける祕密を得意氣に物語り、「昨年十二月、議會が停會を命ぜられたるも、實は余が計略より出てたる事なり」と豪語せり。此時並居たる貴族等は、それと目配せずるや、一齊に短銃を取出して、彼れに迫り、「汝、妖僧！國を誤る者、我等は今汝に死刑を宣告す」と叫び、衆躍りかゝりてラスブーチンを射殺せり。夫れより、ラスブーチンの死體をネワ河に投ぜしが、一月一日に至り、死體は、河流に浮き上りて滿都の噂の種となれり。近來露國宮中

に絶大の勢力を省し、内政に容喙して、親獨派の牛耳を取れる一代の妖僧が、かゝる淺ましき最期を遂げたるの報は、さらでも血に渴せる革命黨員に取りて、前途の血祭りとこそ聞えしなれ。

ラスブーチン暗殺後は、政府も、宮中も、何となき恐怖の感に襲はれて、何時か一大爆發の來るを豫想しつゝも、何等施すべき術もなく、唯だ成行きに任する外なかりき。翻つて之を人民側より見れば、革命の機既に熟し、一炬火を投ずるの日を待つ形勢なりしが、此の恐怖時代は一月二月と過ぎて三月八日に至り、忽然一大暴動始まれり。即ち此日饑餓に瀕せる幾萬の人民は、露都全部に互つて、本章の始めに記述せる如き、大示威運動を開始せるなり。而して之に續ける大革命の結果、露國帝政は顛覆し、露帝は廢せられて西比利西に幽囚の身となり、遂に世にも慘ましき弑害を蒙れるなりき。以下、此の大革命の發展を叙せん。

第三章 革命政府の新政

臨時國民政府成る

既に述べたる如く、千九百十七年三月十一日夜に於ける革命擾亂は、軍隊の應援を得たる爲め、革命黨は忽ち大勝利を占め、議會を占領して舊政府を顛覆し、即時新政府を樹立せるなり。革命黨員が、此際の處置の機敏なりし事、其が積年こゝに志す事ありて、平生十分の準備ありし爲めとは言へ、僅か一日の間に此の如き大事を成就せる事、驚嘆に値するものありき。斯くて、革命黨は、先づ新政府樹立の發表と共に、ロヂヤンコを國民議會の議長に推し、リゾフ公を總理大臣に任じ、内務大臣を兼ねしめ、外務大臣、ミリユコフ、交通大臣ネクラソフ、司法大臣ケレンスキー、商工大臣コノワロフ、陸軍大臣グチコフ、大藏大臣デレスチェンコ、農務大臣シンガレフ等悉く民間黨人を任命せり。更に秩序維持の爲めに、一時、行政委員會を組織し、其首脳には、這次革命の大立物たる國會議長ロヂヤンコを戴けり。此の委員は十二名より成り、一萬人の兵力を擁して、秩序維持に任じ、舊政府の首相たりしゴリツチン以下諸閣臣を捕へて獄に投じ、依つて舊政府を剷滅する事となれり。即ち宣言して曰く、「前政府悪政の結果、國內紛亂の極に達せり。依つて我が行政委員は、起つて公安維持の任に當れるなり。我等は、民意に副ふべき新政府を組織するに方り、一般國民及び軍隊の援助を得べきを疑はず」と。露國人民之を見て一



ニコライ皇帝をアツスルーエロスの宮殿に遷すといふ

様に慶賀し、行政委員會は、臨時國民政府の名稱を取れり。

露帝廢位幽囚の身となる

既に新政府成りて第一に起れるは、露帝廢位の問題なりき。ニコライ二世は、十一日の議會開散勅令發せると同時に、急に戰地に赴きて、其の大本營に在り。其處にて、國都に於ける革命の勃發を耳にせしが、革命の經過は、悉く其身に不利にして、或ひは危害の身に及ばん虞れあるにぞ、俄かに大本營を去つて、アスコフに逃れ、又皇后は、ツァールスコエセロの宮殿に入れり。かくて露帝は、最早、帝位の保ちがたきを見て、其の十五日に自ら退位の詔勅を發し、而も、皇太子と離別するを欲せざる爲め、帝位をば、皇弟ミハイルに讓る事となり、昨日迄、世界最大の國土に君臨して、絶大の權威を有せる露國皇帝ニコライ二世も、斯くして、忽然、一切を失へるなり。

此に於て、アレキシフ將軍は、軍隊を率ゐてアスコフに赴き、ニコライ帝をツァールスコエセロの宮殿に遷す事となれり。此宮殿には、皇后を始め、年少の皇太子、四人の皇女等住めるな

りき。此際臨時政府にては、アレキシーフ將軍に命じて、ニコライ廢帝一族を保護せしめ、若干の護衛兵を送れり。されど、其の實、派遣されたる兵士は、下院議員四名の指揮下に置かれ、從來、ニコライ帝の身邊に置かれたる諸官は、侍者を除くの外、凡て退去を命ぜられたれば、皇帝は、全然捕虜の境遇にも等しかりき。而して臨時政府は宣言して曰く、「露國議會は、クリミヤに於けるタウリス宮殿を廢帝の居所と定めたり。ニコライ前帝は、今や捕虜と認められ、皇后の身邊危険の状態に在り」と。榮枯轉變測りがたく、金殿玉樓と見ゆるセロの宮殿も、一朝にして陰慘たる牢獄と變ぜり。

軍隊革命の援助、モスクワの民心動搖

思ふに、這次露國大革命のしかく容易に成功せるは、一に其の軍隊の加盟に依れり。軍隊は舊政府の諸大官、其他横暴なる貴族輩を捕縛して、官僚の根拠を覆せると共に、他方には、民衆の暴動を鎮壓せるなりき。而して、此の革命騷擾は、新都ペトログラードに於て尤も甚だしかりしは言ふ迄もなけれど、之と關連して舊都モスクワにも激烈なる動搖起れり。即ち、三月十三

日には、市中の各工場及び諸新聞社は全部休業し、學生及び市民の有力者らは、盛んに民衆を煽動して革命を鼓吹せり。軍隊と警官とは出動せしも、之を鎮壓せんともせず、唯だ傍觀の體なりき。此に於て民衆は、「舊政府を葬れ」と叫び、軍隊の一部亦之に應じたれば、市中忽ち秩序を失ひて、擾亂の巷と化し、諸官署、商店凡て閉鎖せられぬ。越えて十五日に至り、諸新聞は、復舊發刊して、今次革命運動の經過を報告し、且つ此の革命を完成すべきを主張し、就いては革命黨と軍隊とか協力して歩調を一にするの必要を説けり。此日、市民は、革命歌を高唱して示威行列を行ひしも、最早官憲の之を遮る者なく、街上却つて平穩なりき。此事全國に傳はり、各都市相呼應じて革命旗を掲げしかば、革命の一舉は、疾風の如く全國に擴まれり。

新政府の政綱

此に於て、臨時政府は、其政綱を宣言して曰く、(一)政治上及び宗教上の犯罪者に關しては、大赦を行ふ。(二)言論集會の自由を確認す。(三)信教及び人種上の制限束縛を全廢す。(四)普通選舉法に依り、速かに立法議會を設立し、以て政體を定め、憲法政治を布く事。

(五) 従來の警察制度を全廢し、人民の信賴ある團體に其の權を委ね、其長官は凡べて選舉に依るべく、而して警察權は之を地方自治機關に屬せしむ。(六) 今次革命に加盟せる軍隊に關しては、武裝解除を求めず、又之を露都より撤退せしめず。(八) 陸海軍下士にして、能く軍隊に服する者には、一般國民の享有する社會的權利を付與すと、此の如きは、從來永く專制政治の下に壓迫せられたる露國人民に取つて、破天荒の大變革にして、若し、皇弟ミハイル太公起つて露帝の位を繼ぐとするも、右の政綱實施せらるゝに於ては、露國は極端なる專制政治より一躍極端なる民主政體に轉ずる道理なるが故に、人民等も其の激變に一驚を喫せりと言はる。

第四章 專制より共和へ

ミハイル太公と一般投票

今や、萬目注ぐ處は、皇弟ミハイル太公の身に在りき。大公は、ニコライ前帝の宣言に依り、當然帝位を繼ぐべき地位に在り。然れども、四圍の形勢は、再び帝政の繼續を許すべくも見えず

りしかば、太公は、疾くも前途の困難を察し、依つて布告を發して曰く、「ニコライ二世帝は、此の國家艱難の際、皇位を予に譲りて退けり。予は、今や、臣民と心を一にして、國家の爲を計るを第一要義と信ず。されば、臣民にして、各自の選舉區に會し、一般投票を行ひて、其の異議なきを表明せば、予は、始めて帝位に即かん。此の際汝等臣民宜しく臨時政府の訓令を奉じ、速かに普通選舉の本義に基づける政體を設立せよ」と。此の布告は、皇帝の存廢を一般投票に問はんとするものにして、其の赴く處、必然其共和政體に歸すべきは、明白なりき。從來、帝位神權説を基礎とせる露國皇室が、ミハイル大公の宣告に依りて、自ら、其の權利を破棄し終れるなり。かくて、露國の統治主體は、共和國の大統領と等しく、國民の選舉に待つ事となれり。其の始め、食糧問題に起因し、皇后を中心とする親獨派を驅逐する事を目的として起れる革命は其の一日勃發するや、事凡て豫想外の結果を來たし、一瀉千里の勢ひを以て、一躍共和國を成立せしめたる事、殆んど奇蹟たる觀あり。ミハイル太公の即位沙汰も全然無意味となり、其宮殿は皆革命軍の手に歸し、皇帝の名は公文書より抹殺せられ、凡ての階級は撤廢せられたり。此際、國民中の最も穩和なる一派は、新たに立憲君主政體を採用せんと論ぜしも、國民の大多數を代表する勞

働黨は、之を機として尤も徹底せる共和政體を作るべしと主張し、國民議會亦共和政體を可決せり。此に至りて、神に依つて選ばれたるロマノフ王家三百年の皇統も、根本より斷絶し了れり。

秩序回復、猶太人解放

但し、舊政府側とても、其の手に屬する軍隊を以て、最後の戦を試みたれば、革命軍之に應じて三日間の戦鬪行はれたり。されど大勢既に去つて舊政府軍は全敗し、三日の後には、露都全部、革命黨の手に歸せり。かくて、新政府は、軍隊と外國政府との承認を得て共和政體を創設し、革命勃發後、僅か十ヶ月にして國內の秩序全く舊に復せり。依つて三月十九日、新政府は、舊政府の爲めに投獄せられたる二十五萬人の政治犯人及び宗教犯人を釋放し、又曩きに、妖僧ラスプーチン暗殺事件の嫌疑を以て流罪に處せられたる親王太公等にも國都歸還を許せり。而して舊政府の爲めに虐待迫害を受けたる猶太人にも完全なる市民權を與へたり。元來是等猶太人の原住地は波蘭及び西南露西亞の諸洲にして、以前露國の諸都市未だ人口稠密ならざる時代には、彼等も、露國人の爲に歡迎せられしを、十九世紀に入りて、猶太人に對する露國の態度一變し、其の迫害尤も甚だしく、波蘭及び西南露西亞十五縣以外の地には住居を許さざる事とせり。されど、今次革命は、猶太人に取りても大なる救濟なりき、

階級打破

革命の波動一たび傳はるや、露國の舊物凡て破壊せらる、運命となり。其の大鐵槌は、當然人心を支配する最上の權威たる宗教の上にも及べり。新政府首領たるリゾフ公は、新たに宗務廳長に任せらる、や、即日宗務廳に赴きて、其の會議室に設けたる露帝の玉座を取除かしめ、其際彼れ揚言して曰く、「從來露國皇帝は、國內に於ける宗教の主長と見なされたるも、此の如きは、有り得べからざる矛盾事なり。余は斯かる矛盾を打破して露國人心を一新せんが爲めに此の玉座を取除けたるなり」と。是れ露帝退位の勅語發布の翌日、即ち三月十六日の事なり。之を聞ける露國人民は、公の勇斷に驚嘆して、其の革新更始の大機運を迎へぬ。然るに、此の玉座取除きの英斷に次いで、新司法大臣ケレンスキーは司法省内に在る。露帝、同后、皇太后及び諸太公等の肖像全部を取外づさしめ、同時に國內に在る露帝の肖像撤廢を命じたり。

之に連れて、陸軍省其の他の諸官省共に、従前の勅令並に御裁下なる文字を廢し、單に省令と書すべきを命じ、一切の階級を打破し、凡ての特權を廢して、一切平等の權利を認めたり。従つて警察制度の上にも大改革を來たせり。舊式の探偵警察制は、根本より刷新を受け、十萬のブラックリストは、ペトログラード警視廳帳簿より抹殺せられぬ。是等注意人物表中には、今回新政府の諸大官凡て記入され居たるなりき。是れと同時に、言論出版も全く自由となれり。凡そ世界中、露國程新聞雜誌の檢閲厳しかりし處なく、新聞社の編輯室には、絶えず檢閲官出張して、時には、全紙の記事を抹殺する事さへ珍しからざりしが、今後は如何に大膽なる記事も激烈なる論議も一切檢閲せらるゝ事なきに至れり。かゝる自由を購ふ爲めには、今回の革命に當りて約二千名の犠牲者を出したるなれば、三月廿三日、是等殉難者の爲めに盛大なる葬儀を舉行せり。是れ凡て公葬にして、滿都の人民は、此の革命殊勳者に關し、滿腔の熱誠を捧げ、隨所に集會して革命成功の祝盃を擧げぬ。

軍隊新政に服す

但し、此際革命黨の尤も憂慮せるは、戰場に在りし軍隊の向背如何の問題なりき。従來、露國の軍隊は、皇帝を神と崇めたる習慣あれば、今俄かに皇帝に對する宣誓を拋棄して、新共和政府に服従する事を承認すべきかは大なる疑問なりき。且つ其の將校の多くは、人種の特權及び階級の特典に依りて、其地位を占めたるなれば、彼等は一切平等を宣言せる新政府に關して、必ず反對するならんと推測せられたり。然るに、事實は之に反し、三月二十日に至り、戦地諸軍より、新政府歓迎の祝電續々として露都に達せり。次いで黒海艦隊も亦新政府を承認して、其の節度に服すべき旨の誓言を爲せり。唯だバルチック艦隊のみは、不穩の狀ありて、三月十六日夕刻一部の暴動起れり。然れども、是れ彼等が、今次革命の事情に通ぜざりし爲め、誤解より起れるものにして、やがて事情判明すると共に、彼等も全國民と共に新政府の成立を謳歌せり。

聯合側、革命露國を承認す

國內已に安定せるも、諸外國の態度如何は、尤も氣遣はれたる處なりき、然るに、三月二十二日に至り、英國は眞先に露國新政府に祝電を送りて、「今回自由の基礎の上に露國の國祚を樹立せる

革命が、聯合國開戦の大目的に對して立てたる最大功績なるを確信すと申越せり。此際英國にては、親獨主義の舊露國政府顛覆して、大戦最後の勝利を目的とする新共和政府の樹立を熱心歡迎せるなりき。嘗に英國政府のみならず、佛蘭西、伊太利其他の聯合國に於ても、同様の意味にて新露國政府を歡迎せるなり。従つて、露國第一期の革命政府は、國內國外共に確實に承認を得たり。

第五章 革命主動者ケレンスキー

民衆覺醒の急先鋒

這次、露國大革命の統帥としては、下院議長ロヂャンコ、首相リゾフ公等、表面に名を現はせしが、眞實、此の革命の主動たりし傑物は、前記司法大臣ケレンスキーなりき。此のケレンスキーといふは、千八百八十二年四月二十二日、ブルガ河畔のシムビルスク市に生れたる者にして、父は同市中の學校々長なりき。彼れ六歳にして、同市の小學校に通學中、偶々、時の露帝アレキサンデル三世に關して、革命暴動を企てたる大事件起り、シムビルスク市の一農家の子、大學生

として此の革命に加入せる爲め死刑に處せられたることあり。此事ありて後、政府にては、全國の小學校にも、農民と平民の子弟をば入學を許さざる事とせり。是れが爲、ケレンスキーは、入學せるばかりにて忽ち小學校を逐はれ、市内の寺小屋式僧侶の塾に通ふ外なかりき。後、彼れ八歳の時即ち千八百八十九年、彼れの父は中央亞細亞タシケントへ轉任せしかば、彼れ亦伴はれて中亞に十年間を過ごせり。千八百九十九年、彼れ十八歳にしてタシケントの中學を卒業し、其年轉じて露都大學の法科へ入學せり。此の大學時代に於て、露國の革命氣運は日に増大し、日露戰爭に先立ちて、既に勞働者解放團、レーニン一派の社會民主黨、社會革命黨など起りたれば、ケレンスキー亦時代思潮に投じて、一派の社會黨に加入せり。其の黨は、凡ての勞働者に土地と自由とを與へよの標語を掲げて、露國民衆覺醒の先鋒となれり。

ケレンスキーは、二十三歳にして大學を卒業し、今や新進氣鋭の青年政治家として、窃に社會革命黨に屬せり。日露戰爭中、露國人民は外患を機として革命を起し、遂に憲法發布を見るに至りしかば、ケレンスキーは第二次議會には、若手代議士として議會に列し、其の熱辯と勇氣とは、彼れをして中央政界に重きを爲さしめたり。是れより後、彼れの政治生活は幾多の波瀾を経

て名聲大いに揚がると共に、政府の迫害日に甚だしくなれり。されど、彼れは極めて、機敏にして、常に警吏の手を免れしかば、警察にては、彼れに「疾風」の綽名を付せりといふ。今や彼れ三十四歳にして、遂に這次大革命の統帥として、多年の宿望を成就せるなりき。革命の當初、彼れの名大いに現はれざりしも、彼れは當然其の中心勢力にして、露帝を亞比利亞に遷せるが如きも、一に彼れの方寸に出たりと言はる。但し、かく革命政府の實權を握りしも、己れ表面に立つて首相の地位を取るは、國民の反感を招く虞れあれば、温厚の君士人と目せらる、リゾフ公を首相となし、其の身は司法大臣より轉じて陸海兩相を兼ね、確實に兵馬の權を握れり。但し、革命の端を啓くは易くして、理想的の民主共和國を成就するは難く、革命後既に二ヶ月を経て、事態は思はしからず、無教育なる兵士等は、平等を口にしては、上官の命を守らず、爲めに國境の戦線は、休戦の姿となり、再び戦鬪を繼續すべき望みなし。他方に於ける多數労働者は、「自由の露西亞」を高唱して法外の賃銀を政府及び傭主に要求すれば、農民亦之に呼應して、國有の土地を分配せよと迫り、次第に狂暴の行動に及びり。其中、兵士及び労働者の代表委員は次第に勢力を張り、隠然政府を左右するの形あり。六月初旬には、クロンスタット市は臨時政府より分

離して自由行動を取れば、他の諸地亦之に倣うて離反せんとするの兆あり。一般人民は、一日も早く獨逸と單獨講和を行はん事を思つて、又國家の將來を慮ふの心なし。唯だ此際英、米、佛より來れる訪露團體有志の牽制に依りて、僅かに事なきを得るのみなりき。

ケレンスキーの天下

此の時、獨軍の總司令官は、露國內に單獨講和を望む者多きの消息を察して、全露軍に對し、無線電信を發して曰く、「露國は、其の聯合諸國と離反するの要なし、唯だ休戦に依りて獨逸との敵對行動を停止し得べし」と。之が爲め、露軍の兵士等又戰意なく、士氣日に頽廢せんとす。依つて露都に本部を置く勞兵會にては、六月十日、各戦線の露軍に檄し、「此際決して獨逸の甘言に迷はざる、勿れ」と警告し、ケレンスキーは、飽迄戦争の繼續を主張せり。然るに、此時、小亞細亞即ちウクライナ地方にては、自州の獨立を宣言せしが、露國假政府は之に威壓を加ふるを欲せずして、其儘に容認せしかば、立憲民主黨出身の三大臣は大いに憤慨し、「此の如きは、露國を南北に兩分して國本を危くするものなり」とて、連袂辭職せり。斯くと見るや、兵士及び過激

派は、ケレンスキーの施政を以て緩慢なりとし、其中産階級に媚びて、革命當初の趣旨を忘却せるを難し、依つて一大暴動を起して假政府を顛覆し、大權を勞兵會の手に收めんと圖れり。幸ひにして、勞兵會中央執行委員會の仲裁と露都直轄軍隊の威力とに依りて、此の暴動は鎮壓せられたり。

此の時、ケレンスキーは、獨逸國境戰線に在りて兵士等を激勵し、獨逸に對して攻勢に出てん計畫なりしが、國都に暴動起れりと聞きて、急に歸り來り、留守閣員の怠慢を責めしかば、其の二十一日に至り、首相リゾフ公は責を引いて辭職せり。依つて、ケレンスキーは、其の陸海相に兼ねて首相の印綬を佩ぶる事となり、名實共に大露國の總帥となれり。リゾフ公は、其の初め、各黨派間の調和者として首相に推されたるなれば、今や政權、社會黨及び勞兵會に歸せる際、其の地位を保ちがたきは當然なりき。

第六章 怪傑レーニン

其の少壯時代

さてもケレンスキーは、此度の内閣改造に依り、其身首相の要職を占め、名實共に大露國の至上權者となれり。従つて其の責任も一層重大となりたれば、軍隊を激勵して、再び獨逸との戰闘を開始せんと努めぬ。されど、其頃は、其軍隊既に戦ひに倦み、軍司令官以下諸將校の間には戰争繼續の意志あるも、兵士等は日々戰線を脱走する者多し。獨軍は疾く此の内情を探知し、急に攻撃を開始せり。此に於て露國內の過激派は戰況の不利なるに乗じて、極端なる平和論を唱へ、其の首領、レーニンは、即時戰爭休止、單獨講和を主張して宣傳尤も努めぬ。其結果、彼れは、獨探よ、國賊よと罵しられ、遂に外國に亡命するに至れり。

以下、レーニンの生ひ立ちを略述せんに、彼れ、千八百七十年四月十日、ブルガ河畔歐露の東南地方、シムビールスクに生る。其の父はもと農民の出なりしも、高等教育を受けて、土地の國

民小學校長、縣の學務監督、縣參議の要職にも上れる爲め、其の地位上貴族の班に列せり。されば、レーニンも農民の子たると共に、又貴族の子とも目せられぬ。彼れ少にして父に死別れしが、十六歳の時、其の兄はアレキサンデル三世皇帝暗殺の舉に加はりて死刑に處せられぬ。レーニンが後年過激派の革命運動に轉ずるに至れる動機は、一部此の悲惨事に刺戟せられたるものと見るべし。

其後レーニンは、郷里の中學校を卒業してペテログラード大學に入らんとせしが、大逆罪を犯せる青年の弟は、首都の大學に入る事を許さざりしかば、彼れは憤懣遣る方なく、去つてカザン大學の法科に入れり。彼れは、入學後間もなく其の學生の間に早くも革命思想を宣傳し、且つ實地同校學生の革命運動に加入せりとの理由にて退學を命ぜられぬ。此に於て、彼れ千八百九十一年の春首都ペテログラードに出て、如何なる計略に依りしや、難なく首都の大學に入學する事を得たり。時に彼れ二十一歳なり。此の大學時代に、彼れは、法律と經濟とを修めしが、學業勉勵著しく、他日大學者たり將た大理論家たるの素地を作れり。蓋し彼れは兄の悲惨なる最後の爲めに激せられたる一念凝つて、更に輕薄遊惰の風なく、其の革命を起さんとするの氣魄牢平とし

て抜きがたきものありしなり。當時彼れと同窓の學友たりし一人が、後日作家兼批評家となりて在學中のレーニンを評せる一節には「レーニンは極めて直情徑行にして頑強なりき、毫も浮薄の態なく、貴公子輩の嬉遊逸樂に心を動かさる、様子もなく、友情交際には殆ど無關心なりき。學生會合の席上にも、我先きと口を開いて論議する事なく、他の學生等が喋々辯舌を振ふに任せ、冷然之を聞き、然る後靜かに發言を求めては、理論整然、直截に、其の極端なる意見を吐き、畧ぼ決定せる衆議を一蹴して、却つて自己の意見に聽從せしむる事多かりき」と。要するに、彼れは、其の時既に老成人の冷靜を有し、純理の刃を以て亂麻を截つる概ありしなり。レーニンは大學を卒りて法學士となり、辯護士を開業せしも、法律家たるの業務を好まず、法廷に立つて辯護士たる辯論を爲せし事唯だ一回に過ぎざりと言はる。是れより先き、レーニンは、ペテログラード大學在學中、行政長官の女、ナデヂユタ・コンスタンチノワ・クルプスカヤと結婚せり。後年、レーニンが西比利亞に追放せられたる時も、又瑞西の裏長屋に極貧の生活を送れる時も、又巴里に慘めなる屋根裏生活を爲せる時も、常に彼れの傍らに在りて内助の功大なりしは、此のクルプスカヤ夫人なりき。此の夫人は氣丈なる女性にて、又マルクスの學說に通じ、

革命の原理を究め、一個の學者としても、レーニンに取つて又と得がたき助手なりき。されば、同志の士がレーニンを訪ねて其の窮苦を訴ふる時、夫人は、之を慰め、且つ激勵して、革命の爲に努力せる處多大なりき。後勞農露國に於て異常の大事業と目せられたる統一勞働學校の組織せられたるも、此婦人の創案に成れるものなり。

危険人物

さてレーニンは、ペテログラード在住の間、法律家は看板にて、其實革命運動の爲めに努力し、勞働者を友として其の教育に盡力し、種々秘密出版を爲せしかば、政府の目よりは、頗る危険人物と睨まれ、爲めに彼れは、踪跡を晦まして常に勞働者街に住居せり。然れども、官憲の目は、一日と險しくなり、遂に彼れは捕へられてペトロバウロスクの監獄に繋がれしが、千八百九十七年一月二十九日、彼れは勅令を以て東部西比利亞に追放せられぬ。此時レーニンは二十九歳の霸氣滿々たる時代なれば、雪の西比利亞に流刑せらるるも、敢て意氣銷沈の色なく、日頃讀書研究の念深かりしかば、此處にて幾多の社會主義に關する著述を爲せり。既にして西比利亞三年の

刑期滿ちて放釋の身となれるレーニンは、千九百年五月五日、外國漫遊を思ひ立ち、西歐諸國へと彷徨ひ行きしが、外國に在つて、同志と共に雜誌イスクラを發行せり。是れ「火焰」、「火光」とも譯すべきものにして、當時の亡命露國社會主義者の運動中心となり、延いて全露國社會主義宣傳の根源となれり。而してレーニン夫人は、己れイスクラの幹事となり、且つ露國在住の同志に向つて、無數の暗號通信を書くの任務を執り、爲めに健康を損ふ迄に精勤せりといふ。されば、當時のレーニンは、露國官憲より、愈々危険人物視せられたるのみならず、西歐諸國政府よりも壓迫を蒙り、一所に定住すること能はずして、隨時、倫敦、巴里、ミューニッヒ、ブラッセル（ブリッセル）と轉々して、亡命生活を送り、最後に瑞西のジュネヴ（ジュネーヴ）に定住する事となれり。

瑞西亡命時代の貧窮生活

兎角して、千九百五年、露國は我が日本との戦争に破れたるに乗じて、國內の社會黨は一齊起つて革命を起し、遂に露國皇帝をして民衆に一大讓歩を爲さしむるの餘儀なきに立到らしめたり。

其の結果、革命派の亡命者も久しぶりにて歸國を許されければ、レーニン一派の士も瑞西を發して歸國し、種々畫策する所ありしが、露國專制主義は再び盛り返して勢力を得、爲めに、レーニン等は又も本國を追放せられて、一先づフィンランドに逃れ、次いで瑞西、パリと其の亡命生活を續くる事となりぬ。かくて、彼等は、千九百〇八年より十年迄の二ケ年をば、パリの圖書館に通ひて、専心社會主義を研究せり。此間に彼れが讀破せる處多大にして、彼れの該博なる智識は、茲に淵源すと言はる。其後、彼れは、故國近き地を便利なりとして、クラカウに移り住みしが、今次大戦起るや、好機來れりとなし、大戦の結果、必ず己れの乗すべき隙を見出し得べしと思惟し、寧ろ露國の敗戦を希へり。かくて大戦酣なりし千九百十六年より十七年の間、露國に

三回の大革命起る迄の一ケ年を、彼れは瑞西のチューリッヒ市に住めり。此頃の彼れは貧困の極にして、他日大露國の無冠王と仰がる、身も、此時のみは蛟龍泥中に蟄せる慘境なりき。彼れの宿所は、市中の一貧賤なる靴屋の屋根裏にして、其處には四室ある中の一室をレーニン夫妻は間借りなし、他の二室にもそれく、間借りの人住み、残り一室は、共同の炊事場なりき。此の炊事場にて、レーニン夫妻は、其の尤も貧しき食事を調へたるものにて、彼等夫妻の居室には一個の卓

子、二脚の椅子、一個の小暖爐、粗悪なる寢臺と寢椅子、石油ランプ一個あるのみにて、室代は一ケ月三十八法といふに至つては、其の窮境察すべし。

第七章 レーニンの活躍

革命に乗じて故國に歸る

レーニンは、瑞西に在りて、斯かる不遇の生活を送り居る中、千九百十七年三月、露國に大革命勃發して、ロマノフ王朝覆滅せるの報に接せしかば、彼れは、積日の妖雲を排して、青天を見るの思ひをなし、一刻も早く、故國に歸り、日頃の經綸を布かんものと、心矢竹に慄れども、さて歸國の通路を如何にすべき、先づペトログラード勞兵代表委員長たるチヘーゼに依頼して、英佛兩國に交渉して其の勢力圏を通過し、露國に入るの方法を講ずる事となし、若し英佛之に應ぜざれば、更に獨逸に交渉する事となせり。但し此際、レーニンは、聯合側も同盟側も、共に己れを援助するの見込なしとて、許可なしに獨逸を潜行して露國に歸る事を策し、依つて己れ瑞典

人なりと詐稱して、旅行免許を得ん事を思ひ立ちしも、瑞典語を知らず、依つて啞者の使用する二枚旅券を取得するの計劃を進めしが、こは遂に成功せざりしといふ。さて獨逸政府への交渉方は、先づ瑞西の社會黨員を介して、當時の瑞西駐劄獨逸大使ロンベルトに會見せしめ、依つて要求を提出せしめて曰く、「獨逸政府は、此際歸國を希望する露國亡命客には、凡べて通行の自由を承認すべく、又歸國者名簿を檢閲するの權利は、歸國者側に於て選定せる委員のみ之を有し、獨逸官憲は、一切干渉せざる事。就いては之が代償としては、亡命客は本國歸還後、在露獨逸捕虜の對遇改善に全力を盡すべく、又同傷病兵の歸國を速かならしむる爲めにも、最善の努力を爲すべし」と。獨逸大使も、此の餘りに蟲の好き注文に一驚を喫したれども、既に露國は、大革命を受けて國情變化したる際なれば、無下に拒否せんも如何と思ひ、早速之を本國政府に通報せり。

旬日の後、獨逸政府よりは、亡命露人の要求を全部承諾する旨の回答來れり。蓋し獨逸政府にては、「レーニン一派は、帝國主義と戰爭とに絶對反對を表する者なれば、彼等を至急歸國せしめて、露國に戰爭中止の宣傳を爲さしめ、延いて、露國を英佛の協同戰線より脱退せしむる

事、此際獨逸に取つて尤も有利なり」と思惟し、依つて斯く無造作に承認を與へたるなりき。但しレーニン一味の中には、「從來敵國たる獨逸の許可を得て其の領内を通りて歸國するが如きは、他日種々の非難を招き、政治的迫害を蒙る虞れあり」とて、異論を唱ふる者も多かりしが、宛かも此時、前日チヘーゼをして交渉せしめたる英佛側通行歸國の事は、斷然拒絶せられたる旨回答來りしかば、今は唯だ獨逸を通過して歸る外なき事となれり。依つてレーニン等は、小兒等と共に、一行四十名、瑞西を發して、其日の夕方獨逸國境に着せしに、忽ち獨逸の國境守備兵の爲めに押へられて、税關に引立てられたれば、或ひは敵の術中に陥るか危みしも、彼等は政府の契約せる條件に従ひて、一行の身分證明其他携帶品の檢査に及ばず、唯だ人員を數へたるのみにて放還せり。依つて、一行は、再び列車内の人となり、是よりは獨逸國內を通行し、やがてフランクフルト・アム・マイン驛に來たりしに、同地駐在の獨逸兵士等は、露國革命家が同地を通過すと聞き、警官の見張りを突破して列車に近づき、麥酒をレーニン等に贈りて握手を求め、早く戰爭を中止するの努力を望めり。かくて數分間語り合ふ中、此の兵士等は何れも獨逸の社會主義者シャイデマン派に屬する勞働者なる事判明せしかば、レーニン一行は互ひに相顧みて「獨逸も、

兵士等漸く露國の社會主義革命に共鳴する様にては、國運最早下り坂となれり」と耳語せり。
一行の列車がベルリンに着せる時には、警戒甚だ厳しく、發車する迄護衛の私服警官一行を取
圍みて監視せり。一行は、それよりバルト海岸に出て、船にて瑞典に渡り、更に海上より露國
に入る事となりしが途中、瑞典の首府ストックホルムに於て、獨逸人の手より、瑞典の金貨三
百クラウンを贈られたり。一クラウンは我が五十四錢に當りたれば、合計百六十二圓に過ぎず、
四十八に分配して一人四圓餘りなり。當時、世界に流布せられて、噂の種となりし、レーニン
獨探の嫌疑は、此の小使錢にも足らざる贈遺の誇張せられしものなりき。かくて、一行は海上無
事、四月下旬、久々にて本國の土を踏む身となりしなり。

ケレンスキー對レーニン

かくてレーニンは、革命後一ヶ月を経過せる頃、國都ペトログラードに歸り來り、過激派同志
と共に、會つてセルギー大公が寵愛の女優に與へて、帝政時代榮華の名残りを留めたるクセシン
スカヤの別荘を本據として、革命運動に着手する事となれり。當時露國內の形勢を見るに、其國

論は此際和戰何れを取るべきかに付きて沸騰せる状態なりき。されば此の問題は、露國諸黨派の
試金石にして、之に對する國論大體三様に分れたり。第一は臨時政府の閣僚、殊に親英派たる
外相ミリュコフ等の主張する處にして、其の政策としては英佛諸國との最初の盟約に基き、飽
迄獨逸と戰いて最後の勝利を占めざるべからずとするに在り。全露國の有産階級、地主階級、其
の他、社會の現狀を維持する事に依りて、極端なる社會主義の災厄を免れんとする者は凡て之に
屬せり。次は、勞兵委員會の主張にかゝり、非賠償の平和を旨とし、其の牛耳を取れるはチヘー
ゼ、ケレンスキーの徒なり、第三はレーニン一派の過激派にして、こは、純然たる勞働者階級の
立場に在るが故に、帝國主義を排し、戰爭を一刻も早く中止すべしと主張せり。以上三派の對立
は、到底一致點を見出しがたきものにして、資本家出身の大臣を網羅せる臨時政府は、革命の中
心勢力たるケレンスキー一派の勞兵會にも諮る事なく、五月二日聯合條約を確守して、最後の勝
利迄戰爭を繼續せざるべからざる旨を中外に聲明せり。斯くと見たる勞兵會首め、庶民は大いに
憤慨し、政府に對して非難を加へ、依つて勞働者と兵士とより成る大示威運動を起し、内閣の所
在地たるマリヤ宮前の廣場に押寄せたり。殊に、レーニン一派の過激派は尤も激烈なる示威を開

始し、幾千の赤旗を翻して、之には「政府を倒せ！」「ミリュコフ一派を退治せよ！」と大書して市中を練り廻れり。越えて五月四日に至り、形勢一層切迫し、労働者亦武装して赤衛軍を組織し、前日にも増して猛烈なる示威行列を行へば、政府黨は又士官學生等を自動車に分乗せしめて旗を押立て、「政府を信頼せよ」「ミリュコフ萬歳」と書し、労兵側の示威に對抗して、市中を練り行く程に、兩團體市中各所に於いて衝突を起し、流血の慘狀を見たり。其結果、政府は労兵會の爲に壓倒せられて屈伏し、帝國主義の外交家たるミリュコフ外相及び労兵會に反對の張本と目せらる、陸海相グチコフの二人辭職し、臨時政府は、人員を差替へて労兵會の意を迎へたる聯立内閣を組織せり。即ち是れ前内閣と労兵會との妥協内閣にして、前内閣に在つて、労兵會側の代表者は、社會革命黨のケレンスキー一人なりしを、新内閣には、労兵會側よりケレンスキーを初め、五人の社會黨大臣を加へ、ケレンスキーは陸海軍相たる要職に就けり。先きに内閣の中心立憲民主黨に在りし日に於て、萬事勞兵會委員會の制肘を蒙れる政府は、今や全然勞兵會の爲めに占領せられたる形なり。然れども、ケレンスキー以下の社會黨大臣も、一旦己れの手に政權を掌握するや、彼等は忽ち軟化して、自己の地位を維持するに力め、從來己れの身がたりし、

レーニン一派を疎隔し、之に壓迫を加ふる事となれり。内閣の秘密會議に於て、社會黨大臣の一人ツレテリは、「彼の過激派と武装せる労働者とは、我が革命政府を危地に陥るものなり、疾く其の武装を解除せしめざるべからず」と唱へ、彼等は今や有産階級の身方となり、其の後援を以てレーニン一派の過激派を剿滅せんと圖れり。

第八章 レーニンの失脚

過激派の奮起

此に於て過激派は七月一日に大示威運動を行ひ、「飢ゑたる者に麵包を！農民に土地を！全世界に平和を！」「十人の資本家大臣を倒せ！」「即刻各方面の戦争を放棄せよ！」「政權を労兵委員會に引渡せ！」など大書せる赤旗數百を翻して、政府反對の大運動に着手せしが、何ぞ圖らん、翌二日、國境の露軍は一大攻勢に轉じて獨軍を破り、捕虜一萬を獲たる報ありて過激派前日の示威運動も嘲笑の種となり、當日のペトログラード市は、官吏、新聞記者、果ては美裝

せる貴婦人等の行へる愛國的示威運動に依つて、政府謳歌の響に満てり。是れが爲め、過激派は、一時殆んど潰滅に瀕すと見えしも、七月中旬より下旬に亘り、獨逸軍は捲土重來の勢ひ烈しく盛返し來りて、露軍は大敗し、其の樞要地ガリシヤ一帯を奪はれて退却する事となりしかば、過激派は一層勢力を得て政府に肉迫し、「疾く十人の資本家を放逐し、國家の大權を勞兵委員會に引渡せ！」と叫び、レーニンは、「今日の場合、有産階級の獨裁か、將た無産階級の獨裁か、二者一を擇むべきのみ。其間決して妥協を許さず」と斷言せり。

偶々此時、ウクライナ即ち小露西亞地方にては、自州の獨立を宣言せしが、露國臨時政府は其處置に困じ、一時の彌縫策として、小露の自主的地位を容認せる爲め、立憲民主黨出身の大臣等は憤慨甚だしく、連袂して閣外を去れるの事情は前條に述べたるが如し。此折り、政府の實權者たるケレンスキーは獨逸國境の戰線に在りて士氣を作興するに努め居たるが、内閣に紛議起れるを聞き、急遽國都に歸り、大臣の空位に自派の士を任命すると共に前後策を講じ、事一旦収りたるを見て再び戰線に赴けり。然るに、兵士及び過激派はケレンスキー等の施政を以て緩慢なりとし、其の有産階級に媚びて革命當初の趣旨を没却せるを難じ、七月十五日には、過激派の閣將

たるトロツキーは人民館に現はれて、戰爭反對の大演説を爲し、以て人民の反政府熱を煽りしかば、翌十六日には、早朝より、ペトログラードの武装勞働者及び機關銃隊、野戰聯隊其の他の兵卒續々過激派の本據たるクセシンスカヤの別荘に集まり、疾く事を擧げて政府を倒さん事を議せり。レーニン、トロツキー等の過激派首領は、機運未だ熟せざるが故に暫く形勢を觀望せんとせしも、革命を叫ぶ民衆は、刻々勢を加へ、十六日夜半ネフスキー大通りに於て、政府黨と衝突し、暗中に銃を亂射して數百の死傷者を出せり。かくて十七日早朝より形勢一層險惡に赴き、革命民衆に参加する勞働者兵卒の數刻々に數を増し、更にクロンスタットの水兵中革命を叫ぶ者數十名來りて之に應援せしかば、武装的示威運動は直ちに革命の市街戰と化せり。政府にては大いに狼狽し、急にタウリツ宮殿に會して應急策を講じ、市中各聯隊に行動を命じて革命亂民を鎮壓せんとせり。然るに、是等聯隊中には革命軍に加はれるあり、又は中立の態度を取りて政府の命に應ぜざる者あり、ケレンスキー一味の勞兵會中央委員會さへも叛軍の包圍に陥り、露都全部革命黨の手に歸せん狀勢と見えたり。

賣國奴の汚名

政府は此の切迫せる危機を救ふべき唯一の所置として、戦地より軍隊を召還すると共に、叛民に向つては、即刻「共和政體の制定」「土地改革法の實施」「國民議會の解散」を聲明して革命鎮撫に力めしかば、翌十八日には、亂民稍鎮靜に歸し、十九日には戦線より還り來れる政府軍多數既に市中に入り來るにぞ、革命軍は衆寡敵せずして、其の根據地とせるペトロパウロスク要塞を撤退せり。越えて二十日二十一日には、革命軍の殘黨尙ほ民家の屋根裏に機關銃を据付けて街上を通行する政府軍を射撃する者ありしも、大勢已に去つて革命軍は四散し、さしも混亂せる市街戦も一先づ終りを告げぬ。此の際死傷一千人に及べり。政府にては當分の間ペトログラードに戒嚴令を布きて一層警戒を嚴にせり。

かくて七月革命は一日鎮靜せしが、其結果を見れば、過激派の凋落、ケレンスキーの大權掌握、反革命團體の擡頭となり、政府系並びに有産階級の新報紙は、皆今回の騒亂を單なる亂民の暴動にして革命的の性質を帯びたるものに非ずとなし、且つ之を以て過激派が政權を奪はん野心の發露なりと攻撃せり。之と共に、政府にては、此機會に過激派一味を滅ぼして、自己の安全を圖らん事に腐心し、其の結果、過激派首領レーニンに獨探の汚名を被らしめぬ。抑もレーニンの獨探問題の發端は、前にも述べたる如く、レーニン等一味四十名が敵國たる獨逸を通過して歸國せるより起れるものにして、此時世上に流布されたる獨探の内情といふは「獨逸參謀本部は、露國をし獨逸と單獨講和を締結せしめんが爲に、レーニンを買収し、ストックホルムの獨逸大使館よりレーニンに運動費を供給し、仲介者の名義にて西比利亞銀行に二百萬ルーブルの當座預金あり。是れ皆レーニンに贈與せられたるものなり」といふに在り。従つてレーニンは、獨逸の帝國主義の爲に露國を攪亂する賣國奴にして、露國及び露國革命の敵なりと讒せられたるなり。今日より見れば、一笑に付すべき此の獨探説も、當時に在りては資本主義諸國の宣傳に依つて、全世界に流布せられ、世人の多くは之を眞と思へるなり。されば本國の露西亞に在つては、殆んど確定事實と目せられ、多數國民の憤怒を買ひ、昨日迄過激派に同情せる一部軍隊すらも、疑懼を起し、從來中立態度を取りしものは忽ち過激派に反對を表するに至れり。かくてレーニンが、其頃勞兵委員會に於て演説を爲し、其の中に「余は本日戦線に於て、我が兵卒が獨逸兵と握手交驩せりと

の報に接せり、是れ近く平和を招来すべき吉報にして、余は衷心歡喜するものなり。……吾人にして近く政權を掌握するに至らば、余は施政第一に、我が大資本家數十名を捕縛して、彼等が如何に不正なる手段に依つて、斯かる巨萬の富を貯へたるかの内情を逐一摘發すべし」と叫べるの言を捉へて、是れこそはレーニンが獨探なるの證左なりと唱へ、以て國民の疑心を挑發せしめぬ。かくして政府は過激派を窮地に追ひ込むと共に、レーニンを獨探罪に問はしむるに決し、彼れ及び其の一味の逮捕令を發せり。

レーニンは此際非常の覺悟を定め、政府の爲すが儘に捕縛を受け、法廷に立つて自己の冤罪を陳述せんとせしが、過激派中央委員會は、此の如きは、自ら死地に陥るものにして、今日の場合、司法權の獨立も保じがたしとて、之を止めしかば、レーニンは水兵に變裝し、夜に紛れてフィンランドへと亡命せり。從來フィンランドの民族自立運動に對して、過激派は唯一の後援者たる關係あるが故に、レーニンが身を潜むるには、倔強の地たり、且つ露都より里程も遠からず、萬事便宜あれば、爾後十月下旬迄、彼れはフィンランドの一同志の家に隠れ、遙かに故國の同志を指導せり。此頃の事、レーニンは一日フィンランドの汽車旅行中、一老婆列車に入り來り、大聲他の乗

客に物語る狀異常に昂奮して見えしが、レーニンは其の語を解せざれば、同行フィンランド人にして、露語に通せるものに其故を問ふに、此の老婆、其日山に薪を探りに行き、やがて歸路に就かんとする處へ、武装せる兵士出て來りしかば、老婆は暴行を加へらるゝものと思ひて驚き逃げんとせしに、兵士は温顔之を呼び止め、老婆を劬りて薪を運び呉れたり。老婆は今此の事を物語りて、最早、鐵砲を擔へる兵士も、怖るべき敵に非ずして、愛すべき身方なりと歡喜せるなりと云ふ。レーニン之を聞きて、兵士が戰爭に倦み、武装を解きて、故山に耕作せん事を欲するの情如何に切なるかを思ひ、自己の主張實現せらるゝの日も遠からじと喜べり。但し露國に居残りしトロツキー以下の同志は、獨逸政府と通じて、其の軍事計畫を援助せんが爲めに、七月十六日の露都に於ける革命叛亂を煽動せるものなり、是れ賣國的革命犯罪なり」との理由を以て、逮捕監禁せられ、過激派本部は、家宅搜索を受けて政府に沒收せられぬ。

第九章 天成の過激漢トロツキ

其の生ひ立ち

尙ほ、此際、レーニンの片腕として、尤も過激なる行動を執れるトロツキの経歴を述べんに、彼れは、千八百七十七年、南部露西亞なるヘルソン州のエリザベツトグラードに生れ、父は其地方の富裕なる財産家なりき。彼れ元來猶太人にして、本名はライバ・ブロンシタインにして、トロツキは其の變名なり。彼れ初めオデッサ大學に入りしが、元來陰氣なる學究たるを嫌ひ、其の在學中の感想を、「學課に縛られ、思想の自由なく、窒息する如き大學生活よ」と記せり。二十歳にして、大學の業を卒ふるや、直ちに労働者の群に投じて、オデッサ郊外の秘密結社に出入せり。かくて彼れはオデッサに近きニコライエフの労働者に、共產主義の宣傳を爲し居たる中、千八百九十八年の二月官憲の爲に危険人物として捕縛せられ、オデッサの監獄に繋がる、身となれり。彼れは翌年十月十日迄未決監に在り、此間に讀書に耽り、最も勉學せりと言はる。

かくて十月十日、裁判確定し、四ヶ年の西比利亞流刑に處せられ、千九百〇二年の初め、ウスクットの流刑地に到着せしが、彼れは直ちに脱獄して、西比利亞に於ける社會民主黨第二回大會の組織準備の爲めに活動せり。此の大會終りて後、トロツキは潜行して瑞西のジエネヴに亡命せり。是れより先き、千九百〇一年、レーニンは、已にジエネヴに亡命して、他の同志と共に「労働解放同盟」を組織し、「火花」誌發行中なりしかば、トロツキも此亡命者の仲間に加はり、「火花」に筆を執れり、彼れが此の機關雜誌に従事せるは、千九百〇二年十一月より、千九百〇五年三月十七日迄にして、其の後彼れはジエネヴを去りて露國に歸り、國外國內双方の社會主義運動に従事せり。かくて千九百〇五年、即ち日露戦争後の露國第一回の大革命當時には、彼れ日頃の革命思想實現の機來れりとて、最も猛烈なる活動を開始せり。此の時、露國には、最初の勞農團體組織せられ、トロツキは其が領袖の一人として、其の雄辯と、民衆に理解し易き、簡單にして力ある文章を草するの才幹とは初めて萬人に認められぬ。從來露國の社會民主黨領袖等は、主として智識階級の讀者と聽者に訴ふるの技倆を有せしも、トロツキに至つては、能く、其の簡單痛烈にして、而も明白なる文句に依つて、一般民衆の肺腑を抉ぐるの術を知れり。其の際、彼

れは、最初労働團體の執行委員の一人たりしが、委員長フルスタルフが逮捕せられたる後代つて委員長に推され、各種の集會に現はれては、團體の趣旨を宣傳し、又罷工を行ひ、各組合代表者との商議に盡力し、時には労働者を代表して、一同志の放釋の爲めに、政府要路の大臣を其の官邸に訪問せる事ありき。

千九百〇五年十二月五日、露國首相ウッテは、労働團體の有力者を一網打盡に捕縛するの計畫を立て、警官隊を遣はして労働會館を襲はしめぬ。當日トロツキーは、外出して在らざりしが、歸館せる時、已に多數の同志は逮捕されたる後なりき。故に、彼れにして其場を遁走せん事容易なりしも、彼れは自身進んで逮捕を受け、獄舎の中に在りて、又も専心讀書せり。かくて彼等はペトログラードの監獄に一ヶ年の未決囚たりしが、終身流刑の判決を受け、千九百〇七年一月三日、流刑地なるオブドルスクに護送せられぬ。此時、彼等は、途上特別の監視を受け、外界との通信、全然遮斷せられしにも拘らず、到る處の停車場には、土地の労働者群を爲して、囚人トロツキーの列車を迎へて歡呼し、警戒の兵士さへも、彼等に敬意を表せり。やがてテューメンに至り、一行は列車を下りて轎に乗り替へしが、積雪野に山に逼る眼界は、一白荒寥たり。トロツキー

は之を日記中に、「一日一日、我等は寒氣と寂寞との世界に沈み行けり」と書せり。されば、彼等は此の寂寞境に終身刑となるを好まず、又も途中逃走を企て、首尾能く成功せり。此邊りには、轎の通ずる氷結せる通路は唯一筋なりしかば、トロツキーは、此の本道を避けて八百露里が間路なき荒野を轎にて走り、官憲の目を暗まして所在に潜み、春暖の候漸く國外に脱する事を得たり。それより彼等は奥地利の國都ウィーンに居を定め、爾後千九百十四年迄、多く此の地に留ま

れり。
ウィーンにて、トロツキーは、直ちに社會黨の運動に加はりて、「労働新聞」に協力し、一時、ボヘミア(ベーマン)の化學工場に雇はれしが、やがてウィーンに程近きジーフリングに移れり。千九百〇七年、彼れはレーニンらと共に、露國社會民主黨の代表員として、スツットガルトの萬國社會黨大會に列席し、千九百十年には、レーニン、カメネフらと共にコーペンハーゲンの大會に出席せり。同年、彼れはソフィヤの汎スラヴ大會に出席し、汎スクラブ主義に對する猛烈なる攻撃演説を爲して聽衆を驚かせり。千九百十二年には、トロツキーは全歐洲に於ける露國革命家の秘密大會組織者の一人としてトロポールに在り、翌千九百十三年、ブルガリヤと土耳其の休戰

條約成立當時、彼れは露國の二新聞の戰時通信員としてコンスタンチノーブルに在り、夫れより佛、瑞、獨、墺諸國を巡遊し、バルカン諸國を経て、再びウィーンに歸りしが、此時よりして、彼れは一層徹底せる國際主義、非軍國主義者となれり。此頃、彼れ、千九百〇五年の露國第一革命の歴史を著して、獨逸にて出版せり。獨逸語は彼れの得意とする處にして、佛語、英語も語れり。當時彼れの居住は、僅か三室の小屋にして、其居室には書籍と新聞雜誌山積せる外、何の裝飾もなく、若き夫人は二人の幼兒を伴りしつゝ、家事を取賄へり。

彼れの歸國

千九百十四年八月三日、歐洲大戰勃發するや、トロツキーは、敵國の臣民なりとして、墺國より退去を命ぜられ、瑞西のチーリッヒに移れり。彼れは此の戰爭に對して、最初より明白なる自己の態度を宣言し、軍事費に協賛を與へたる獨逸の社會民主黨を激しく非難し、又、聯合側の社會黨員が忽ち平素の主張を變じて、各自其の政府の軍國主義を支持せる無節操を痛撃せり。かくて、彼れは瑞西のチューリッヒに居を定むるや、筆を呵して「戰爭と國際主義」なる一小冊子を著は

し、千九百十四年十月之を出版せり。其の最後の一章に、彼れは其の主張を要約して曰く、「此戰爭の終局としての和約條件としては、第一に、非賠償、第二に、民族自決權、第三に、國王と常備軍と封建的特權階級と秘密外交となき全歐の聯邦組織を要す」と。此の小冊子は、瑞西の社會主義者等に依り、靴の底に隠して獨逸の各地へ撒布せられしかば、獨逸の法廷にては、トロツキーに對して召喚狀を發せしも、彼れは出廷せず、缺席裁判にて六ヶ月の禁錮を宣告せられぬ。其の頃、勞農團體は親獨主義なりと評せられしも、トロツキーの此の小冊子には、此風評の全く虚妄なるを證せり。即ち、彼れは、獨逸の兩帝室の上に、最も大膽なる筆鋒を向けたり。其後間もなく、彼れは露國亡命者が巴里にて發行せる社會主義の雜誌「聲」に協力する事となり、己れ亦巴里に移れり。

千九百十六年、トロツキーは、「吾等の言葉」なる一書を著せしが、佛國政府は之が發賣を禁止し、且つ彼れに國外退去を命ぜり。同書發賣禁止の理由は、其頃佛國のマルセーユ港に在りし露國の兵士が、市中散歩を差止めたる上官を殺害せる事ありて、其の下手人が、トロツキーの「吾等の言葉」を多數所持せし爲めにして、又彼れの國外退去は、彼れが或る過激主義の團體に加入

せし爲めなりと言はる。トロツキーは去つて瑞西に入らんとせしに、同國の警察は之を拒絶せる爲め果たさざりき。彼れは此の際、匍匐佛國に留まらん事を望み、巴里の警察總督に向ひ、「退去を命ずるよりは、寧ろ余を監獄に投ぜられたし」と乞へり。そは、當時戦局の觀察や革命運動の狀勢を知る上に於て、佛國が尤も好適の地なりしが故なり。然れども、彼れの乞ひは容れられず、去つて西班牙に赴きしに、國都マドリードに入るや、直ちに逮捕せられ、三日の間監獄に拘禁せられたる後、西印度のハバナに送らる、事となり、西班牙西岸のカヂズ港に赴き、妻子共に米國に渡れり。

米國に着して紐育に居を卜し、生活の資を得る必要より、トロツキーは、同地の露字新聞に寄稿する事となれり。間もなく千九百十七年三月の露國大革命勃發せしが、トロツキーは敢て怪しむ色もなく、此の如きは既に十分豫期せる處なりと語れり。三月廿七日那威の汽船にて歸國の途に上りしに、加奈陀のハリファクスに於て英國官憲の爲めに逮捕せられ、四百の獨逸捕虜水兵と共に一ヶ月間抑留せられぬ。彼れは、此間、獨逸の捕虜に向つて、共產主義の宣傳を試みしが、此の經驗に依りて、遠からず獨逸にも革命起るべきを確信するに至れりといふ。此の時露國

にては臨時政府の外務大臣ミリュコフより、英國官憲に交渉せる結果、英國官憲はトロツキーを放釋せり。此に於て、トロツキーは倫敦及びストックホルムを経由して、五月十七日始めて國都ペトログラードに到着せり。是れレーニンの歸國に遅る、事一ヶ月なりき。是れよりして、彼れは、レーニンと相提携して革命の本舞臺に横行濶歩せるなり。

第十章 過激派の擡頭

ケレンスキーの難局

さて、レーニン亡命し、トロツキー獄に投ぜられて、過激派の勢力少しく衰へたるが如きも、露國人民は即時戦争休止の説に動かされて動搖甚だしく、外には其軍、獨逸軍の爲めに破らる、あり、聯合諸國皆露國政府の意のある處を疑ふに至れり。依つて、ケレンスキーは、八月上旬、聯合側諸國に對して、「我が露國は決して單獨講和を行ふものにあらず」と聲明せり。然れども、一日講和風に吹かれたる露軍は、最早戦はん心なく、政府は如何に焦慮するも、戦線の兵

士を動かす事不可能の情勢なり。加ふるに、兵士等は、其の將校輩が帝國主義を唱へて、帝政を擁護せんとするを知りて、頗る之を含み、上官の命に反抗するの態度日に増して顯著となれり。政府にては、ガリシヤの大敗と、兵士等の反抗とを共に過激派の煽動に依るものなりとして、之に對する迫害一層甚だしく、ケレンスキーは、さき一旦廢止せる死刑制度を復活し、脱走兵士をば凡て死刑に處すべしと威嚇し、過激主義宣傳者を容赦なく捕縛投獄し、其の機關新聞其他印刷物を差押へ、ペトログラード労働者の武装解除を迫りしかば、其牢獄は、革命兵士及労働者を以て充溢せり。此に於て、過激派勢力を失ひ、ケレンスキー又其の本來の革命精神を失ひて、資本階級に結托するの風あり。今や國內歸一する處なき状態なり。此虚際に乗じて、露國には反動精神擡頭し來り、僅か半年前迄露國の支配權を握りし軍閥、帝政主義殘黨、其他の保守派は、相一致して反革命運動を起す事となれり。彼等は舊王黨に屬するコザック兵を中心勢力となし、以て過激派は勿論、勞兵委員會の根幹たる社會黨を撲滅せんと圖れり。之が爲め、政府内に於ける社會黨と非社會黨の間に、數々衝突を來たし、時局困難となりて、首相ケレンスキーは、二回迄政權を投げ出せしが、而も此の國歩艱難の際、彼れに代つて收拾すべき人物なき爲め、其都度政權は彼れの手歸り來れるなりき。而も社會黨の勢力は、其都度減少せられて、反動團體の擡頭一層目覺ましくなり。八月下旬に至つて、反革命將帥コルニロフの陰謀となれり。

コルニロフの亂

八月下旬、モスクヅ會議、クレムリン宮に開かれしが、ケレンスキーは此會議を利用して、政府の難局を切り抜けんせしめ、彼れの演説は何等の反響を呼ばず、却つて露軍最高指揮官コルニロフ將軍の言説勢力を得るの結果を見たり。コルニロフは、此際露軍の軍紀を徹底的に振起して、積極的に、我れより攻勢に出づるの必要を説きしに、満場の大喝采を博し、名聲一時に揚り。勿論コルニロフの背後には、軍閥、地主、有産階級らの反動團體ありて彼れを擁立せしなり。ケレンスキー之を見て、心を動かし、依つて此際兵力を回復せんが爲めには、日頃軍隊の解散、戰爭中止を唱ふるレーニン一派の過激派並に勞兵委員會を撲滅し、同時に現下全露の労働者、農民、軍隊の上に刻々侵潤する革命思想に一大鐵槌を加ふる事、喫緊要事なりと思惟し、依つて最高軍事司令官たるコルニロフの權力を一層擴大し、彼れが率ゐる騎兵軍團を露都に移し

て、勞兵委員會の勢力を壓倒せんと企て、將に事を擧げんとする際、一方過激派にては、早くも之を探知し、こは一大事なりと、其の領袖鳩首凝議の結果、當時冬宮にありし過激派の水兵等をしてケレンスキーの寢所を襲はしめ、短銃を其の咽喉に擬して「即刻、コルニロフは革命の敵にして且國賊なる事を公表せよ！」と迫らしむ。ケレンスキーは事急にして救を求むるの術なく、「余はコルニロフの共謀者に非ず」と陣辨し、遂に、過激派の要求通り、コルニロフを叛賊なりとして公表せり。此の際、ケレンスキーは、コルニロフが、一日革命黨を撲滅せる上にて、或ひは己れをも放逐するに非ずやとの疑心を生じ、かくは唐突にコルニロフを窮地に陥れたるものなりとも言はる。

コルニロフは、ケレンスキーの公文を見て、其の背信を激怒し、直ちに其のコザック兵を指揮してペトログラードに押寄せたり。勞兵委員會は、之を見て大いに驚き、急に之が防禦策を講ぜしも、彼等は過激派と和合する事將來の危険大なるを思ひて、判然たる態度を示し得ざりき。されば、過激派自らに於ては、ケレンスキー政府の安危の如きは問題外なりとするも、軍閥を代表するコルニロフの爲めに國都を蹂躙せられ、自派の勢力を殺がらる、事尤も苦痛なれば、今は自

己防衛の爲めに奮起する事となり、先きに七月騷擾の際、無頼漢として嘲笑せられたるクロンスタットの革命主義の水兵等は眞先きに國都に入りてコルニロフ軍を撃退するの準備を爲せば、等しく七日騷擾後の武装解除を命ぜられたるペトログラードの勞働者又新たに武装して起てり。かく此の二團體は過激派の中心勢力となれるなり。かく國都既に過激派武装軍の爲めに防禦せられしかば、コルニロフの率ゐるコザック軍は躊躇逡巡して士氣動搖し、敢なく革命軍の爲めに破られて、コルニロフ將軍は半途より逃亡して、行衛を暗ませり。要するに、是れ、革命の氣運露都に充滿して、反革命の到底奏功しがたきを證せるなり。

コルニロフの敗軍は、これやがて全國の反動團體即ち軍閥、官僚、有産階級、地主等の勢力失墜を示せるものにして、革命軍の勝利はレーニン等過激派の勢力挽回を證せり。此間に立てるケレンスキー派の勢力は唯だ形骸にして、從來彼れを支持せる諸團體も今は形勢觀望の體となれり。斯かる際、十月八日勞兵委員會の大會ペトログラードに開かれしに、過激派は四百票に對する五百票の多數を以て幹部不信任案を通過せり。之が爲め從來勞兵會の指揮權を握りて、ケレンスキーを應援せしチヘーゼ一派の幹部は辭任し、同委員會は、全然過激派の勢力に歸せり。され

ば、先きに七月騒擾の際、過激派討伐の爲め、戦線より召還せられたる諸聯隊も、ペトロ・グラードの空氣に化せられて全然平和主義に傾き、過激派の身方となれり。

ケレンスキー對トロツキーの舌戦

此の如き形勢に對して、ケレンスキーは自己の勢力挽回の爲めに焦慮せる結果、臨時民主議會を開設する事となれり。是れ名目上、政府の諮問機關なるが、其の眞目的は、此の機關に己の責任を轉嫁し、此の機關の決戦を以て、レーニン、トロツキー等の過激派の壓迫を脱し、此の機關を利用して、來るべき全露憲法議會の總選舉に大統領の地位を贏ち得んとするに在りき。されば十月二十日マリヤに開かれたる其の創立大會は、極めて意味深きものなりき。參集せる各政黨各階級の代表者は約五百名にして、場の右側に列せるは商工團と立憲民主黨の有産階級議員にして何れも紳士然たるフロツク又はモーニング姿にて現れたり。中央はエス・エル社會黨にして、背廣服を着せるに反し、左側に列せるは、過激派とマルトフ一派の國際派とて、極めて粗なる詰襟姿なりき。勿論此の會議は、ケレンスキーの魂膽より成れるものなる故に、己の身方なる右側と

中央の議員にて八分を占め、殘る二分の少數は過激派なり。かくて定刻に達するや、ケレンスキーは悠然たる態度にて壇に上り、滔々其の華麗なる辯舌を揮ひしが、其説く處は何等徹底する處なく、唯だ一時を彌縫せんが爲めの舉國一致と誠心誠意を高唱するに過ぎず。されど、其の身方たる右側と中央の席とよりは拍手喝采盛んに起り、次いで、有産階級議員數人の演説ありて、お座なりの麗句を並べ、終つて外交團席に居並べる聯合側諸國の代表者に向つて萬歳を唱へ、一同起立して敬意を表する事となりしが、此時左側席の過激派と國際派とは、萬歳も唱和せず、起立もせず、冷語と冷笑を以て之に應酬せるは奇觀なりき。此の時、トロツキーは、先きに十月初旬出獄せる身の、過激派總帥として此の席に在り。敢然起つて其の直截簡明にして、肺腑を抉るの熱辯を揮ひしかば、今迄、有産階級議員のお座なり演説に情氣満々たりし議場、忽然感電せる如き緊張を起し、此の過激派巨頭の鋭刃の如き音吐に耳を聳てぬ。トロツキーは、開口一番、修飾もなく、麗辭もなく、「本會議は、ケレンスキーと立憲民主黨の私生兒なり」と喝破せしかば、滿場「すわこそ」と總立ちとなり、罵聲、怒號、沸き返る光景となれり。トロツキーは、之を尻目にかけて、一段高く聲を張り上げて、「此の如きは、革命前の國會と何の差異がある。是れ來るべ

き全露憲法議會を欺かんとする陰謀のみ。現政府は立憲民主黨、反革命黨及び聯合側の威力を借り來つて、今後戰爭を繼續し、更に幾十萬良民の生命を犠牲に供せんとするものなり。而も其結果たるや、敗亡して露都を敵に引渡すに過ぎざるべし、我が國民が過去百年間辛苦して漸く成就せる今回の革命が、昨今再び危機に瀕せるの際、ケレンスキーは國都を逃亡してモスクヴに反革命の根據地を作らんと企つるものなり、此の如きは、革命派の賊なり、人民の敵なり。」と、ケレンスキーの急所を突き、「我等はかく國民に背を向けたる反革命主義の會議に列するを好まず。余は今此議會を去るに當つて、我が全露國の勞働者、兵士並びに農民に訴へんとす。諸君は直に民主的平和を回復せよ。政權を勞兵委員會の手に收めよ。而して凡ての土地を一般に與へよ。全露憲法議會萬歳」を大呼すれば、左側席議員一同鬢聲を張つて之に和し、其猛勢議場を壓して右、中央席爲に潛伏せり。トロツキーは壇を下るや、悠悠として其黨員を壓きて退場すれば、其の背後より、右側、中央の議員は怒聲を發して、「カイゼルの走狗、疾く獨逸に去れ」と叫び、ケレンスキーは苦笑する外なかりき。

第十一章 レーニン大權を握る

ケレンスキーの凋落

是れより先き、獨軍は攻撃に出て、リガの重要地帯を占領し、露都ペトロ・グラードは咽喉を扼されたる形となれり。加ふるに、其後獨逸は、全艦隊の三分の二をバルト海に向け、従前に數倍せる優勢を以て殺到せり。ケレンスキーは、之を防禦するの術なく、國都をモスクヴに遷すの議を唱へ出せしにぞ、一方英、佛の反感を受け、他方には、戰爭忌避の聲全國に擴まれり。されば反革命派の人々は、國都をば敵に委して、モスクヴに退かんとの議を唱へたり。其意は、過激化する國都は寧ろ獨逸軍の足に蹂躪せしむるこそ好かれといふに在り。トロツキーは此消息を察して大いに憤慨し、「政府としてペトログラードを防禦するの力なくば、我等の主張に聽いて即刻獨逸と單獨講和を爲せ。之をも斷行し得ざる如き政府は、疾く去れよ」と叫べり。ケレンスキーは、時事日に非にして、自己の政治的生命日に縮むの形勢を思ひ、モスクヴ遷都

に依つて時局轉換を行はんと企て、且つ、之に依つて、革命氛圍餘りに濃厚になり行きつ、あるペトログラードを脱出し、一身の安全を圖らんとせり。されど、遷都の事は容易に決行しがたき儘、彼れは、其の十月末に又一計を案出して、危地を脱せんと力めたり。即ち、彼れは、ペトログラート守備隊の三分の二を獨逸國境戦線に出張せしむるの命令を發せり。かくして、彼れは過激派の勢力下に在りて、其の武力を強大ならしむる兵士を分離せしめ、以て過激派を無力ならしめんとせり。かくして過激派を壓迫して、再び、政權を張らんとせしも、彼れが強敵トロッキーは、却て其の裏を掻き、「我が同志は、慎重調査の上ならては、政府の命に従ひがたし」と抗辯して、守備隊の國境進出を抑へ置き、急に調査機關を設くる名目の下に「軍事革命委員會」を創設せり。其の意は之に依つて、國都守備軍の指揮權を自派の掌中に收むるに在りき。

レーニン 潜行國都に歸る

此時、過激派内部の情勢を見るに、其處には硬軟兩派ありて、其の穩健説を唱ふる者は、暴力革命を用ひて政權を獲得する事は、未だ機熟せずと爲し、現に十月二十日の「臨時民主議會」に

も、黙して傍觀的態度を取るべきを主張せる有様なれば、今やトロッキーが、「軍事革命委員會」を創立するに及んで、異論多く、ともすれば退嬰主義に傾かん勢あり。さきに七月の變にフィランドに亡命せるレーニンは、此の情勢の報道を受けて焦慮し「此の如くんば、同志の團結或は破るゝの危機を生ぜん」とて、今は一身の危険を顧みるの暇なく、匆々ペトログラードに潜行せり。レーニンは、先きに七月二十日附逮捕令狀を執行せられ、獨探罪の首魁として死刑を科せられ居たる重大犯人なるが故に、一步を誤らば、政府の手に落ちん事情に在りき。依つて彼れは、十月二十二日の夜、ペトログラードに忍び入りて、巧に同志の寓所に潜伏し、翌二十三日の夜、トロッキー其他の同志と秘密會議を開き、武力革命を直に斷行するの可否を論ぜしに、此處にも軟論優勢にして、即時斷行の尙早を唱へ、「我等急に武力を以て事を擧ぐるも、戦線の兵士、歸還して我が武力に對抗する事ともならば、先きに、七月の武装示威運動と同一の失敗に終らんと警戒せり。之が爲め、當夜の會合は、何等決定議を見ずして散會せり。

過激派硬論に一決す

然るに、其頃獨逸國境戰場を見廻りて、兵士等の意向を探り歸れる勞兵委員會の代表者等、レーニンを訪ひ、告げて曰く、「戦線に在る兵士等は、十一月十五日迄に單獨講和成らざる時は、何れも塹壕を引上げて隨意歸國すべきを公言し、若し首都の勞兵委員會にして、態度を明かにするの勇氣なきに於ては、我等は此の銃剣を逆さにして國都に向ひ、反革命政府を倒し、同時に勞兵委員會をも、我が敵として戦はんと聲明せり」と。さきに七月迄は過激派を敵とせる戦場の兵士は、今や、尤も急進主義の革命黨と化せるなり。此報に接せるレーニン、トロツキー等は、十月廿八日、再び勞兵中央委員會の秘密會議を開く事となれり。當時レーニンはネヴ川對岸、露都郊外の一勞働者の居室に潜伏中にて、政府の密偵嚴かなるが故に、同夜の會合には、彼れ其の禿頭に假髪を装ひ、いと若やぎて會場に入り込めるは、時に取つての一興にて、同志に一段の活氣を添へぬ。さて愈々會議開かれ、先夜と同じ題目にて、此際武力革命即決の可否を問ふ事となりしに、領袖中の穩健派は、依然反對説を唱へて曰く、「今日の處、戦線兵士中、武装革命を欲する

者あらんも、未だ、コザック、騎兵聯隊、セミヨーノフ護衛兵、自動車聯隊などは、我等の身方たるを保證しがたく、又假令我等の手に一日政權を掌握すとも、久しく之を維持するの成算なきに非ずや。七月の失敗は深く鑑みるを要す」と。されど此時には、前回の秘密會議に於て反對を唱へし勞働者及び兵士の代表者も、皆レーニンの即行説に賛同しければ、大勢の歸する處、愈々斷行に決し、レーニン、トロツキー以下五人の急進派、新たに最高幹部に選ばれたり。

武装革命の準備成る

武装革命の機は既に熟せり。十月三十日、レーニンは、其機關紙上に「同志に告ぐる書」なる一文を掲げぬ。是れ世界の史上最も大膽直截なる政治的論文と言はるゝものにして、其の主旨は「若し、吾人にして、武装に依つて即時政權を掌握する事を爲さざるに於ては、吾人の標語「全權を勞兵委員會に」は空文に歸せんのみ。此の標語を棄ざる限り、吾人は即時決行を要す。全權力か、無か、一を擇まんのみ。斷じて中間の道ある事なし」と。依つて、革命旗揚げの期日を十一月七日と定め、其の本據をスモリヌイ・インシュードに置きぬ。此の建物は八ヶ月前迄露

國皇后直屬の華族女學校なりしも、今は、亂暴なる勞働者及び兵士に占領せられ、疾くより革命の巢窟たりしなり。かくて十一月六日迄には、軍略、政治、經濟上共に一切の準備成り、レーニンは其の冷靜明晰なる頭腦もて、畢生の心血を注ぎて造り上げたる共產主義の新制度を落なく劃策せり。一方に軍事革命委員會の活動は、尤も機敏に行はれ、ペテロパウロフスク要塞並びに兵器廠の奪取、其の他市中の交通機關、倉庫、諸政廳の占領等も、六日内に残りなく成功せり。露都全市の民衆は、「ケレンスキー政府を倒せ！ 全權力を勞兵委員會に取れ」と叫び、到る處、集會、示威行列、宣傳演説行はれ、革命に關する語は無上の喝采を以て迎へられぬ。レーニン、トロツキー以下、軍事革命委員等は、數日間不眠不休の活動にて、トロツキーの如きは、三日間食事するの暇なく、一時卒倒せりと言はる。

無血革命成る

愈々十一月七日となれば、過激派の新政府設立計劃全く整ひ、武力革命の火光一閃、露都は忽ち修羅場と化せり。此の日革命軍は三隊に分れ、一隊はケレンスキーの本據冬宮を包圍し、一隊は、戦線より歸り來たれる政府側の軍隊を途中に遮斷し、他の一隊は革命軍の本據たるスモリーヌイ會館を準備せり。此の時、軍隊は殆どケレンスキーに離反せる有様にて、政府の頼みとせるは、有産階級の士弟より成る士官候補生の一隊と、女子大隊及び四門の大砲數挺の機關銃あるのみ。然るに、革命軍には、ペテロ・パウロフスクの堅固なる要塞あり。又革命の動力を以て任ずるクロンスタットの水兵あり。此の水兵は軍艦オーロラに乗りてネヴ河を遡航し來り、冬宮を威嚇せしが、其の時ケレンスキーは既に冬宮を脱して何れにか姿を隠し、冬宮内には、コノワロフ議長席に着きて、應急閣議中にして、宮中警衛隊は、宮殿の窓より砲口を外に向けて革命軍を砲撃せり。革命軍之に應砲しつ、徐々冬宮に向ひ、ペテロ・パウロフスク要塞の革命軍も遙かに冬宮目がけて砲撃を開始せり。かくて其夜九時頃、ネヴ河を遡航し來れるオーロラ號の砲撃に依つて冬宮は陥り、大臣次官十六名は捕へられてパウロフスク要塞の監獄に投ぜられぬ。此の日殺氣立てる革命軍は、政府の指揮官、其の軍の指揮官らを斃殺せんと惴りしも、レーニンは亦衛勞働者に向つて、此際無意味の虐殺行爲は、絶対に避けざるべからざる旨を訓令せるにぞ、彈丸に依る僅少の死傷者を出せるのみにて、他に故意に殺害せる犠牲者なかりき。されば、當日は、市

中要路には平日通り電車の運轉さへありて、商店も營業し居れり。かくして十一月七日の過激派革命は、武裝的平和の革命と言はれ、流血、掠奪、暴行など血腥き沙汰なく、いと靜肅に遂行せられたるなりき。

レーニンの新政綱宣言

十一月七日、ペトログラードの街上、革命軍が冬宮を攻圍せる最中、革命の本據たるスモリーヌイ・インスチュード會館の二階には、レーニンを議長として、新政府の組織に關する大會議開かれ、過激派幹部員中、三階室に在りて革命軍の進行を指揮中なりし其の軍事委員以外の幹部連は、皆此の二階に集りて其會議に列せり。先づ新政府の命名問題起り、レーニンは之を「勞農政府」と呼ぶ事を發議せしに、一同之に賛し、次に土地分配と即時講和宣言とに付きての宣言起草となり、從來の大臣を「人民委員」と改め、内閣をば、「人民委員會」と稱する事となり、同夜、引續き全露勞兵委員大會を開き、冬宮攻撃の砲聲を聞きつ、議事を進めしが、社會革命黨の一部は過激派の配下に立つを喜ばずして退場せり。かくて翌八日の晩、再び同大會開かれしが、此時軟

論頻りに起り、社會革命黨との聯立内閣を組織するに非ざれば、民望を收めかたからんとて、議論容易に決せず、レーニンは勵聲大呼して、此の際決して妥協を許さず、吾人の計劃に賛同して來る者は拒まざるも、我れより他に迎合するが如きは事を破るものなりとて頑強に抗議し、「吾人の身方は勞働者と兵士となり。何をか恐れん」と満場を睥睨せり。宛かもよし、其時、社會革命黨より使者來りて、革命軍事委員會に協力する旨回答せり。レーニン、トロツキーの硬論は、之に氣勢を得て、一時間後には、軟論全く征服せられぬ。

此に於て、レーニンは、其の禿頭を電燈に輝かして中央の演壇に進めり。其短軀にして田舎染みたる飾り氣なき姿は、舊式の風雲兒、英雄を偲ばしむるものには非ざるも、其の卒直にして無造作なる態度と、誠意に満てる面差は、共產主義の統帥として、百姓と一兵卒との身方たるに應はしく、何等雄辯を交えざる平易なる言辭は却て會衆を心服せしむるものありき。彼れは、開口一番、「吾等は是れより社會主義制度の建設に向つて進むものなり」と呼ばば拍手喝采場に湧き又一人の異議を唱ふるものなし。依つて、レーニンは其の主義として勞農政府の組織、無賠償無併合の講和即行、資本及び土地の收容、生産監督、秘密條約の公開を説き、更に新政府の政綱に

説き及びて（一）直に交戦各國民に向ひ、公平且つ民主的の平和を提議する事。（二）地主の土地所有權を剝奪して土地を國有となす事。（三）生産業及び生産員の配供に對して、勞働者の監督權を設定する事。（四）銀行に對しては、國民の監督を加へ、且つ之を凡て國有となす事の四項を宣言せり。かくて翌九日の大會に於て、議長カーメネフは、憲法議會の開會迄、勞農政府を組織して、之を人民委員會と名くる旨を宣言し、各部局を擔當する人民委員の姓名を讀み上げた。人民委員會長（即ち首相）レーニン、外務部長トロツキー、内部長リコフ、農務部長ミリューチン、勞働部長シュリヤブニコフ、陸軍部長クリレンコ・ボドイスキー、海軍部長アントノフ・ヂエンコ、商工部長ノーギン、教育部長ルナチャールスキー、財政部長ステパーノフ、司法部長オツボコフ、供給部長オードロキツチ、郵電部長アギーロフ、民族部長スターリン、運輸部長未定。以上の如く新政府發表せられて、人類史上始めての試みたる共產露國の第一歩は踏み出されたり。而して僅半年餘り前迄、瑞西の天井裏に、窮鼠の如く蟄居せる貧弱なる相貌せるレーニンは、今や一躍露國の大權を掌握せる無冠王となれり。

此時既に變裝して露都を脱出せる前總統ケレンスキーは、十一月七日附の命令書を發し、全露

の軍隊指揮官等に對し、祖國の危機に瀕せる今日の場合、各自其の兵力を率ゐて己の義務を盡し其の職に忠實なるべきを要求せり。かくて其十一日に至り、ケレンスキーは軍隊を率ゐてペトログラードに進軍し、國賊レーニンを討ずるの檄を傳へ、一時は過激派の軍を撃破せしも、やがて過激派大軍の反撃に遭ひて大敗し、退いて何處にか身を隠せるまゝ、其の後今日迄其の消息更になし。

第十二章 露國遂に獨逸に屈服す

對獨逸戰條約成る

レーニン既に全露の大權を握りて、勞兵政府を樹立するや、施政第一の問題は、獨逸との講和なりき。此の際露國民衆は戰爭に疲れて、只管平和を希ひければ、レーニンは如何なる條件にて、即時講和を爲すの必要あり。其の如何に屈辱的なるものなりとも、將た如何に過重の條件なりとも、敢て問ふ處に非ず。唯だ一刻も早く平和の聲を聞かん事、國民唯一の願望なりしなり。

故にレーニン政府の平和即行決議は、民衆に取りて暗夜の燈光に等しく、これに依つて、施政第一着に民望を一身に集め得たるなりき。元來レーニンは、過激派内にも一頭地を抜ける傑物にして、萬事專制的態度を以て黨員に臨み、果斷速決、以て事に處するの資あり。又能く群衆心理の機微を察し、巧みに之に投合するの秘訣を會得せるに加へて、其決行力最も強烈にして、一度思ひ立つたる事は猛烈斷行し、之を徹底せしめざれば止まざるの概あり。されば、國人彼れを評して「レーニンは能く磨き成せる石球の如し。其の一たび動くや、急坂を轉落して止まる處を知らざるにも似たり」と。蓋し彼れは民衆心理の上に立てる近世の最も猪突主義の政治家なり。

レーニンは、政權掌握後二十日も経ざる十一月廿六日、愈々其の即時平和實現の第一着として、獨逸軍に對して全戰線に互る休戦を申込み。獨逸軍よりは、翌二十七日之に對して同意の旨回答あり。依つてレーニン政府は、露軍全戰線に向つて即時砲火中止を命じ、又聯合側諸國に對しては、若し此の休戦に同意せざるに於ては、露國は單獨講和を爲すべきを告げたり。越えて十二月二日、露獨兩國の代表委員は、獨逸東部戰線司令部所在地ブレスト・リトウスクに於て休戦條約の交渉に及びしが、此の日露國側の提議は、(一)獨逸はリガ灣、モーン海峽諸島を占領せる其

の軍隊を撤退すべし。(二)獨逸は休戦條約成立後と雖も、其軍隊を英佛戰場へ轉送せざるべし。(三)講和は無併合、無賠償の基礎に行はるべしといふに在りき。獨逸全權委員は、之に對して(一)、(二)は獨逸が戰敗者に非ざるが故に、絶體に容認しがたく、(三)は講和會議に屬する條項なれば、今日休戦條約の範圍外なりと主張し、双方の意見一致せず。結局十日間戰闘停止を約して、一旦交渉を打切れり。但し此間も、兩委員はブレスト・リトウスクの旅館に於て、時々私的會合を開き、頗る懇懇なる談話を交換せりと言はる。果して此の十日間に、獨逸は盛んに其の露境軍隊を西方戰場に移送し、又露國は再び聯合諸國に向つて休戦交渉に同意参加せん事を勸告せり。而も聯合側の回答來らざるや、露國の單獨講和は聯合與國との締約に反せるものに非ずとの口實を作れり、かくて。十二月十一日、戰闘停止満期の日、双方の委員は再び會見して、直ちに休戦條約に調印せり。

勞農政府の革命擴張運動

休戦條約に次いて來たるものは講和條約なり。依つて露獨兩委員は、十二月二十二日、又もブ

レスト・リトウスクに於て、講和會議第一回を開けり。露國側の委員顔觸れは、トロツキー、ヨツフ・カーメネフ等を正員とし、他に兵卒、水兵、労働者、農夫、婦人等も一行に加はれり。獨逸側はホフソマン將軍、キユールマン、チエルニン伯等なり。此時露國委員は、講和の根本條件として、勞兵會の主張せる無併合、無賠償及び民族自決主義と經濟的壓迫政策の排斥とを提議せしが、獨逸側は、己れ、露國に對して、今日戰勝國たる地位に在るもの、此の如き對等條件に耳を假す理由なしと言下に斥けたり。而も此時既に休戰期間終れる爲め、露國は頗る窮境に陥れり。其時露國委員長たるトロツキーは、突然口を開いて曰く、「若し獨逸委員諸君にして、我が要求を承諾せずとならば、予は寧ろ之を獨逸の労働者に訴へ、今日露獨間に平和成らざるは、労働者を埋草となし、其の戰死に依つて勳賞を得たる獨逸の將軍らが、東方戰線の安全地帯に在る自國兵士を、更に西方戰場に移送して、其の塹壕に投ぜん事を企つるが爲めなるの真相を貴國労働者に知らしめんのみ」と。果然彼れは獨逸の軍隊に對する革命煽動を以て、獨逸委員を威嚇せんとせるなり。此の一語功を奏してか、其後間もなく、獨逸委員は露國側の要求を全部承諾する旨の回答ありしかば、露國人民は、此報に接して狂喜し、我等今漸く惡魔の手を脱して平和の女神に

救はれたりと祝福せり。

トロツキーは、其の一語にて獨逸を屈服せしめ得たりと喜びしか、數日後、獨逸委員は、突如十六ヶ條の講和案文を提出し、其第二條に於て、「波蘭、クールランド、リトワニヤの一部、リストランド、エストランドは、今や露國より分離獨立の意志を表示せるが故に、民族自決の主義に則り、同地方の事は、一切露國の干渉を許さず、従つて同地方に在る獨逸軍隊の撤退問題に就いては、露國の容喙すべき限りに非ず」と抗議せり。之が爲めに、露國委員一時啞然たり。抑露國の民族自決主義を提議せるは、之に依て右諸地に對する獨逸の干渉を除かんとするに在りき。然るに、獨逸は、反對に之を利用して露國の勢力を右諸地より驅除する老獪策に出でたるなり。是れトロツキーが獨逸の外交術に翻弄せられたるものにして、彼れが素質の當世政治家たるに適せざるの證明たり。當時ブレスト・リトウスクに在りし米人の一大佐、彼れを評して曰く、「トロツキーは往々にして自己の論議に對する熱情の爲めに、實際上の形勢を忘却せり」と。但し、トロツキーに取りて、今回の講和談判は、獨逸の革命運動を刺戟し、且つ露國勞農委員會の精神を全世界に宣傳すべき好舞臺なりしなり。依つて彼れは獨逸委員に一矢を酬いて曰く、「今日

波蘭以下の諸地は、獨軍の壓迫下に在りて、其の人民自由自決の意志を發表する能はず、故に我が政府は、獨軍悉く右諸地を撤退せる後の同地人民の意志發表を承認せん」と。一方露國勞兵會の機關新聞紙をして、社會主義一流の威嚇を爲さしめて曰く、「獨逸政府にして、我が露國の要求を容れざるに於ては、我は直ちに獨逸の兵士と勞働者に對して平和を結ばんのみ。我れには國內社會主義民衆の後援あると共に、又獨逸の社會主義人民の共鳴あり。獨逸の官僚者、希くば、露國官僚破滅の轍を踏むなからんを」と。次いで千九百十八年二月に入るや、露國過激派は、全世界に向つて社會主義革命を擴張せんとする宣傳運動を起して曰く、「吾人は世界的社會改革の烽火を擧げたり。乞ふ全世界の勞農階級人士よ、吾人の例に倣ひ、吾人と力を協せて、各自其の國の官僚を打破せよ」と。思ふに、社會革命は、一國のみにては永續を期しがたく、やがては資産階級の支配下に在る他列國の爲めに征服せらるゝ虞れあるが故に、列國同時に革命を行ふに於て、始めて其成功を期すべしとは、社會主義者の期する處なり。レーニン政府が、先づ隣國獨逸の人民に、社會革命を煽動するの端を茲に發せるなり。

トロツキーの脱線宣言

獨逸にては、露國政府が、かかる危険なる宣傳を行ふを見て、急に事を決せんものと、二月八日、露國委員に嚴談して曰く、「貴國果して講和を欲せば、直ちに我條件に聽從せよ。主義の論議を止めて、疾く實際問題に入れ」と。露國は最早猶豫しがたき窮境に立到れり。さりとて獨逸の提議に従はんか、其の革命の意義を没却し、自黨の主義を根本より破壊する事となるが故に、講和全權トロツキーは、此時、世にも不思議なる宣言を爲して曰く、「我が露國勞農政府全權講和委員は、如何なる事情ありとも、革命の理想を放棄するものに非ず、故に吾人は併合主義の條約に調印する能はず。同時に露國民は獨逸人民と戰ふ事を好まず。依つて我が軍隊をば解散し、敵正面の防備を撤して、之を獨逸の勞働者に托せん。平和條約は、各國民が帝國主義者の束縛を脱れたる時、始めて署名せらるべし」と。トロツキーは之を獨逸委員の面前に高聲に讀み上げて、何の返答も待たずに引去れり。獨逸委員も之には啞然たる外なかりしといふ。「講和調印は之を拒絶し、同時に戰爭もいやなり、戦線を敵の勞働者に托す」といふに至つて、其の亂暴さ加

減、前古未曾有の談判なり。此の大膽無謀なる宣傳は、獨逸労働者を刺戟せる事甚大にして、十月後に起れる獨逸の革命は、此のトロツキーの放膽なる態度に負ふ處も少からざりしならん。されど當面の事實問題として、斯くの如きは無謀の誇りを免れず、レーニンも之には苦笑して、「トロツキーは革命の名に酔ひて、實際を忘却せり」と評せりといふ。トロツキーは、此の矛盾せる宣言に付き、辯解して曰く、「此の如き對策は、歴史上に先例なく、又國際上にも類例なきが如くなれども、世界の歴史は未だ社會主義の實現を見たる事なきに非ずや。吾人は革命更始の際、何事にも先例を作らんのみ。予が此の政策は、各國の政府を経由せずして、直ちに各國人民相互の間に直接平和を結ぶの妙計なり。彼れ獨逸政府、之に對して何をか爲し得べき。彼等にして、若し防禦なき我國に侵入せんか、是れ掠奪を目的とする暴力の發揮にして、獨逸の人民は、かゝる暴擧の爲めに、今後も戦争の慘禍を蒙る事を欲せざるべし。即ち獨逸軍は、前に敵なしとするも、却つて其背後に自國労働者を敵とする事となり、内部より倒壊するに至らん」と。

レーニン政府の屈辱的講和

露國政府は、トロツキーの戦争休止宣言と共に、直ちに其軍隊全部を解散するの命を發し、着國境の兵を引揚げたるにぞ、かくと見たる獨逸にては、好機乘ずべしとなし、二月十八日、其軍を進めて、會釋もなく露國領内へと侵入せり。此時露軍は、昨年の革命以來、兵數甚だしく減じたる處へ、今又新たに軍隊解散着手の結果、各中隊僅かに十數名に過ぎず、而も皆戰線を去つて後方に在り。之を率ゐる將校とてなれば、倉皇退却するに當り、橋梁鐵道を破壊する術も知らず、凡て之を獨逸の手に委せり。されば、獨逸軍は、何の抵抗も受けず、僅か三四日の進軍を以て、露軍が三年間に互りて堅固に防禦工事を施せるドキナ河畔の陣地を略し、更に其後方に在りたる大砲、彈藥其の他の軍需貯蓄一切を獲得し、最後迄居残れる露軍を壊亂せしめて、決定的勝利を得たり。此の間、露國政府にては、和戰兩種の議論起り、トロツキーは主戰説を唱へて多數の身方を得たるに對し、レーニンは即時無條件に獨逸と講和せん事を唱へ、一時孤立の姿となれり。此の時主戰派の一人、會議の席上、レーニンを睨まへて、「今此處に五百人の勇士あらば、卿を牢獄に投ぜんものを」と言へるに對して、レーニンは冷然として、「眞に將來の形勢を洞察せんには、予が牢獄に赴く代りに、卿こそは投獄せらるべけれ。今日の勢ひ、卿等如何に勇氣

を振ふとも、戦争を繼續する事不可能なり。今後戦争を行ふ者は、我が農民のみ。然るに、我が農民は既に戦争不賛成の決議を爲せるに非ずや」と。其の人之に對して、更に「農民が不賛成の決議を爲せる事、予未だ之を聞かず、乞ふ其の故を聞かん」と。レーニン言下に答へて曰く、「見よ、農民等は手を以てせず、足を以て決議せり。彼等は足を以て戦線より凡て脱走せるに非ずや」と。かくてドキンスク要塞陥落の日、人民委員閣議に於て、トロツキーの防戦説とレーニンの無條件和約説とに付き、票決の結果、レーニン説多數となり、次いで開かれたる全露勞農大會に於ても、レーニン説勝利を占め、三月三日露國政府は、全然獨逸の條件を容れて和約に調印し、翌四日には都をモスクワに遷せり。勿論此の條約は甚だしく屈辱的なるものにして、全然獨逸の帝國主義に蹂躪せられたるものなり。さればレーニンとても、其の不名譽なる點に付きては、トロツキーに劣らず憤悶せるなれども、如何にせん、此の場合、之を忍ばざるに於ては、獨逸の爲めに一層打撃を蒙りて、折角彼等が成就せる革命露西亞其物も撲滅せらるゝの虞ありしなり。而もレーニンは此の不名譽なる條約も、來るべき獨逸の社會革命に依りて、十分償はるべきものなるを思へり。即ち彼等は、一年内には、獨逸にも、露國同様の革命起りて、其の軍閥と

帝國主義とは、根柢より覆され、其の國民は、露國人民と眞の握手を爲すに至るべきを信じたるなり。

第九篇 米國の參戰と戰爭終決

第一章 開戰當初に於ける米國の地位

米人、戰局發展を注視す

初め、歐洲に戰爭勃發せりと聞ける時、米國人は、己れ直ちに戰爭の渦中に投じたる思ひせるなりき。そは、米國は新大陸の事とて、其の人民は歐洲より移住せる者の子孫若しくは新たに移住せる者、大部を占め、其處に血族的、將た民族的結合の深きものありたればなり。斯く雜駁なる人種を含める米國の事なるが故に、獨逸系の人民と英佛系の人民とは、其の交情多少疎隔する處ありしが如く、今や歐洲に於て、兩系の大戦開かれたりと聞いては、一層面白からぬ關係を生ぜしならん。更に之を歴史上より見れば、往年米國獨立戰爭の際、佛國人は自由の大義を標榜して、米國を援けたる關係あれば、米國民亦た其の舊誼に酬ゆる處あらんとせしも、人情の自然

とや言はん。米人は又、平素より平和の民を以て任じ、獨逸の軍國主義を呪へる者なるに、今や獨逸が白耳義の中立を侵害して佛國に攻め入り、白耳義に於て、兇暴野蠻なる行動甚だしと聞きては、是を座視すべきにあらずと義憤を發するも無理ならず。而も、米國の人民一億一千万の二割は、獨逸系の人民なれば、彼等は祖國の勝利を祈り、日頃英人を憎める心情より、同じ米國人中の英國系に屬する者に對して、甚だしき反感を表明せり。さりながら、米國政府としては、此の際中立を嚴守するの方針にて、此の中立國民としての權利を飽迄擁護せざるべからざると同時に、他列國より米國に向つて軍需品其他一切の物資を求むべきは自然の數なるが故に、此戰爭が米國に莫大なる物資的利益を與ふるの機會を造るものたり。此の一點のみにても、米人の歐洲戰爭に對する注意は、極度に達せるなりき。

獨逸系米人の賛獨運動

更に之を歐洲交戰國側より見る時は、米國の同情援助を得る事、測り知るべからざるの大利なり。されば、獨逸は、最初より此の點に着目し、有らゆる手段を盡くして、米國の同情を求むる

に力めたり。即ち獨逸政府は、開戦後間もなく、其の殖民大臣ベルンハード・デルンブルヒを米國に派して、駐米獨逸大使フォン・ベルンストルフと共に米國內に獨逸同情熱を煽るの計畫をなせり。在米獨逸系人民は、之と呼應して、其の宣傳運動を助けたるは勿論にして、彼等は先づ紐育に印刷所を設けて、週刊雜誌「祖國」を發行し、獨逸を擁護せしが、次いで、米國の諸大學に教授たる獨逸系米人と、嘗て獨逸に留學せる人士等は、心を合せて盛んに贊獨運動を行へり。之が爲め、彼等の中には、戰爭中に官職を削がれたる者多く、又は戦後に其の事實暴露して、戒飾せられたるも少からず、而して從來米國に於て發行せられたる獨逸系諸新聞の、此際極力贊獨宣傳に力めたるは言ふ迄もなし。されば、我が日本國が、大正四年八月十六日獨逸に最後通牒を送れる時、獨逸政府は、米國の獨逸系人民よる成る「獨逸系米人民同盟」と稱する有力團體の理事、ドクトル・ヘクザメルに打電して、大統領ウィルソンに告げしむるやう、「日本は先づ獨逸租借地膠洲灣を攻略せんも、其の野心は更に手を伸ばして、サモアを取り、次には布哇に及ばん。今日布哇には、日本人十萬あれば、彼等は之を略取する事易々たらん。さて次に日本の威力の及ぶ處は、米國本土に非ずして何ぞ」と、當時獨逸に發せる日本の通牒には、八月二十三日を回答期日としたれば、獨逸にては、其の間に米國政府を動かして、日本に干渉せしめ、其の最後通牒を取消さしめんと圖れるなりき。然るに、八月十八日、米國大統領ウィルソンは、國民に警告して曰く、「我が米國政府は、飽迄中立を嚴守すべく、國民各自も、此の意を體して言語、行動共に中立的なるべし」と、是れウィルソンが、ヘクザメルの提議に對して、暗に其の中立無干渉主義を表明するの意に出でたるものと知らる。

獨逸系米人のみならず、在米愛爾蘭人も、古來、英國人を嫉視せる者なるが故に、却つて獨逸人に同情し、彼等はフィラデルフィヤ市に會合して決議して曰く「吾人は、全力、以て共同の敵たる英國人を破り、獨逸の國民的福祉と愛爾蘭の國民的存在とを確保せざるべからず」と。歐洲各國民を網羅せる新開地米國の事なれば、一旦世界的變動あるに際して、其國內人民の各自各様なる言動、實に混亂を極むる事怪むに足らず。之を統一して國家を維持する米國政府の苦心亦察すべし。

米獨間の交渉

國內異分子の言動斯くの如くなるに加へて、外よりは、交戦列國亦た種々苦情を米國政府に申込むあり。獨逸よりは、「佛軍は白耳義に於て、往年ヘーグの平和會議に於て、使用禁止のダムダム彈を使用せり」と訴へ、「米國政府は、疾く干渉して、佛國の不法行動を制裁せられたし」と請求すれば、佛國亦た獨逸軍の暴行を米政府に訴へ、「白耳義次いで獨軍の中立侵害を哀訴せり。是等の事、米國の干渉に依つて敵國を制裁するの難きを、萬々承知なれども、唯だ斯くして、自國に對する米國の同情を惹かんが爲めの術策と知られぬ。既にして歐洲の交戦諸國は、競うて米國に軍需品及び食料の注文を發せり。従つて米國にては、多くの工場は、其の本業を中止して、軍需品製造に忙殺せらるゝに至れり。但し、是等軍需品も、海上權を占むる英佛側にのみ供給せらるるが故に、獨逸側にては、之を不服とし、斯くの如き米國政府の行動は、中立違反なりと非難せり。然るに、米國政府は、之に答へて、中立國民が軍需品の輸出に依つて利益を得るは、國際法に戻る事なしとて、益々之が製造輸出を行へり。此に於て、獨逸は、英國の周圍海上を全く封鎖し、中立國の商船にても、其の封鎖海上を航行する者は、危険を覺悟せられよと宣言するに及んで、米獨の間頗る面倒なる交渉を醸せり。是れ一に獨逸が、新武器潜水艇を使用して敵商船の無

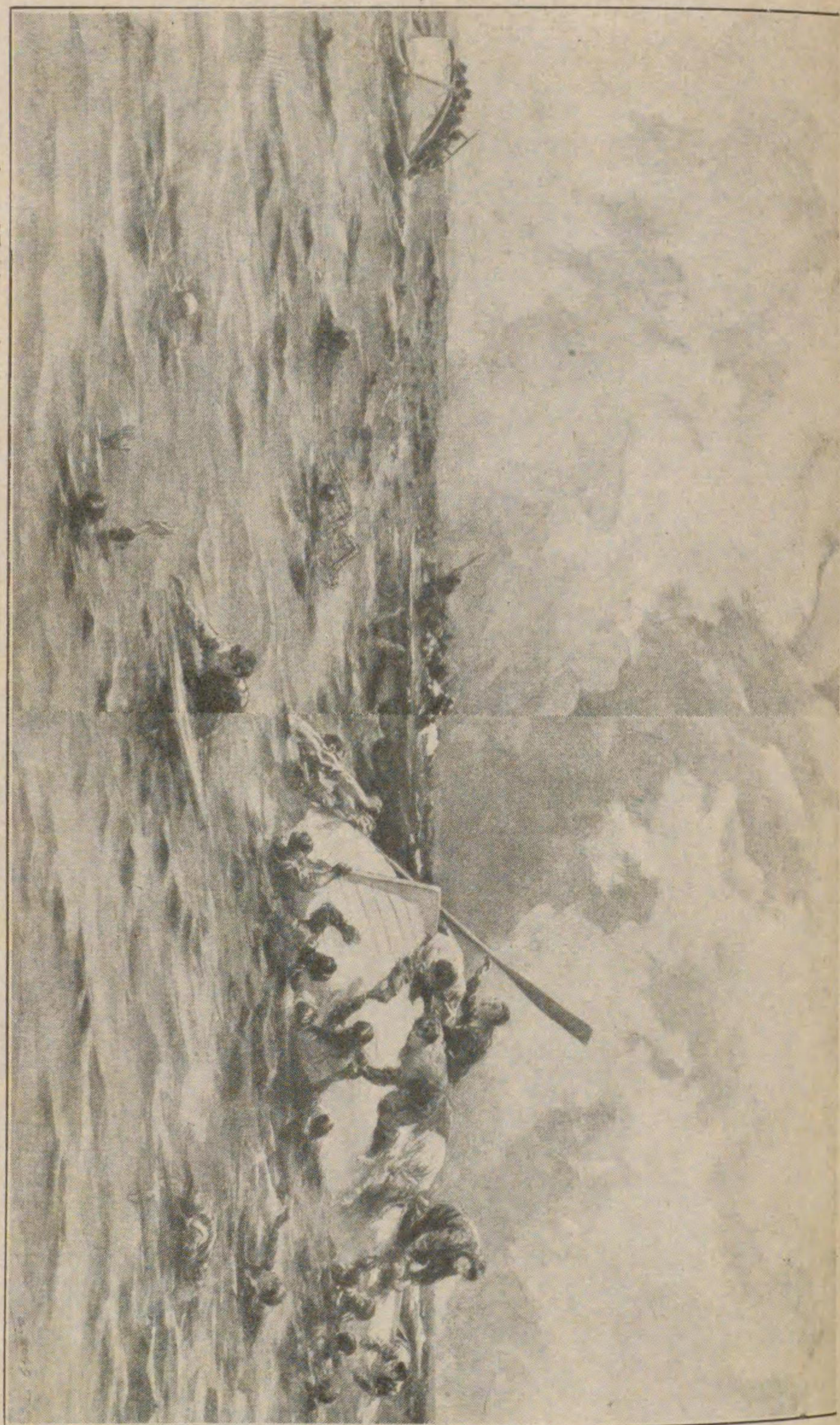
警告撃沈を行へるが爲にして、國際法には、潜水艇の條項なきを奇貨とし、獨逸は、此の海底の武器を濫用せるなりき。恰も此折りルシタニヤ號撃沈の凶事起りて、米獨間の關係も甚だしく惡化せり。

初め、戰爭勃發後十ヶ月、即ち千九百十五年、(大正四年)五月一日、米國の諸新聞に、獨逸帝國大使館の署名を以て、一廣告文を掲載して曰く、「太平洋を航海する旅客に警告す。今や我が獨逸國と英國側との交戦區域は、ブリテン諸島に近接する諸海面を包括す。故に、曩に獨逸政府が發せる正式告示に依り、同海面に於ては、英國の國旗を掲揚せる船舶は、獨逸海軍の爲めに撃沈せらるゝ事あるべし。故に英國船舶に乗りて、同海面を航海する者は、豫め自らの危険を覺悟せらるべし」と。

第二章 ルシタニヤ號撃沈

獨逸潜水艇の兇行

獨逸が、右の如き氣味悪き新聞廣告を出したる後四日、即ち、千九百十五年五月七日午後二時、英國キユナード會社所屬の巨艦、三萬三百噸のルシタニヤ號は、愛爾蘭のキンセール港近くを航行中、獨逸の潜水艇は、何等の警告も與へずして、突然魚形水雷を發射せしかば、流石善美を盡せる一大浮城も、僅か三十分間にして、あはれ海底に沈没せり。ルシタニヤ號の乗組人員は、旅客船員合せて千九百十八人中、千二百五十人溺死し、其の米人乗込百八十八名の中、百十四人の溺死者を生じ、婦人小兒さへ數多含めり。從來英國船の獨逸潜水艇の撃沈に遭へる事數度にして、其都度乗組米人の死亡者を出せしも、今回の如き多數の溺死者を出せるの例なかりき。殊に婦人小兒迄も哀れ海底の藻屑となれる事米國人心を激動せしめ、其の新聞紙の多くは、「斯かる野蠻なる行動を爲す國民は、人道の敵にして、俱に天を戴かざるの仇敵なり。直に國交を斷ちて宣戰を布告すべし」と敦圉けり。是に對して、米國人口の割を有する獨逸系米人は、其の所有に係る幾多の新聞紙に依つて、ルシタニヤ號撃沈を辯護して曰く、「戰時敵國の船舶を撃沈するは當然にして、米國人の塔乗者あるが故に、之を遠慮すべきの理由なし」と、いと輕々に論ずるがあり。又は一層詳しく理由を述べて、「ルシタニヤ號には戰時禁制品たる軍要物品を積載せる以



流石善美を美善石流に沈没せしむるに

上、是れ一個の軍艦と看做すべきものなり。之を撃沈する事、何等不法行動に非ず。現に撃沈の際、船中多量の窒息瓦斯發生せるは、爆發藥を積める證據なり。普通水雷の破裂より生ずる煙には、此の如き窒息的性質を含まざるものなり。要するに、かかる武器彈藥を積める危険なる船に、婦人小兒迄乗するは甚だしく不當にして、是れ米國人自ら犯せる罪なり。今日戰時禁制品を載せざる中立國の船舶多々あるに、何ぞ好んで、ルシタニヤ號に乗るの危険を冒すの要あらんや」と米人を難するあり。更に又「獨逸大使館にては、五月一日、ルシタニヤ號出帆の日、諸新聞に航海の危険を警告せる廣告を掲載したるに非ずや、然るに之を顧みずして、ルシタニヤ號に乗れるは、米國人自ら好んで一身の安全を犠牲にせるものなり」と、米人の不注意を攻撃せるありて、前日の廣告が、獨逸側の深意に出でたる事明白となれり。

此際獨逸にては、米國に廣く探偵を放つて、五月一日ルシタニヤ出帆の事を知り、其の海上通路の日取りを調査し、依つて其の米國人の乗員の有無を問はず、必ず之を撃沈すべき計畫を立てたるなり。されば當時米國に在りし獨の前殖民大臣デルンブルヒは、諸新聞の辯護説以外、別に辯明書を發して曰く、「凡そ戰時に在りて、敵國船舶を臨檢し、禁制品搭載の場合には、之を自

國の港灣に曳く事國際法上の慣例なるも、之を曳く事能はざる場合には、直ちに撃沈するの例なり。但し、其際には、非戦闘員たる一般船客の生命を救助するものたり。然るに、今回ルシタニヤ號の場合、獨逸は潜水艇を以て巨大なる敵船に對し、到庭從來の例に倣ふ事能はず。止むなく無警告撃沈を試みたるものにして、之を咎むるは當らず、今日安全なる中立國船舶多々あるに、好んで危険なる敵國船に乗るは、自殺を圖れるに等し。若し米國人塔乗せるの故を以て、軍需品を積める敵國の船舶をも撃沈する事能はずとせば、英國の船舶は、米國人を塔乗せしむる事に依つて常に安全なるを得ん。而も斯かる順序に依つて、軍需品が聯合側へ輸入せらるるが如きは、獨逸の斷じて黙止しがたき處なり」と。

米國獨逸に抗議す

右の如き幾多の辯護説に接して、米國の輿論は益々激昂せり。されど此時に至る迄、米國の上院下院共に穩和説優勢にして、獨逸に對する抗議も至つて緩慢なりしかば、民間諸新聞紙は、一齊に議會の軟弱を攻撃せり。されば、大統領ウィルソンは、此時に至るも獨逸を敵として戰爭を

開始するの念更になく、「我が米國は、自國の正しき事を他國に承服せしめんが爲めに、武力を使用するを要せざる程正しき國家なり」との宣言を發せり。其の意は、飽迄道理ある聲明を爲して、獨逸をして正義の下に屈伏せしめんとするものなり。従つて、一面には獨逸政府に向つて強硬なる抗議を發し、「米國は、自個の神聖なる權利と義務とを遂行するに躊躇せざるべきを豫期せられたし」との旨を申送れり。米國民は、此の抗議を至當なるものとなせしも、此の如き辭句は、親睦を意味するに非ずして、一國の威容を示せるものなれば、獨逸との關係は、次第に悪化せん傾向ありて、獨逸系米人のみならず、純米人の間にも、此際戰爭惹起の誘因となるべき行爲は凡て慎まざるべからずとし、依つて今後聯合側に軍需品を米國より賣り込む事も見合するが好からんと論ずる者多くなれり。同時に獨逸系新聞紙は、米人の激昂を危み、之を緩和せんが爲めに、其の所謂黃禍を唱へて曰く、「米國が、此際獨逸と開戦する事もあらんには、由々しき結果を齎らすべし。何となれば米獨開戦の曉には、日本國必ず米國の背後を窺ふべし。今日日米の關係圓滿ならざる事は、米人も廣く承知の筈なり。日本にして、背後より起つてフィリッピンを奪はば如何？」と。斯くして、彼等は、米國の對獨惡感を、他の警戒に轉せんと試みたり。

獨逸側の暴論

以上は、千九百十五年、即ち我が大正四年五月の米國國狀なりしが、五月の末、歐洲に於て、久しく形勢觀望の體なりし伊太利が、埃地利に對して宣戰するに至り、獨逸は、南方に又一敵國を生じて、國歩一層の艱難を加へぬ。されば、獨逸系米人の間には、此際米國が、萬一獨逸に對して宣戰を布告せん事を恐れ、米國の參戰を喰ひ止めんが爲めに、全力の運動を起せり。依つて、先づ紐育に在りし平和の友の會が主唱にて、平和大會を開き、全米に平和宣傳を試みしに、多大の賛同を得て、武器輸入に反對の諸團體亦之に加入し、一般米人間には、參戰の傾向甚だ薄きを證明せり。然るに、何事ぞ、獨逸本國にては、此の頃ルシタニヤ號擊沈は、其海軍の大成功として歡迎せられ、ベルリンを首め、其他の諸市皆國旗を掲げて戰勝を祝し、諸學校は臨時休業して祝意を表し、之が記念のメダルさへ製作せられて、其表面には大なる船の沈没する光景を彫刻し、裏面には禁制品なしとの文字を表はせり。是れ獨逸が、同船には戰時禁制品を積めりと主張せるに對して、米國は禁制品なしと抗議せるが故に、獨逸人は反語を以て之を揶揄せるなり。

りき。尙ほ、ルシタニヤを擊沈せる獨逸潜水艦長マクスウァレンチナー大尉は、功を以て鐵十字一等章を授けられしが、次で千九百十六年八月、獨帝は彼れに、ホーヘンツォルレルン勳章と佩劍を下賜せり。

獨逸にては、英國の大商船を擊沈せる事を無上の手柄となして、中立國たる米國の婦人小兒等を溺死せしめたる大慘事をば、念頭にも置かず、自業自得なりとして、絶えて弔意を表する事もせざりしなり。但し獨逸政府にては、決して米國を敵となして開戰するが如きを好まざるが故に、七月八日始めて公式にルシタニヤ號事件に關する回答文を米國に送れり。其要旨は従前獨逸系諸新聞の辯明と略ぼ同様にして、末段には、「今後米國は、中立國船舶に米國の國旗を掲げて、米國の旅客を乗するを可とすべく、敵國の船に塔乗する事なからしめんを望む。獨逸政府は、今後とも、米國人乗船の故を以て、敵國の船舶を默過しがたし」と。

米國獨逸に鐵槌を擬す

米國政府は、此の回答に對して決して満足するものにあらず、飽迄其の不服を鳴らして交渉を

繼續しつゝある中、八月十九日に至り、英國ホワイト・スター大汽船會社のアラビック號、又も獨逸潜水艇の爲めに撃沈せられて、乗組米人二名溺死せり。之が爲めに米人の激昂一層甚だしく早くも國交斷絶の叫び隨所に起れり。而してルシタニヤ號問題も容易に解決せず、事態重大と見えければ、八月二十六日、駐米獨逸大使フォン・ベルンスドルフは米國務卿ランシングを訪問して商議し、依つて、九月一日、一通の覺書を作成して、米國政府に送り。其要旨は、「敵國商船にして逃走若しくは抵抗を爲さざる限り、獨逸海軍は之を無警告且つ非戦闘員救助なしには撃沈せざるべし」といふに在り。之に對して、米國の諸新聞は、頗る満足の意を表し、紐育タイムスの如きは、「是れ外交上の勝利にして且つ道理と權利と人道と正義との勝利なり」と誇れり。然れども、其實此の覺書は、文字通りに實行せらるべきものに非ずして獨逸政府が一時の權宜上、米國に與へたる氣休めに過ぎざりき。蓋し此の頃英國海軍の獨逸潜水艇對抗策大いに成功し、既に其の四十四隻を捕獲し、二十六隻を撃沈せるが爲め、獨逸にては、潜水艇の建造間に合はず、一時海底活動を減ずるの必要あり。依つて之を機として米國との外交危機を避くる爲めに、此の如き氣休めの覺書を發せるなりき。

かくて、九月以後、當分の間、米人の危害を蒙る事なかりしが、十一月七日に至り、伊太利の一汽船紐育航行の途中、埃國の國旗を掲げたる潜水艇に撃沈せられて、乗組米人九名溺水せる事あり。更に、翌千九百十六年一月二日、地中海の東部に於て、米國の一領事が乗り込める汽船波斯號撃沈せられて、同領事は溺死せり。されば、英佛聯合國側にては獨逸は不信の國にして、「彼れ必要の前には法律を認めず、條約の如きは一片の反古紙と同視する野蠻國なり」と憤慨せしが、三月二十四日、英佛海峡の旅客運送船サセックス號、又潜水艇の攻撃を受け、乗組の米人若干溺死せり。此の船は旅客用にして、軍需品を積載せざる事明白なりければ、米國にては國論沸騰し、大統領も、之に動かされて十分強硬なる抗議を獨逸政府に發せり。其は千九百十六年四月十日の日附にして、其の末段には、「獨逸政府が、今後も依然潜水艇を使用して、他國商船を無差別に攻撃するの戦法を繼續するに於ては、我が米國政府の採るべき途唯だ一あるのみ。獨逸政府にして、旅客船及貨物船に對する現在の潜水艇戦を廢止する事を直ちに實行するに非ずんば、我が米國政府は、獨逸帝國に對し國交斷絶の外なかるべし」と記せり。是れ米國が獨逸に對して鐵槌を擬せるものにして、當時大統領ウィルソンは、止むなくば獨逸と開戦するを辭せざるの大覺

悟なりしものと見らる。但し、米國が實際獨逸に宣戦せしは、それより約一年後の事なり。此抗議に對して、聯合側、殊に英佛兩國は絶大の賛辭を呈し、之を機として米國を身方に參戦せしめんと圖るに至れり。而も米國內に於ては、之が讚否の論相半ばし、獨逸系の新聞はウィルソン大統領の言は、戰爭に依つて利を圖る商人の爲めに致されたるものにして、一般多數の米人は決して國交斷絶を希はずと宣傳し、又非戰論者は、ウィルソンは唯だ爆藥製造業者等の利益を代表せるに過ぎずと攻撃せり。而して、五月四日、獨逸の外相フォン・ヤゴが、米國に致せる回答には、獨逸の潜水艇戦のみを咎むるの不公平を説き、米國政府は、其の標榜する人道主義を聯合國側にも十分強要せられたし。若し米國にして、凡ての交戰國民をして、人道の規則を守らしむるの力なき場合には、獨逸とても、止むなく自由行動を執るに至るべしと結べり、此の回答は、顧みて他を言ひ、敵の利益を奪つて之に反擊を加へたるものにして、ウィルソンの抗議は、何等確定せる効果を見ざりしなり。

第三章 獨逸の米國に對する陰謀

ウエルタ事件

這次大戰の勝敗は、米國の參戰に依つて決せられたるものにして、獨逸が開戰當初より米國に對して行へる諸種の計略は、何れも巧妙を極め、中にも、其の米國人を攪亂し牽制せんとする陰謀に至つては、歐洲戦場の活劇にも増して興味を惹くものあり。而して此の陰謀は、米獨關係の悪化の火焰に、油を注げるものといふべく、前述せる獨逸潜水艇の無警告撃沈行動を別にして、尙ほ、米國の對獨宣戰理由を此の陰謀指摘に置くに十分なりならん。而して斯かる陰謀は獨逸系米人の愛國的精神より出でたる私的行動と目せらるゝも、其實、駐米獨逸大使、領事、其他獨逸官憲の、陰に之を使嗾操縱せるものなる事争ふべからず。尙ほ其の背後にはベルリン政府の指令ありて、獨逸本國政府が、是等陰謀に使用せし費用莫大なりしと言はる。以下其が實例二三を述べん。

往年墨西哥大統領の地位を争ひて、内亂を起させるウエルタは、陰謀失敗の後、本國を脱して歐洲に亡命中なりしが、千九百十五年に至り、米國に歸りて、其の東海岸のロング島に假寓を構へぬ。然るに、此年サンフランシスコにパナマ運河開通記念博覽會開設せられしかば、ウエルタは之を見物せんとて、ロング島を出て、道を紐育に取り、更に西下せり。今紐育よりサンフランシスコに赴くには北方線最も近きに、ウエルタは最も遠き南方線を取り、途中、エルパソに近き所、墨西哥のニューマンと呼ぶ一小驛に下車せり。其處には豫め用意せられたる自動車ありて、直ちにウエルタを乗せ、國境を越えて墨西哥に入らんとせる處を、忽ち米國警察の手に取押へられたり。それを何故といふに、初め、米國のプロギデンス・ジャーナル新聞社にては、歐洲大戰以來、其牒報部は、大活動を爲して各方面に亙り、偵察に力め、此場合にもウエルタの行動監視を怠らざりしが、其のサンフランシスコの博覽會見物といふは偽りにて、實は墨西哥に入りて革命を起し、墨西哥軍を米國に侵入せしめん計畫なるを探知し、之を米國政府に密告せり。其結果、ウエルタは所志を果さず、敢なく逮捕せられしなりき。然るにウエルタの陰謀は、其の實獨逸政府の使節に出でたるものなる事も、同新聞社の調査に依つて判明せり。即ち獨逸政府は、其

の潜水艇攻撃の爲め、米國の人心甚だしく激昂せるを見て、之を他に轉ぜんが爲め、墨西哥に革命を起さしめて米國の人心を一時其の方面に轉ぜしめん計畫なりき。果して米墨間開戦ともならば、米國政府は、此の方面に軍需品を要するが故に、聯合國側に之を輸出する事も自然停止せらるべしとて、さてこそ獨逸は斯かる陰謀を企てたるなりき。尙ほ之に附帶せる獨逸の計略は、墨西哥の東海岸タンピコ附近の石油に關せり。同地方は有名なる石油産地にして、英國も多く石油の供給を此の地に仰げり。されば戰前獨逸人も。此地の石油に着目し、自國の資金を投じて石油坑を經營せしが、戰爭開始以來は、獨逸にて此の石油を得られず、獨り英國のみ之を輸入せり。依つて獨逸は墨西哥に内亂を起させ、此の石油の英國輸入を防止せんと計れるなり。されど此の陰謀發覺し、且ウエルタは、其の後間もなく死去せしかば、獨逸の計畫は全然失敗に歸せり。

獨探の發覺頻々なり

又同年七月三十一日、獨逸米國大使館會計顧問ドクトル・アルバートは紐育にて自己の携帶鞆を高架鐵道の車中に遺失せしが、其の中に獨逸官憲の祕密行動に關する書類數多發見せられて、

米國官憲の手に入れり。其の書類には、米國に在る獨逸大使館が獨探に供給せる金銭の明細なる受取書、其他種々ありて、獨逸大使館の不都合なる行動逐一知られ、其の書類には同大使フォン・ベルンズドルフの名あり。又靴の持主アルバートの名あり。又大使館附武官陸軍大尉フォン・パーベンの名あり。ベルリンの獨逸銀行代表者フリーゴシミットの書類もあり。之を判ずるに、獨逸政府は、獨逸銀行を通じて金銭の支拂を大使館に命じ、大使館には、アルバート會計顧問ありて、各方面に機密費を撒布せる事明白となれり。即ち、此の會議にて、獨逸は第一に米國の新聞を買収し、講演者を買収し、又自國に有利なる活動映畫を作り、又米國人相互の離間を圖り、又ベツレヘムに在る米國有数の大製鋼所に同盟罷工を起さん事を圖れるなりき。其の結果として、大正四年七月より十月に至る四ヶ月間に、米國軍需品工場の上に、同盟罷工百二件の多きに及べり。其の頃、一米人ジョセフ・ゴリカーなる者、獨逸系米人の陰謀に關して、米國政府に密告せしが、其の報告には、米國政府もいたく狼狽せりと傳ふ。右ゴリカーは長年獨逸地利の領事館に勤めたる男にして、戰爭開始の千九百十四年末に、同領事館を辭せる經歷ありて、獨逸側の事情に精通せり。彼れが爲せる密告に依れば、米國に於ける獨逸の探偵網は、蜘蛛の巣の如く、何れも獨逸大使

使と獨逸總領事との指揮を受けて活動せるなり。而して米國に在る獨逸領事館は、武器製造所の破壊及び同盟罷工煽動の策源地たり。戰爭開始以來、斯かる陰謀の爲に獨逸兩國が使用せる金額四千萬弗に及べりといふ。此事新聞紙上に於て發表せられしに、彼のプログデンス紙は之に同じ、依つて自社に於て探知せる、右の證據となるべき書類を發表して、ゴリカーの警告決して獨逸を誣ふるものにあらずと論ぜり。

事實かくの如き獨逸の陰謀は、米國に於て着々奏功せり。即ち、此年の十一月十日、ベツレヘム製鋼所の機械製作所に火災起り、其の損害二百萬弗に及び、爲めに其の職工解雇二百名に達し、武器製造力いたく減殺せられたり。之と同じ日に、エヂントンのボルドキン機關車製造所も火災を起し、其翌日には、トレントンの一大鐵條製造所の倉庫も焼失せり。何れも怪火にて、軍需品に關したるものなるが故に、米國政府にても、是は容易ならぬ變事なりとて極力調査の結果、此火災には獨逸大使館附のフォンパーベン及び同大使館海軍武官ボーイェド大佐が關係して、大活動を成せる事證據明白となれり。米國政府は、直ちに獨逸大使に向つて右兩人の退去を迫り、獨逸大使も辭窮して之を諾せり。尙ほ、駐米獨逸大使ドクトル・ドムバも此陰謀の使喚者たる

事確證舉り、米國政府は千九百十五年九月八日、墺國政府に其大使召喚を請求せり。之が爲め、同大使米國を去れり。

又獨逸大使館附のフォン・パーペンは、其十二月二十二日、紐育を出帆する事となりしが、彼は紐育の墺國總領事館へ來りて行李の荷造りを爲せり。此際、プロギデンス新聞社にては、豫て同領事館へ、一人の妙齡なる女探偵をタイピストとして住込ませ、内部の事情を探らせ居たる際とて、其處にパーペンの必要なる書類を收めたる一個の箱あるを發見せり。此の女探偵は、胸に一物あれば、素知らぬ體にて其箱に腰かけ、晝食のサンドキッチを取りぬ。其處へパーペンふと來合せて、性來の好色漢忽ち女の美貌に釣られ、つと寄り添ひざま、同じ其箱に腰をかけ、予にもサンドキッチの一片を分たれよといふ。女は快諾して分ち與へ、共に食事する中、パーペングが、それこれと女の心を惹く話を向けしかば、女は頻りに秋波を送りて情あるが如く粧ひ、頭髮に挿せる赤鉛筆を抜き取りて、箱の上へ縫れ合へる二ツのハート形を書けり。パーペンは之を見て、女の手より赤鉛筆を奪ふが如くに取リ、兩ハートを貫ける一矢を書き、情緒纏綿の思ひを通はせ、兩人相顧みて棄てがたき色に見えぬ。パーペンは一時の出來心に、ひしと女の手を

握りて別れしが、女タイピストは、脱兎の如く領事館を飛び出して、新聞社に右の報告を爲せしにぞ、此の事直ちに米國政府の知る處となり、赤きハート形の標ある箱を乗せたる汽船オスカー二世號が、英國ファーマス港に着くや、英政府は其の箱を差押へて、之を改めしに、種々の陰謀に關する證據物現はれたり。

イーゲルの金庫問題

是等の書類其他の證據にて發覺せる獨逸側の陰謀は、各方面に亙りて残りなく計劃されたるものにして、或ひは米國より軍需品を聯合側へ輸出する船舶には、爆發藥を仕かけ、其船が太平洋へ乗出せる頃、爆發する様仕組めるあり。又米國の議員を買収して、獨逸側の走狗たらしめんとするあり、又獨逸政府にて、愛爾蘭問題に付き、同情ある宣言を爲して、以て在米愛爾蘭人をして、米國の參戰を阻止せしめんとするあり、又米國人を買収して、之に米國勞働者救濟所を設立せしめ、勞働者が同盟罷工を起して生活に苦める時、之を救濟するの保證を與へしめ、以て、軍需品工場に同盟罷工を頻發せしめんと計れるあり、又米國の武器製造所の建物の地下へ墜道を通

じ、其處へ爆藥を埋めて、之を爆破せんとするあり、又米國と加奈陀間の重要鐵橋を破壊して、米國の物資加奈陀に入るを妨げ、又重要地の鐵道を破壊して、加奈陀兵が歐洲に赴くを阻害せんと圖るなど、至れり盡せる陰謀なりき。其の中、千九百十六年四月ウオルフラオン、イーゲル逮捕事件起りて、一層米獨間の悪感を増せり。大戰勃發後間もなく、ウオルフ・フォン・イーゲルなる者、紐育市中に事務所を設けしが、其の事務所には金庫ありて獨逸帝國の紋章を付けたり。其處に一人の番人ありて出入口を監視せり。紐育官憲にては之を怪しみ、注意を怠らざりしが、千九百十六年四月の或る夕方、主人イーゲルが事務所の書類を整理して、之を金庫に收めんと其の戸を開ける處を、突然紐育警察の私服員四名飛び込みてイーゲルと格闘の上、之を押へて其の書類を残らず押收せり。之を検するに獨探に關する證據多數現はれしが、獨逸大使フォンベルンスドルフは「イーゲルの事務所は大使館の支部なるが故に、治外法權の場所たり。其處へ刑事の入り込みたるは不法なり」として、イーゲルの解放と書類の返付とを要求せり。されど、其事務所は、一人より借受けたるものにして治外法權なき事證明せられ、米國政府は、獨逸大使の要求を拒絶せり。之が爲めに、米獨間の關係頗る圓滑を缺く事となれり。

第四章 ウィルソン大統領の國論統一運動

米人間の平和論

獨逸には、米國に對して到らざるなき陰謀を行ふと同時に、一方には、其の軍需品輸出を禁止せしめんが爲めの運動を行へり。是には主として獨逸系米人をして表面に立たしめたるなるが、純米人間にも、此運動熱心者少からずありて、一時、國內に論戰盛んなりき。現に米國上院議員ヒッチコックの如きは、歐洲開戰後間もなく、上院に「法律案を提起して曰く、「軍需品、武器、彈藥、其他各種の爆藥を我が合衆國と平和關係に在る外國に供給する事は、其の個人の行爲たる」と團體行爲たるを問はず、凡て違法たるべし」と。其の他にも之に似たる法案を議會に提出せる米人二三あり。其の主旨とする處は、今次大戰勃發以來、米國人にして軍需品其他を歐洲諸國に賣りて奇利を博せんとする者多々あるも、我が國より軍需品其他を歐洲に輸出するは、是れ歐洲の戰爭を長引かすものにして、我國民の持論たる歐洲の平和とは逆行するものなり。此の際我が國

にして、交戦諸國へ一切軍需品其の他を送らざるに於ては、彼等は軍隊を給養する事能はずして、戦争自ら止まん」と。其後ヘンリー・フォードなる人の「平和の船」派遣運動あり、此人は米國の自動車王として知られ、國中最大の自動車製造所を有し、一日二千臺の自動車を造ると言はれたり。彼れは、此際、オスカー二世號を借り入れて、米國知名の士を載せ、之を歐洲に派して、各國人士と意見を闘はし、依つて戦争中止を勸告せしめよと唱へたるなり。斯くて彼れは、千九百十五年十二月四日、百四十八人より成る一團體を率ゐ、オスカー二世號に搭じて丁抹に向ふ。一行はクリスチャナに至りしに、フォードは一人別れてベルゲンに至り、突如單身歸國せり。是れ病氣の爲めと稱せり。斯くて此の平和運動は夢の如くに終れり。

米國の國防運動

千九百十五年四月五日、獨逸大使は、米國政府に抗議して曰く、「米國より食糧を獨逸に輸送せる船舶は、途中英國艦の爲めに押收せらるゝ間に、英佛へ食糧を輸送する船舶は無事なるを得るの事情に在り。是れ中立國の輸出權を英國が侵害せるものなり。米國政府は、宜しく英國政府

に抗議して、爾後獨逸へも食糧輸送を容易ならしむべし」と。之に對しては、米國大統領も流石に明快なる回答を發するに由なかりき。されば、獨逸系米人中には、米國の態度をいたく憤慨せるものありて、其七日フランク・ホルトと呼べる以前ハーバート大學講師なりし者、一日、米國の大實業家として、武器製造を爲せるモルガンを訪問し、突然短銃を擬して之を殺さんとせしが、彼れは直に取押へられたる椿事あり。米人にして武器製造に關係する者、身邊の危険測られざる形勢となれり。

斯く一方に武器輸出禁止運動起るにつれて、それだけ米國の國情も重大と見なされ、對獨關係は日に増し悪化せる形勢となれり。此に於て、米國には、一種の國防運動とも見るべき警戒起れり。もと米國は、建國以來、平和を尙び、人權を重んじ、強制徴兵制度を避けて、志願者を以て少數の常備軍を置くに過ぎず。されば、其の兵役は、國民の義務に非ずして、給金に依つて活動する一種の職業なりき。されば、其常備軍も、僅か十萬八千餘人に過ぎざりき。然るに、前述の如く、千九百十六年の初夏頃より、對獨逸關係次第に悪化せし爲め、大統領ウィルソンも、或は米國が、此の戦争に参加するの時あるべきを思ひ、就いては先づ國論統一の必要なるを看取せ

り。當時一方には、平和論者少からず、又軍需品輸出禁止運動あり。其の間獨人の陰謀廣く行はれて、國論更に一致せざりしなり。依つてウイルソンは、其年一月末より中西地方に遊説して、「米國は平和を希ふものなるも、國家の名譽を毀損せらるゝ如き場合には斷乎たる覺悟あるを要す」とて、其の必ずしも姑息の平和に安んずる者に非ざるを、國民に知らしめたり。其の中三月九日墨西哥軍、米國の新墨西哥へ侵入せる事あり。是れが動機となりて、米國人の國防運動一層高まり、其の議會は正規軍十八萬六千、國民軍四十二萬五千人に守備増設の議を決せり。

然るに、其八月に至り、從來久しく形勢觀望の地位に在りしルーマニヤは、英佛の聯合側に參加して對獨宣戰を爲せしかば、其の十一月、獨逸はルーマニヤに兵を出して、十二月上旬には、其の國都ブカレストを陥れたり。當時獨逸は、既に二年半、戰爭を繼續し來り、國內食糧缺乏し、又軍需品も缺乏して人民疾苦の狀甚だしければ、此のブカレスト攻略を機とし、自國に有利なる條件を以て、講和の交渉を開く事となれり。初め獨逸には、此年二月下旬、ヴェルダンを攻略し、以て講和の機を作らんと焦慮せしも、ヴェルダンは陥らずして、却て獨逸軍敗退せしかば、今回ルーマニヤに於ける戰勝を好機として、かくは講和を急ぎしなりき。但し、聯合側にては、

今直に講和を爲す事甚だ不利の條件に終るべきを知りて、斷乎として之を拒絶せり。獨逸にては、目算外れて一時失望せしも、今後戰爭繼續の責は、主として聯合側に在りと聲明して、從來其の失へる世界の同情を回復せんと計れり。

ウイルソンの和議基礎條件發表

越えて十二月十八日、ウイルソン大統領は、此際己れ仲裁者となりて、歐洲戰亂を止めんと思ひ立ち、兩交戰國へ向け、双方の和議の基礎條件を提出せん事を求め、「戰爭の目的につきては聯合側も同盟側も大差なかるべく、此の上は各國政府の正式なる戰爭目的聲明を承はりたし」と申込みぬ。之に對して聯合側は、戰爭の目的が、双方大差なかるべしとの提言に大不服を唱へ、「聯合側は、野蠻なる獨逸國を膺懲せんが爲めに、義に據つて起ちしものなり、米國大統領の提言は、聯合國を侮辱せるにも等し」とて、猶豫なく之を拒絶せり。かくしてウイルソンの平和仲裁も失敗に歸せり。但しかく仲裁提議をなせる一方、ウイルソンは、其理想たる平和聯盟の組織を宣言して曰く、「吾人は此際全世界の平和聯盟を作りて、各國民、嚴に之を維持せん事を望

む。而して、此の聯盟を成立せんが爲めには、五項の規定を必要とす。第一は目下の交戦國相方が互角の引分けを以て和約を結ぶ事。第二は今日治者が有する權力なるものは、先天的の特權に非ずして、被治者の承認に依つて與へられたるものなれば、專制政治を廢して、民主の精神に則るべし。然らざるに於ては、君主の意志次第にて、如何なる侵略行爲も、隨意に行はるべく、是れ軍國主義の起る所以なり。故に之を打破するを要す。第三、各國民は海上への出口を與へられざるべからず。第四、海洋の自由を各國民に與ふる事。第五、武備の制限を要す」と。ウィルソンは之を議會に於て演説せるものにして、是れ後の國際聯盟の根本思想となれるものなり。然るに、聯合側にては、此の第一項の「相方互角に勝敗なく、以て平和を招來すべしとする」ことに大反對を唱へ、獨逸の如き狂暴なる國は、飽迄之を膺懲して降伏せしめざるべからずとなせり。これが爲め、折角の平和聯盟の理想も成功せず、戦局は一層進展を見る有様にて、獨逸の海上に於ける潜水艇の跋扈甚だしきを加へ、爲めに米獨の關係は、一層危険を増せり。

第五章 米獨國交斷絶

獨の自由行動通牒

形勢斯くの如くなれば、米國に於けるブライヤン一派の非戰論、相當賛成者を得たる間にも、一方には民論次第に硬化の兆ありて、上院には、「獨逸潜水艇の無警告攻撃に依る米國人殺害は以て米獨兩國間に戰爭を惹起すに十分なる原因を構成するものなり」との決議案を提出する者あるに至れり。斯かる際、千九百十七年一月卅一日、駐米獨逸大使は、米國政府に通牒を送つて、今後獨逸が全然自由の行動を取るべきを通告せり。此の通牒は國交斷絶の申渡しも見るべきものにして、初めに、獨逸が昨秋、聯合側に平和の提議を爲せしも、聯合國は之を顧みずして、戰爭を繼續するものなる故に、今後戰爭の責任は獨逸之を負ふべき必要な旨を述べ、就いては、今後獨逸の取るべき方針を示して曰く、「斯くして獨逸は、今や斷乎たる所置を取るの止むなきに至れり。過去二年半の間、聯合側は、英國の指示に基き、饑餓に由つて獨逸を屈伏せしめんと

圖れり。故に獨逸は、自己の存在の爲めに其の使用し得る一切の武器を極力使用する外なし。依つて米國の旅客船にして二月一日以後安全なる航行を爲さんとせば、必ず左の條項に準ぜざるべからず。即ち、第一、到着港は英國フルマスたるべし、第二、同港への往復はシリト島及び北緯五十度、西經二十度を経由すべし。第三、使用汽船には、船體に三條の縦線を引き、各線の幅一メートルにして、色は交互に白と赤たるべく、檣頭には、赤と白との辨慶縞の大旗を掲げ、夜間は米國の旗及び塗りたる標識が、遠方より容易に認め得らるゝ様にし、又船には照明を備ふべし。第四、毎週一回一隻の汽船を双方より出帆せしめ、フルマス出帆は水曜日たるべし。第五、米國政府は、何等の禁制品をも、該汽船に搭載せざるを保證すべく、禁制品は、獨逸の禁制品目録に依るものとす」と。

米大統領の對獨斷交宣言

此の通牒は獨逸が其の潜水艇戰を極力發展せしめんが爲めの通告にして、而も米國の威嚴を潰すものなれば、米國怒りて國交斷絶となり、聯合側に參加するやも測られず、此點獨逸は既に覺

悟を定めたるものと知らる。之を獨逸側より見るに、よし米國參戰するに至るとも、其の潜水艇政策を以て、聯合側に米國より軍需品其他物資の輸入を一切遮斷すること、寧ろ有利なり。米國參戰に決すとも、新たに兵を募りて出征の準備を爲すには、一年有餘の日子を要すべく、其間には聯合諸國を屈服せしむる事を得べし。米國にては、從來の行掛り上、かくの如き傍若無人の通牒に對して、國論沸騰せり。従前ルシタニヤ號擊沈の時以上に人心激昂し、之を以て征服者が被征服者に對する態度なりと難じ、かくの如きは獨立國たる米國に對して、最大侮辱を加へたるものなり。今は猶豫なく國交斷絶を宣言すべし」と敦圍けり。獨逸系の新聞紙は、之に對して辯護説を掲げ、又米人中にも、非戰論者は飽迄平和を唱道せしも、米國政府は、民論の在る處を察し、且つ大義名文上到底容認しがたき通牒なりとなし、二月三日午後、ウィルソン大統領は獨逸との國交斷絶を議會に宣言せり。議會は之に賛同を表し、依つて二月十四日、獨逸大使フォン・ベルンストルフは、一行百四十人と共に米國を擡退せり。

獨逸の米國掣肘策失敗

既に國交斷絶となりては、進んで戦を開く事當然の順序なれば、米國にては、今更の如く焦慮して、其の準備に取り掛れり。先づ自國の國籍に屬する船舶を外國政府又は外人に讓渡す事を禁じ、又民間諸會社の製造工場にして、軍需品武器の製作に従事するものをば、凡て政府の直屬たらしめ、他に婦人參政權擴張同盟に交渉して、參戰の曉、米國婦人を戰争の爲めに極力活動せしむるやう宣傳を成さしめ、又赤十字社にも戰時準備を急がしむるなど、國內今や多忙を極むる事となれり。然るに、獨逸側にては、米國が出兵せざる中、早く聯合側を屈伏せしめんとて、其の潜水艇に極力活動を命じたる結果、一時目覺しき效を奏し、千九百十七年二月七日の如きは、一日に敵船二十二隻を攻撃し、其の過半を撃沈せり。されば、二月一日迄一週間に撃沈せる船數六十九隻の多きに達し、此の勢ひにては、潜水艇戰に依つて聯合軍を打破る事容易なりと思はしめたり。其の頃聯合通信社の米國通信員が、伯林大學の教授にして、獨逸人多數の意見を代表せりと言はる、ハンス・デル・ブリックを訪ひしに、同教授は告げて曰く、「今次獨逸人にして米國人の製造せる彈藥の爲めに、父、夫、子を失へる者數千萬人に及び、其の他之が爲めに不具廢疾となれる青年數千萬人に及べり、貴國民は、我等の敵に有力なる武器を送れり。而して之に對する我

等が抗議は一切無効に終れり。次に我等が非戰團員の爲めに、貴國の麵麩を得んとせしに、吾等の敵英國は途中之を掠奪せり。貴國は、英國の斯かる行爲を不法と聲明せしも、之に對して有效なる抗議を爲さざりき。我が國民は益々募る反感を以て、此の差別待遇の理由を問ふものなり」と。

かくて獨逸の米國に申送れる五ヶ條は、即日より實行せらる、事となり、米國の國旗を掲げたる船舶とても、一週一回のフマスマ港往來以外は、凡て撃沈せらる、運命となれり。依つて米國は、國交斷絶と共に武装中立を行へり。即ち其の商船に武装を施して獨逸潜水艇の襲撃に備ふる事とせり。獨逸にては、是より先き、既に米國との國交斷絶を豫期して之に備ふる處あり。依つて獨逸と墨西哥と日本との三國同盟を結ぶの計略を立てたり。即ち獨逸政府、墨西哥駐劄獨逸公使フォン・エックハルトに訓令を與へて曰く、「卿は、墨西哥大統領に説いて我が獨逸と同盟を結ばしめ、之に財政上の援助を與へ、其の往年米國の爲めに奪はれたるテキサス、アリゾナ二州を奪還せしめ、一方、墨西哥大統領自發の意志を裝うて日本に交渉し、日獨間の單獨講和を結ばしめ、依つて、獨、墨、日三國の同盟を作り、日本をして背後より米國を脅かせしめよ。今や我が

潜水艇戦は、絶大の功を奏し、英國をして我れに屈伏せしむる事数ヶ月の中に在り」と。蓋し、獨逸政府は其の潜水艇戦に依り、最後の勝利を以て講和に入るの口遠からざるを思ひ、米國參戰すとも、其の出征準備成らざる中、歐洲に於て聯合諸國に和を乞はしむる事を得べしと信ぜるなりき。

第六章 米國の對獨宣戰

ウイルソン正義人道の獅子吼

此の獨、墨、日同盟の計畫米國政府の知る處となるや、政府は一驚を喫し、獨逸が其の非を顧みず、今後飽迄米國商船を撃沈するの事實現はるゝに於ては、鐵斷一下、宣戰布告を爲すの覺悟を定め、依つて、ウイルソン大統領は、三月七日に教書を發して、四月十六日に臨時議會を召集すべきを豫告せり。然るに、獨逸の米船攻撃は、早くも三月二十日頃に現はれて、其の商船三隻潜水艇の爲めに撃沈せられしかば、大統領も急に意を決し、四月二日に臨時議會召集を繰り上げる

事となれり。當日は、ウイルソン議會に現はれて宣戰の演説を爲す事とて、議場の周圍には、獨逸系米人充滿して示威運動を行ひ、開戰を阻止せしめんと圖り、又はウイルソン暗殺などの風説専らなるにぞ、米國政府にては、軍隊を以て議場の内外を警戒し、議事堂内の廊下には、和服警官堵列してウイルソンの身を保護せり。やがて、ウイルソンは登壇して開戰布告の大演説を爲して曰く、「今日獨逸の行ふ潜水艇の商船攻撃は是れ人類に對する危害なり。吾人は吾人の神聖なる權利を無視せられて之に屈伏するに堪へず、吾人の目的は平和と正義にあり。吾人に何等私利に生きたる目的なし。唯だ此の世界を民主主義の爲めに擁護せんとす。吾人は獨逸人民の友なり。從來我が米國民は平和を主義として何等征服を望まざりしも、今や此の如き平和の民を驅つて戰役に向はしむるの止むなきに至れり。是れ尤も恐るべく、忌むべき事に屬せり。然れども、正義は平和以上に貴し、吾人は正義の爲め民主主義の爲めに戦はざるべからず」と。大統領が此際、獨逸人民の友人なりと聲明せるは、是れ、米國內獨逸系人民一割を占むるが故に、國內の統一を圖る上に、甚だ必要なりしと言はる。而して米國憲法は、宣戰講和の事、議會の協賛を要する規定なれば、此の演説に對して議會は大論戰を生じ、四月五日に至りて、下院に於て之を可とする者三

百七十三人、否とする者僅五十人、即ち大多数を以て宣戦に決し、翌六日、正式の宣戦布告行はれ、大統領ウィルソンは、米國陸海軍統帥權を附與せられぬ。

既に米國の宣戦布告ありしかば、南米諸國亦之に應じて起ち、四月十日にはブラジル亦獨逸と國交斷絶を宣言し、同日アルゼンチン共和國も米國の行動に賛成する旨の宣言を發せり。越えて、十三日には、ボリギヤ國獨逸と國交斷絶を宣し、智利國は中立を宣し、ウルグアイ、コスタリカ、パナマの三國は、アルヂエンチン同様、米國の行動を賛成する宣言を爲せり。次に米國の保護國の地位に在るキューバも宣戦し、かくして南北兩米大陸殆ど全部獨逸の敵となれり。されば、米國の正式宣戦布告後二日にして、駐米澳地利公使は、自ら進んで國交斷絶を告げて歸國せり。但し澳國に對する米國の宣戦布告は、程經て後の事なりき。

さて、米國にては、一旦獨逸に向つて宣戦を布告せる以上、直ちに對敵行動を取り、依つて米國領内各港灣に在りし、獨逸船舶全部の差押へに着手せり。其の數九十一隻、約六十一萬噸に上れり。越えて四月十五日、大統領ウィルソンは、全國民に教書を發して曰く、「苟くも米國臣民たるものは、此の際、男女老幼を問はず、國家經濟の擁護の爲め、將た、世界戰爭に於ける民本主義の勝利の爲めに、舉國一致の實を示さざるべからず。今や我が米國は、最大の試練に遭遇せり。是れ當さに、吾人が舌と腕とを以て奉公の誠を盡すべきの秋なり」と。斯くして北米合衆國は、遂に聯合側の一員として、大戰に参加する事となり、其の始め、バルカンの一部たるセルギヤに起れる小紛議は、今や東西兩半球を震撼するの大慘禍となれり。

支那の對獨宣戰

是より先き、米國大統領ウィルソンは、自國の對獨國交斷絶と同時に、其の他の中立國に對しても、自國同様の態度を取らん事を勸告せしが、就中支那政府に對しては、尤も熱心なる勸誘を試みたり。即ち駐支米國公使ラインシュは、大統領の訓電に従ひ、直ちに支那政府に向つて其意を通じ、速かに自國と同一歩調を取る事、米支國交に利なると同時に又支那自らの爲にも極めて有利なるべきを説き、極力支那政府の反省を促せり。此に於て支那政府は、屢々會議を開きて、遂に國論一決、二月初め、伍外交總長は、駐支獨逸公使に向ひ、其の潜水艇の暴擧に對して強硬なる抗議を申込むと共に、一方米國公使に對しては、支那は、將來米國と行動を共にすべき旨回

答せり。

然るに、獨逸政府は、支那を輕視するの心ありて、其の抗議の因つて來る處深き根據あるを思はず、單に一時を糊塗して、支那を威壓嚇着するの猾策を取り、依つて、支那政府に告げて曰く、「我が國の潜水艇政策は、直接支那の商業を破壊する事なく、又支那人民に危険を及ぼすものに非ざるが故に、従前通り、兩國間の國交を維持するを可とせん」と。之に對し、支那は直ちに獨逸に、國交斷絶を宣言すべき筈なりしも、其の間に、權謀を挟み、此の際自國に有利なる條件を聯合側に提起し、其の承諾を得たる上にて決する處あらんとし、依つて、關稅改正、團匪事件賠償費支拂延期、四國借款の成立等を交換條件として、聯合側參加の交渉を開き、此の事大體成りて、三月十四日、正式に獨逸に斷交宣言を發せり。

支那の對獨逸戰に次いで、希臘亦獨逸に宣戰を布告せり。此に於て、從來東、西、南三面の隣接國を敵として惡闘し來たる獨逸は、今は、西半球の大國と、又全歐洲に匹敵すべき廣大の領土を有する支那をも敵とする事となれり。久しく世界の霸權を夢みたる獨逸も、遂に全世界の憎惡を買ひ、今は運命窮まれるなりき。但し、米國の參戰も、其の初めは、何等顯著なる効果を現はさず、參戰第一年には、徐々に軍備を整へ、大西洋を越えて佛國戰場に少數の新徵募兵を送るに過ぎず、唯だ聯合側の軍費と軍需品とに、多大の援助を與へたり。千九百十八年三月頃に至り、其の參戰の效果極めて顯著となれり。

米國の宣戰と食糧問題

米國既に對獨逸戰を爲したるが、元來大兵の常備軍なき國として、俄かに戰爭準備に忙殺せらるゝ事となれり。先づ、第一に國防會議を組織せしが、こは、陸海軍、内務、農務、商務、勞働の各大臣より成るものにして、他に全國各方面の民間有力者七名より成れる顧問委員を設けぬ。其の任務は、運輸、武器製造、糧食被服の供給、工業原料調査、勞働事項、土木事項、醫療衛生の七門に分れ、七人の長官各自に之を分掌せり。殊に聰明の聞き高きハーバート・フーズは食糧監督として功勞尤も大なりき。古來何れの戰爭に在つても、食糧問題尤も重要なものにして、現に歐洲交戰國にては、何れも食糧に苦み、一面之を餓戰と名づけたる程なれば、米國も參戰に當り、先づ食糧問題に注意を拂へる事當然なり。依つてウィルソン大統領は、四月十五日、敎書を

發して、全米國民に告げて曰く、「米國の參戰に就いては食糧を潤澤にする事第一重要事なり。歐洲の聯合國に十分の食糧を供給する以外、我國の出征軍にも、之が供給を十分ならしめん爲めには、現在以上に多量の食物を我國に生産するに非ざるよりは、戰爭の目的を達する事難し。故に身軍籍に入らざる者は、成るべく田園に赴き、寸尺の餘地をも利用して耕作に従事せん事を望む。同時に食糧の浪費は嚴に之を謹まざるべからず」と。米國民此の意を體して食糧問題に注意を拂ひ、其の一端として所謂戰時田園なるもの、各地方都市に作られたり。そは從來庭園として芝生を造れる土地を畑となして、小麥、玉蜀黍などを植ゑ付くるものにして、勿論市中に於ける其の産額僅少なるも、之に依りて、全國に亘り、荒蕪地を開墾するの精神を喚起する時は、之に依つて其産額を倍加し得る道理なり。同時に、食物の節約にも極力注意を拂へり。本來、米國は、天産物豊富なるが故に、人民浪費の風ありて、殘飯殘肴の空しく委棄せらるゝ處多かりければ、爾後食膳の殘物は、之を乾燥し、又は罐詰にする事となせり。更に主要食物たる小麥は、出来るだけ節約して、果實と蔬菜とを代用せしめ、又物價を公定して暴利を防ぎ、賣借み、買占めを禁じて、食糧問題を解決するに力めたり。されば、全國到る處、「戰勝は食糧に在り」と、宣傳ビラを掲げられ、食糧監督フーラーの措置宜しきを得て、米國の食糧政策は大成功を見たり。

第七章 獨軍最後の大攻勢

獨塊軍の伊國境進撃

露國に大革命起りて、獨逸は之と單獨講和を結びたる後は、其の兵を露國々境より撤し、之を西部戰場に輸送し得たり。此に於て、獨軍は、新たに聯合側に參戰せる米國の準備未だ成らざる中、疾く聯合軍を打破して、最後の勝利を得んものと、先づ南方の伊太利戰線に其の兵を増加せり。伊太利にては、先きに獨塊と絶つて聯合側に參加せる後、數々國境に兵を進めたれども、名にし負ふアルプスの山地戰とて進退自由ならず、慢然一進一退を繰り返すのみにて、抄々しき事もなく、其の後二年半に亘り、戦局上に何等の變化も起さざりしなり。然るに千九百十七年十月廿四日に至り、伊太利の陸軍大臣は、議會に於て、「自國戰線は最も安全にして何等憂ふべき處なし」と豪語せしに、何事ぞ、其夜半、獨塊同盟軍は、カボレットの町へ強襲し來り、イソソゾ戰

線を突破せり。之が爲めに伊軍四十個師團の兵は全線崩壊して西方に退却し、獨逸軍は、十一月一日、タリヤメント河畔に進出し、同日迄に約二十萬の浮虜と千八百門の大砲とを鹵獲し、更に追撃して、十一月九日、ピヤゴ河線に殺到せり。伊軍は此の河流に據つて極力防禦せると英佛の援軍到着せし爲め、漸く敵を喰ひ止め、茲に戦局は又も持久對峙の形となれり。されば、此度の戦に於て、伊軍の損失は、兵員二十五萬即ち其の總兵力の三分の一に當り、大砲二千門を失へり。

獨將ルーデンドルフ進攻を決す

此の頃又獨逸は、伊太利國境に攻勢を取ると同時に、西方佛國々境にも大攻勢に出でん事を計畫し、ルーデンドルフは、千九百十七年十月二十一日、即ち、伊太利に大攻勢を取れる前日、既に幕僚に命じて之が作戰計畫を立てしめたるなりき。其の目的とする處は、米國陸軍の到來に先んじ、其の優勢なる兵力を以て、一大決戦を行はんとするに在り。就いては、先づヴェルダン要塞を奪取せんか、或ひは英軍の戦線を打破せんか二者何れを先にすべきかに付き議論起り。ルー

デンドルフは後案を採用し、之が決行期を來春二三月の頃と定め、就いては、十一月の末より露國方面の兵を西方に移し、千九百十八年三月中旬には、二百十個師團を西方に集中せり。斯くて獨逸の兵數は、聯合側に比して五十萬人の優勢となれり。

愈々獨逸が攻勢を決行せるは、其の三月廿一日なりき。是れ獨軍最後の攻勢にして、獨將ルーデンドルフは、「予は四月一日にはパリに在つて戦勝の祝盃を擧ぐべし」と豪語せりと言へば、彼等は、最後の攻撃を以て、一舉パリを屠らん事を期せるものにして、其兵士は凡て新調の軍服を着けたりといふ。

抑々、獨軍此度の攻勢は、滅せんとする燈火の最後の光りにも似たり。顧みれば、獨軍第一回の攻勢は、マルヌ河畔に於て挫折し、第二回は、エルダンに於て失敗に歸せり。其後獨軍は、ランス・サンカンタン・ラフェール線に陣地を退け、最も強固なる防備を成せり。是れ即ちヒンデンブルグ線にして、此の堅實なる防禦線に對しては、英佛聯合軍も手を下すに由なく、兩軍睨み合ひの體なりしが、今や獨軍は猛然起つて、第三回の最後の攻勢に出でたるなりき。

フオッシュ 將軍聯合軍の總帥となる

獨軍今回の作戦には、英佛兩軍の連結防備點最も薄弱なるべきを思ひ、此の點に向つて楔狀突撃を行ひ、以て一方には佛軍を巴里に壓迫すると共に、他方、アミアンを衝いて、英軍をカレに潰散せしめんと圖れるなりき。又獨軍は、新たに鑄造せし長射程砲、口径二十四珊の巨砲を用ひて佛軍を威嚇し、其彈丸は、百 籽 を飛んで巴里市中に落下し、いたく佛人を驚かせり。而して、獨軍の進撃は、三月二十一日より十日間必死の奮闘に出でしが、三十日に至りて豪雨襲來し、連日止まず、戰鬪困難なりしかば、獨軍も一時攻撃を中止して連日の疲勞を癒やせり。是れが爲め、聯合軍、三月三十日以來、小康を得て、防禦を固くし、佛のフオッシュ將軍を擁して全軍の總司令官となせり。是れ聯合軍に於て作戦の統一を圖るの主旨にして、今回獨軍の大攻勢以前より、既に此議ありしが、今や聯合軍の大危機に際して、遂に斷行せられしなり。

第八章 聯合軍の反撃

兩雄の角逐

今次世界大戰既に四年有餘に亘り、猛將勇卒之に參加せる者千萬を越えたるも、之を大局より觀れば、此の戦は、佛のフオッシュ元帥と、獨のルーデンドルフ將軍との角逐に外ならず。兩雄の策略妙算は、往年のナポレオン、ウエリントンを凌駕し、古來未だ斯く迄大仕掛けなる戰鬪を見ざりしなり。之を仔細に檢すれば、這次大戰中、兩軍勝敗の機を藏せるの激戦多々なりしと雖も、聯合軍に取つて尤も危険を感じるもの、今次ルーデンドルフの突出戦に如くはなし。此の突出戦は、ルーデンドルフが、多年蓄積せるの努力を以て、ヒンデンブルグ戦線以外に突出を試み、其の全力を盡して運命を一舉に決せんとせるもの、是れに對して佛元帥フオッシュが、神機妙算能く海嘯の如き獨軍の進出を阻止し、却つて遂に、之を壓迫して獨軍の大部を佛國領土外に驅逐し、ラインの退路を遮斷して、遂に獨軍をして屈辱的休戦を乞はしむるに至らしめたるの

偉業、鬼神其の壯烈に泣かん。英雄の名常に故人を思はしむるも、今人却つて古人を凌ぐの證據に顯然たるを見る。歐米の記者筆を揃へて賛嘆して曰く、「フオッシュ將軍なかりせば、四年間に亘つて、惡戰苦闘、僅かに戦線を持堪へたる三百餘個師團の聯合軍を救ひ、獨逸の大軍をラインの彼岸に窮追する事を得ざりしならん」と。兎に角、此の大戦に對して、尤も興味深きは、ルーデンドルフ、フオッシュ兩將の用兵戰略上の對比なり。

ルーデンドルフの戰術

先づ攻勢に出でたるルーデンドルフの戰術を検するに、彼れは、常に楔狀に敵の一地點を突破するに力めたり。而して、彼れは、繰返し同一戰術を用ひたる爲め、フオッシュ將軍の炯眼、早くも夫れと察し、豫め之に備ふるを得たり。而してルーデンドルフが、其の突撃を試むるに當り佛軍をして、備へを立て直すの暇なからしむべき場合に、却つて多くの時日を経過せる爲め、佛軍は、敗残を收拾するの餘暇を得たり。是れ、獨軍の強襲をして殆んど無意味に終らしめたるの憾みあり。之を實地に檢せんに、獨軍の第一回突撃は、三月二十一日に開始せられ、其の第二

回は、四月九日にして、其間二十日間を経過せり。第三回は五月廿七日にして、其間四十日を隔たり、第四回は、六月九日にして、十三日の間隔あり。第五回は七月十五日にして、二十五日の間隔あり。今夫れ、最後の奮闘として強行總攻撃を行ふに當り、此の如く間歇的の突撃を行へる事、其の準備の都合上、萬止むなかりしならんも、是れ戰術上の大失態ならずんばならず。

次に、ルーデンドルフ將軍の失策として非難せらるゝは、其の戰術が固定せる一方面に局限して、變通の妙を缺けるの點に在り。其の初度の突撃法不成功に終れる場合、次回には計略を變へて、敵の意表に出づること、臨機應變の妙計なるべきに、ルーデンドルフは飽迄執拗に同一攻撃法を踏襲せる爲め、聯合側に於ては、疾くも獨軍の豫定計畫を看破して、之に應戦し得るの利ありき。執着心強きは獨逸人の通性にして、其の成功の一因たりとは言へ、這次突撃戰に於ては、學術の研究若しくは自然物に對する探究と異り、敵の爲めに其の肚裏を看取せらるゝ事、失敗の原因たらんはあらず。加ふるに、獨逸人は、自己の優秀を誇り、己が戰術の巧妙を自負するの心強く、從來四年間、多くは戰に勝つて深く敵地に侵入し得たるの勢ひに狎れ、己れの戰術を以て、完全無比なりと信じ、聯合軍を與みし易しと見たる慥あり。是れ心驕れる過失にして、

其の戦術は常に一定の型に陥り、爲めに時間を空費し、兵力を消耗する事多く、遂に最後の惨敗を招げるなりき。

フオッシユ元帥の籌略

轉じて、フオッシユ元帥の用兵を見るに、彼れは、ルーデンドルフの楔状突進法に對して、多く新月形の陣を張れり。斯くして、彼れは、敵戦線の左右兩側に喰ひ入り、其の一部隊を北方に進むると共に、他の部隊を南方に展開せしむる事を得たり。此の戦法は、ルーデンドルフの楔状突進の如く、一局を深く穿つ事能はざるも、變通自在の妙ありて、敵を牽制するの利あり。ルーデンドルフの戦術に比して一層妙味あり。而して、其の突撃法は連續して之を行ひ、敵に備へを立て直すの暇を與へざりき。彼れは七月中旬より攻勢に轉じて、爾後休戦時に至る迄四個月間、逐次十回に渡つて猛襲を行へり。之を時日に檢すれば、第一回は七月十一日、第二回は七月十五日、第三回は七月十八日、第四回は八月四日、第五回は八月七日、第六回は八月八日、第七回は八月二十二日、第八回は九月八日、第九回は九月十六日、第十回は、十月十日より行はれたり。疲

弊し切つたる獨軍は、此の如き連續的急突撃を受けて防ぎ得ず、全軍總崩れに敗退せるも當然なり。

次に考ふべきは、戦闘目的の確立なり。夫れ戦闘は、一定の目的を確立して前進を開始すべきものなり。初め、三月二十一日、ルーデンドルフの企てたる第一回の突撃は、明かに軍略的目的を有し、彼れは、英佛兩軍の連接點を突破して、然る後巴里若くは沿海諸港を畧せんとせるなりき。然れども、此の目的は達せられざるに至つて、彼れの其の後の數次突撃は、唯だ暗中摸索的に盲動せるなりき。期する處は、唯だ漠然と聯合軍の戦線に威嚇を與へんとするに在りき。これに反してフオッシユ將軍の戦法は、常に一定せる目的を失ふ事なかりき。かくして、彼れは、能く最終の目的地點に押し進めるなり。殊に最後の目的地點たるメジールに對しては、中央及び兩翼の三面より突撃し、獨軍の大部隊を壓迫し、他方ローレンに侵入して獨軍の退路を遮斷せんと試みたる大計畫に至つては、一糸紊れず、波濤の層々相拍つて岸を噛むが如く、何物をも粉碎せざれば止まざるの概ありき。更に又、ルーデンドルフの戦法は、常に幾分の無理あり、冒險性を帯び、其の冒險成功するを俟つて主要目的を定めんとするの傾向ありき。従つて部下の諸將

も意外の苦戦に陥るを常とせり。然るにフォッシュ將軍の戦法に至つては、初めより一定の方針を立て、行動を起すが故に、理詰めの合戦にして、意外の過失を招くの虞れなかりしなり。

フォッシュ將軍の徳望

尙ほ最後に記憶すべきは、フォッシュ元帥が偉大なる人格者にして、絶大の包容力を有せる事なり。聯合側には、有名なる英將ヘイグ元帥あり、米將パーシングあり、伊將ディアツありき。其他自國に於て一流に數へらるる名將、總出の形なり。彼等は、各自、自國の大軍を引率し、大の權威を以て戰場に臨めるなれば、他國の指揮官の下風に立つを喜ばざるは當然にして、全軍の統帥權をフォッシュ將軍の手に收むるが如きは、容易の事に非ず。最初は、英軍も、フォッシュを總元帥となす事に付き不平を唱へて應ぜざりしも、やがて、其の人格に化せられて、ヘイグ將軍以下、悉く心服する事となれり。従つて、米軍、伊軍、白國軍も、甘んじてフォッシュ元帥の制定下に立ちしなり。其後、米軍、アルゴンヌ東方に於て、獨軍の爲めに包圍せられて難局に陥り、爲めに甚だしく佛軍の係累を起せしかば、性急なる佛國首相クレマンソーは、フォッシュ將軍に

向ひ、「彼の米軍は、甚だ手足纏ひなるが如し。されど、其の罪は、其の兵士に在るに非ずして、司令官其人を得ざるに在るが如し。貴下速かに理由を具して、ウィルソン大統領に注意を促されたし」と言ひしに、寛厚なるフォッシュ將軍は、自若として、「何れ熟考すべし」と答へぬ。翌日に至り、彼れはクレマンソー首相に書を寄せて曰く、「米軍の参加は、甚大の價値あり、此の大戦の決着は、一に米軍の力に係るが如し。今日米軍は、未だ戦に馴れざるが如きも、日々奮闘、功を積みつゝあり。終局の勝利の爲めには、米軍決して疎かにすべからず」と彼れは、寛容以て他をして我が用を爲さしむるの度量を着せり。由來諸國聯合の兵は、統一尤も困難なるものにして、其の行動稍もすれば脆弱なるを免れず。然るに、這次大戦の終末、聯合軍最大の危機に於て、能く其の統一維持せられ、諸軍奮闘、以て獨軍を撃退せるもの、一に、フォッシュ元帥の統帥宜しきを得たるが爲めならん。元來、同元帥は、尤も公平なる人物にして、不偏不黨、一視同仁、以て其の職務を盡せり。彼れは、英米、何れの軍隊に對しても自國の軍隊と差別を設けざりしかば、最初佛人を指揮官に頂く事を快しとせざりし英人も、彼れに接するの度を加ふるに従つて、彼れに信賴するに至り、後には、一人の不平を唱ふる者なきに至りしとぞ。

加ふるに、彼れ沈勇大度、危急に際して嘗て狼狽するの風なく、事に臨んで、用意周到、沈着に處置せり。其の直覺力極めて鋭敏にして、事急なるの際も、炯眼一閃、吐嗟の間に、其の向ふべき處を直覺し、全力以て活路を開くに長ぜり。要するに、彼れは、明敏果斷なる武將たると共に、又有徳の君子人なるが如し。

獨軍の總敗退

さても、聯合軍は、フォッシュ將軍を總帥に頂きてより、全軍の號令始めて一途に出づる事となり、作戰攻防共に連絡統一を得て、戦線大いに整ひしが、同時に、其の頃より米國の軍隊續々佛國に上陸して、戦線に現はれしかば、聯合軍の士氣頓に振へり。かくて、米國が其の四月より七月迄の間に約百萬の兵を送り、以て聯合軍に大なる援助を與へたり。

かくて、獨軍は、三月下旬の大攻勢後、百十八日を経て、七月十五日に至り、又大攻勢を取り、數ヶ處に於てマルヌ河を渡る事を得たり。然れども、此時、ルーデンドルフ麾下の兵は、三月以來、數回の強襲の爲めに、多大の損害を蒙り、今は餘す處僅かに百四十五師團と他に豫備隊

十五ヶ師團あるに過ぎず。其兵亦疲勞して前日の銳氣なし。斯くと見て取つたるフォッシュ將軍は、時機熟せりとなし、急に一大反撃を試むる事となれり。依て彼れは七月十八日、エーヌ河より、マルヌ河に至る戦線に於て攻勢に轉すべきの令を發せり。是れ四年前のマルヌ役を繰返せるものにして、勝ち傲れる獨軍は、又も此處にて破綻を生じ、其の側面を脅かされて、再び河を渡つて退却するの止むなきに至れり。かくて八月初旬には、攻防地を代へて、獨軍は窮餘の守勢となれり。是れより後、獨軍の軍紀弛廢して又收拾すべからざるに至り、ルーデンドルフも、本國政府に向つて、具さに軍狀を報告し、「最早戦勝の見込なし、此上は外交手段を以て戦争を停止する他なし」と訴へたり。此間に、聯合軍は、獨軍を追撃して、十月には、ヒンデンブルグ線を奪ひ、獨軍は國境内に追ひ込まるゝ形勢となれり。

第九章 中歐同盟の崩壊

ブルガリヤの降伏

這次大戰に於て、聯合軍側は、元來諸種の雜駁なる要素より成れるもの故、兎角一致を缺けるに反して、獨逸を中心とせる中歐四國同盟側は、軍事上は勿論、財政上、外交上にも、殆んど遺憾なき迄に、能く統一を保てるなりき。さりながら、戦勝つ者は遂に優者たり、戦敗る者は劣者として、其間に何等かの破綻を生ずるを免れず。さしも統一堅實と見えたる中歐同盟も、軍事上の敗北より延いて、外交上の破綻を來たし、遂にノルガリヤが同盟を脱して、單獨講和を結ぶ事となれり。此に於て、獨逸側の勢力の一角碎け、やがては其勢力全然崩壊するの前兆を示せり。顧みれば戰亂勃發以來既に四年、昔時の閑散なる戰爭と異りて、寸分の隙もなく緊張せる最新式の戰爭に於て、四年の歲月は、國費人命の消耗測り知るべからざるものあり。交戦列國何れも之が爲めに困憊の極に達せるに際し、千九百十八年の旱魃は、全歐を飢饉に陥れたる中にも、ブルガリヤは最も凶作にして、人民飢に泣く者日に繁し。

斯かる國難の最中、ブルガリヤは更に其の與國たる土耳其と新たなる爭端を開ける爲め、一層の難局を出現せり。それを如何にといふに、始め、千九百十八年五月七日、ブカレスト平和條約締結せられしが、ブルガリヤは、國境の改訂につきて、端なくも土耳其と衝突せるなりき。即ちブ

ルガリヤにては、北部ドブルヂヤ及びマリツア河を其手に收めん事を要求せるに對し、土耳其は飽迄之に反對せるなり。初めブカレスト條約にては、ブルガリヤは、先きに千九百十三年の條約にて失へる南部ドブルヂヤを取戻せるのみにて、北部ドブルヂヤの地は、四國同盟に於て之をルーマニヤより譲り受くる筈なりき。依つてブルガリヤは、更に之を自國に獲取せんとの意圖なりしも、土耳其政府は之をブルガリヤに與ふるを欲せず、獨逸は、之が調停に困じ果て、寧ろ之を土耳其古、ブルガリヤ兩國の共同管理に委せん意向なりき。更に又、アドリヤノーブル附近のマリツア河右岸及び其の下流左岸の土地は、獨逸が、千九百十五年の秋、ブルガリヤを中歐同盟に加入せしめたるの好餌として、土耳其を強要して割讓せしめたる處なれば、土耳其は之を回復せん事を要求して止まず、土耳其、ブルガリヤ兩國の爭端、其の由來甚だ深きものあり。今や露西亞とルーマニヤ已に潰敗せるが故に、土耳其は此機に乗じて、バルカン及び西部亞細亞に於ける自國の舊地位復興を念とすれば、他方ブルガリヤは、己れバルカンに於けるスラヴ民族唯一の勢力者として、敗餘のセルギヤ、ルーマニヤを包括して、大ブルガリヤ國を建設せん事を望めり。

然るに、獨逸政府は、マリツア河岸の土地に關しては、土耳其の身方となりてブルガリヤを壓

抑せしかば、國內の親獨派は民望を失ひ、爲めに千九百十八年六月には、久しく政權を握れる親獨派の内閣倒れて、平和主義の反對黨内閣起り、其結果、サロニカに駐屯せる聯合軍の勢力次第にブルガリヤ國內に侵潤するの形勢となれり。此に於てブルガリヤの國都ソフィヤ駐劄の獨逸使臣は、事態重大なるを看取し、本國政府に向つて頻りにブルガリヤ方面に兵力を増加するの急務なる由を提議せしも、當時獨逸の陸軍首脳部にては、佛國戰線に全力を傾注せる際とてブルガリヤを顧みるの暇なかりき。サロニカの聯合軍は此の機に乗じて兵を進め、九月中旬、ブルガリヤ軍を大いにマセドニヤ（マケドニヤ）に破れり。ブルガリヤ政府は、此の大打撃に堪へかね、其の月の末、倉皇中歐同盟を脱退して、協商側と單獨講和を爲し、其武器を引渡し、其の軍隊を解散し、其占領地を凡て撤退しなければ、聯合軍は直ちにブルガリヤに侵入して鐵道を占領せり。此に於て十月初め、ブルガリヤ王は位を皇太子に譲りて退隱せり。王、在位三十一年なりき。かくして聯合軍は、今や南方より埃地利國を脅し得る事となり、先きに中歐同盟と單獨講和をなして、一時聯合軍を不利に陥れたるルーマニヤは、今や再び該同盟と絶つて聯合側へ復歸する事となれり。

土耳其の單獨講和

此に於て、尤も窮境に立てるは土耳其なり。先きにブレスト・リトウスクの平和條約成るや、土耳其は、俄然として自己の前途に、大なる希望輝けるを見たり。即ち該條約の結果、露國は、殆んど國家組織を失ひ、其の軍備消滅したれば、土耳其は、黒海を己が庭園の湖水なりと豪語せし往時の偉大さを回想し、此の機に乗じて、アーメニヤ及びカザカスを制し、尙ほ進んでは新たに建設せられたるウクライナ國より、其のクリム（クリミヤ）地方を奪回せん事を企圖せり。當時獨逸政府は、土耳其に對して、英國の勢力をメソポタミヤ其他の地より驅逐せん事を要求せしも、土耳其政府は、かゝる困難なる遠征に従事する事を好まずして、却つて黒海沿岸を經略して、新土耳其領土を此の方面に築き上げん事を望めり。斯くして、土耳其は、其の軍力を黒海及び波斯方面に集注せしかば、英國は之を閉却しがたくなりて、大いに土耳其に壓迫を加へ、千九百十八年七月には其の飛行隊を進めて、コンスタンチノールを襲撃する事頻々たるに至れり。從來土耳其の小亞細亞領土中、亞刺比亞は、此時已に獨立し、メソポタミヤ又敵の爲めに占領

せられ居たり。而して埃及を策源地としてパレスティン（パレスチナ）に派遣せる英國遠征軍は、千九百十七年末エルサレム（ジェルサレム）を略して、其の地に屯營せしが、千九百十八年初秋進んでシリヤを略し、十月下旬には、アレツボを陥れ、逃ぐる敵を追うて遠く土耳其の本據たる小亞細亞に侵入せん勢を示せり。此の際、既述せる如く、土耳其の同盟たるブルガリヤは、九月二十二日、聯合側に降りたれば、土耳其は、頗る困難の地位に立てり。其は、戰鬥力の缺乏よりは、寧ろ食糧問題の行き詰りに起因せるものにして、ブルガリヤが、同盟を脱退せる爲め、土耳其は、獨逸よりする物資供給の途を閉塞せられたるなりき。かくて、土耳其は、今やルーマニヤ及び黒海を經由して交通を得る事となりしも、此の時、ルーマニヤにてはブルガリヤを通過して自國に入り込める佛國軍の委員らの勧めに基き、再び起つて獨逸同盟側に對するの戰爭を開始せんとするの氣勢を示せり。かくては、土耳其は、全く孤立無援の境遇に置かるべく、當時、パレスティン方面の聯合軍は、破竹の勢ひを以て土耳其軍を撃破しつゝ、あり。メソポタミア方面に於ても、土耳其軍の戦況は極めて不利にして、投降者及び脱走者續出し、更にバルカンに在る聯合軍は、其の一支隊を進めて、ブルガリヤよりコンスタンチノーブルの背面を衝かんとす

るの説あり。土耳其人民は四面楚歌の聲を聞くの思ひにて、既に五年間の戰爭に、疲弊の極に沈める國民の輿論は、親獨逸政府の主戰方針に對して、今や激烈なる反抗を向くる事となれり。されば、土耳其に滞在せる獨逸の將校らも、市中を通行する時は、群衆の爲めに侮辱せらるゝ有様にて、其の内閣も存続を保ち得ざる事となり、十月初旬には、親獨逸内閣倒れて講和主義の聯立内閣之に代り、其の首相イゼット・パシヤは、就任劈頭、新内閣の政綱は、第一に講和に向つて進むに在り」と聲明せり。

顧みれば、土耳其政府が英佛多年の恩誼に背きて、獨逸側に身方せるは、其の實露國の南下して自國を侵略せん事を恐れたるに在り。然るに千九百十七年三月の露國革命以來、土耳其は此の憂懼を一掃し得たるのみならず、翌年三月三日に調印せるブレスト・リトウスク講和條約に於て、土耳其は獨逸側と共に、戰勝國として露國に臨み、千八百七十八年、露國の爲めに奪はれたる土地をも回復する事を得て、一時國民歡喜せるなり。されど、其の喜びも束の間にて、從來露國南下の脅威を自己の立脚點とせる親獨逸派は、此の時より漸時勢力を失ひ、親英佛派は次第に擡頭する事となり、爲めに國內政權の軋轢起り、同時に戰線に於ける土耳其兵士の敵愾心も、其の